
白い銀河に謎の宇宙 2 - 惑星サンプル効用編 -

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い銀河に謎の宇宙2 - 惑星シャンプー効用編 -

【Nコード】

N4440D

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【SF/ラブコメ/全100話】 「あたし信じてる」 そのれは『惑星シャンプー』から始まった、真木と寿也の小さな恋の物語。宇宙の何処にあるかもわからないミルキーウェイ星と星人の謎に星や空を見上げながら坦々ほのぼのちよつとラブコメしつつ各1話1000字前後で迫ります。

第1話(少年Tの行動)(前書き)

前作はこちら

<http://ncode.syosetu.com/n4046c/novel.html>

【】 白い銀河に謎の宇宙

第1話（少年Tの行動）

惑星シャンプー。不要なもの・汚れなどを洗い流す。または分解してくれる液体。

必ず ご使用後は『衛星リンス』でケアをして下さい。

軽井真木はミルキーウェイ星人。なのに、本人よくは覚えていないが小さい頃に地球に居た。公園のゴミ箱をあさって食べ物を探していたところを、教師・軽井岩生に拾われ保護され時間を経て一緒に住むようになったのだ。

発見された始め、真木が手に持っていたのが『惑星シャンプー』。使った事は無い。

当時の真木は超おデブで、もはや今は仮装用ぐらいにしか存在しないであろう黒の牛乳ビン底メガネに、貧乏ドン底、いじめられていたので人生もドン底だった。

そこで。

突然「いつそ死んでやる！」と決心し、地元セイヌの背犬川というソコソコ有名な川に架かる大橋の下で、『惑星シャンプー』を……何と、全部一気飲みした！ ゴクゴクゴク。

そして本人の お望み通り、もがき苦しんで倒れたわけだが……。

救いの手が……さしのばされた。

「オイオイお前、まさか『惑星シャンプー』を“飲んだ”のかっ！
？ ……何て奴だ。小さかったけどミルキー電波をキャッチしたんで来てみたら……」

と、倒れている真木の側に落ちていた、空になった『惑星シャンプー』のボトルを手に取り、興奮する少年T。

ミルキー電波を受信できたという事は、少年もまたミルキーウェイ星人。以下、ミルキー星人と略させて頂く。

少年Tの とった次の行動。

何と少年Tは、自分の持っていた『衛星リンス』を真木に飲ませた。

惑星シャンプーの出所も謎だが、衛星リンスの存在も謎に包まれたままだ。

そして……飲まされた真木は いまだグツタリとしたままだった。ただ、青白かった顔には赤みが戻ってきたようで。

「俺の理論じゃ助かるはずなんだが。まあいいや、起きると面倒だし」

と、少年Tは一度は手にした空の惑星シャンプーのボトルを自分の服で拭いた。それを元の地面に戻して「じゃあな」と言って去って行った。

まだ起きない真木。

起きなければ、物語は『ユーレイ真木の探偵ファイル』に すり変わってしまう……。

……大丈夫。真木は目覚めた。

よって、物語の始まりである。

第1話（少年Tの行動）（後書き）

【あとがき】

連載当時は毎日更新で1話1000字前後で頑張っていました。
もうやりません（しんどい）。

100話めまで辿りつける読者様を尊敬する作者。

第2話（進化なのか？）

軽井真木は地球に「来た」のか「居た」のかは不明である、ミルキー星人。

死のうと惑星シャンプーを飲み干すが、失敗。生還してしまう。誰かが「衛星リンス」を飲ませたんだ……しかし、その事は真木は知らない。

少年Tの事も……。

目が覚めた真木は、姿が変わった。

「目が覚めたか、真木。よかった……」

と、家の布団のすぐ脇で、教師・軽井岩生は安堵した。

「ここは……あたし、生きてる」

真木はキョロキョロと目を動かし、思い出してきた記憶を辿って自分の今の状態を把握した。

ここは自分の家で、あたしは生きている……。
何で。

「いつまでたつても帰って来ないから、心配して近所を捜して……見つけて、まではよかったんだけど」

教師・岩生は自分の手に持っていた、空になった「惑星シャンプー」のボトルを見つめた。

「窓、見てみる」

教師・岩生に　そう言われ、真木は　まず眉をひそめる。

いいから言われた通りに起き上がって横の窓ガラスを見ると……
「何コレ」

夜の窓に映った自分が見える。
真木はスリムになっていた。

教師・岩生がココで真木の目が覚めるまでの間の　ちょっと目を
離した際に。

1・2・3……ハイ、と振り返った時に。

真木の姿はおデブから超スリム体型に、進化していたという。

……いや、進化なのか？

繰り返そう。『惑星シャンプー』の効用を。

『不要なもの・汚れなどを洗い流す　または分解してくれる液体』

「お前、無事なのか。本当に」

教師・岩生は疑わしげに今度は真木を見つめた。と、言われましても……と表情で返事をする。真木にそれ以外、性格が変わったとか珍芸が可能になったとか、変な所は見あたらなかった。

いや、姿の変貌が変すぎる。

「お前がミルキー星人だとバレちゃまずいで、病院にも　むやみに行けないし。どうしようかと悩んでいる。とりあえず、無事で何より」

いや、だけど姿が。

「このシャンプーは　いつか俺が肥満中年型メタボ星人になって死にたくなったらイチかバチか飲んでやろうと秘蔵空間にしまっておいたんだ。でももう空っぽ。くやしいが、真木が無事ならいい」

両手で顔を覆う。

「無事でいい……ぐっすん」

よほどくやしかったのか教師・岩生。ちなみに秘蔵空間とは彼の

タンス。

「あたしは平気よ。くやしけど元気よ。でもあたし、どうなっちゃうの……」

今後の事を考える。超スリムになった自分。

「学校に行け」

真木の第2の人生が始まった。

第3話（真木の美女伝説）

真木は、美女になってしまった。

どこかの誰かが言っていた。「彼女から金色のオーラが見える」と。

真木が街を歩けば皆ふり返る。都会に行けばモデルや宗教など多数にスカウトされる。

知らないおばあちゃんに拝まれる。店で何かをオーダーすれば伝説のカクテルが生まれる。

「冗談じゃないっての！」

真木は逃げるように家に引きこもっていった。

最初は騒がれていた真木の美女伝説も、時とともに75日くらいで消えていった。

親代わりだった教師・岩生はホツとする。自分の安月給では引越そうにも逃げるに逃げられず。「学校へ行け」と適当に言った事を後悔していた。

ここで、真木は何故モデルなりTV出演なりなんなりして一発儲けようとしなの？ という疑問が生まれるが……。

真木はこの時まだ10才。訂正、美女ではなく「美少女」だった。さらに、美少女になる前はイジメられていたという全く逆の人生だったのだから、このギャップについて行けず人間不信に陥るのは当たり前。騒ぐ世間からは逃げるしかないのだ。

教師・岩生は小学校教師。真木の通っていた学校に勤めている。

拾った子とはいえ稼ぎに利用するような大人ではない。教師・岩生はズルくない、お金には目はくらまない！ ……はず。

「お、10円見つけ」

教師・岩生は家のアパート前に落ちていた硬貨を拾い、瞬秒で服のポケットにしまう。

「それじゃ行ってくるからな、真木。今日もしっかりしてるよ」
アパートの2階を見上げながら、そう言葉を出す。
学校へと向かった。

教師・岩生はミルキー星人に対しての理解は深かった。何故なら、友人にミルキー星人がいたからだ。

実は、『惑星シャンプー』の効用もその友人によって知っていたわけである。

教師・岩生にはこれだけは言える。

教師・岩生は真木が大事だった。親として人として。

……なんて事は ちつとも気にせず、真木は布団でグースカ寝ていた。

起きた頃にはもう昼前。いつも通りの朝のような昼のような気分を迎え、布団をたたんだ。そして軽く伸びをした後、ハタと台所で目を止めた。

……台所の上に置いたままの、水色の布に包まれた弁当箱を発見。
「うっわ……忘れていったんだ。……ドジ」

届けてあげるべきか食べてやろうとも思ったが……さんざん迷って届ける決心がついた。

いざ出陣じゃ。

変装して。

黒ヒゲ付きの鼻メガネ、マスク、茶色いくすんだロングコート、帽子、黒ブーツ。

……怪しさ全開。だが悲しい事に本人は気がついていなかった。

第3話（真木の美女伝説）（後書き）

【あとがき】

「小学校教諭」の方が一般的かもしれませんが……響きの好みで「教師」と呼ぶ事に。

「しょうゆ」みたいですね。ああくだらない。

第4話（由高寿也）

真木はそのままのいでたちで、学校へと向かった。すごい勇気だった。

途中、犬に吠えられたり、子供に指を指されたり、「シッ！ 見ちゃいけません」と親が子供を叱る場面が見えたりとした。

真木が そんな調子で歩道を歩いていると、突然おまわりさんから尋問を受けた。

「ちよつと君。まだ小学生だよ……ね？」

「ハ、ハイ……」

真木はびっくりして固まってしまった。「あ、あの。これから学校に……」

嘘では無い。これから教師・岩生に弁当箱をお届けに行くのだ。

真木、参る。

「今から？ そんな格好で？」

おまわりさんが自信を持って言えないほど、小学生にしては怪しい服装。

おまわりさんの目が光る。メガネはかけていない。

「そいつ、僕の友達です」

横から声がした。こっちは普通の少年。

ランドセルを背負って、両手をズボンのポケットに突っ込んでいた。

由高寿也^{ゆたか せくと}。10才。

真木は知っていた。同じクラスの男子だったからだ。

一度も話した事は無い。そういえばいつも独りで居るのをよく見かける。独りが好きなのかな。

「こいつ超人見知りで、太陽光線浴びると灰になっちゃうんです」
少年がそう言うと、おまわりさんは笑ってくれた。

「イタズラもホドホドに」

おまわりさんが学校まで送ってくれる事になった。

久しぶりの学校登校。でも、まだ4時間目が終わっていない授業中。

由高少年は平気で遅刻して来た。何という肝据わり。

2人は並んで廊下を歩いてしたが……やがて真木の足は段々と遅れていった。「何。レディエンド？」

どうやらレディファーストの逆を言いたいらしいが、適當すぎる。

「……やっぱり、帰りたい……」

真木はお弁当箱を抱えたまま、ついに立ち止まってしまった。

「……帰るよ」

ハート、真木はため息をついた。まるでシルクロードでも永遠と歩いてきたようだ。とても疲れた。でももう帰ろう。帰り道はエスカレーター道みたいに楽チンに違いない。

由高少年はいきなりツカツカと真木の前まで近寄った。

そして掴みかかったのか！と思うほどの勢いで、真木の、まず

お笑いメガネ（黒ヒゲ付き）をひっぺがすように取った。

カタタタンッ……！

メガネは地面に落ちた。

そしたら今度は帽子も、マスクも、ついでにオーラも取り外した。

真木は震えるばかり。

「普通にしてろよ。美女も3日で飽きるから」

由高少年はそう言うと、クルリと方向転換し教室の方へ向かって歩き出した。

美女も3日で……美人薄命。

真木は床に散らばったメガネたちをかき集めると、職員室へ向かった。

由高少年にそうは言われても……勇気は出なくて。

結局真木は職員室で教師・岩生の帰りを待っていた。

第5話（第3の人生）

冬が過ぎ、春を迎え。

あたしはどうしても体と脳が拒否して学校へ行けなかった。

怖い。皆があたしを見る。驚きか賞賛か、ガンを飛ばされるのか
ヤラシイ目で見られるのか。考えれば考えるほど、体が震えてくる。
思い出したくない 消えて。

……

ダメなんだ、このままじゃ。先生にも迷惑をかけてしまう。幼女
誘拐なんてニュースが流れるたびに「キョエー」って思うのに。し
かも割と多い。

先生には大きくなったら恩返しするんだ。だからこのままダメ負
け犬になってはいかん。

いかんいかんいかん！

あたしは決心した。

決心するなんて久しぶり。

学校へ行こう。

どうせもうすぐ学年が一つ上がる。小学5年生になるんだ。

クラス替えもある。チャンスだ。

この機を逃して、なるものか。

あたしの第3の人生、あたし人称になって ここからスタート！

……そんなわけで、あたしは学校の、教室の入り口前に居る。
さつき人ごみの中 頑張っ、クラス分けの発表を見てきた。

5年A組。間違えてはいない。

まだ朝のHRまでには時間がある……教室の中から騒ぎ声がする。これからクラスメイトになるであろう、元気な子供たちの声だ。あたしも子供だけだ。

それより何でドアが閉まっているんだ、開けておけばいいものを。ええい、もう知らないっ。

グワラッ！

ドアを開けた。

空気が固まったと感じたのは錯覚である事を祈る……しかし……やっぱり？

クラスの皆の視線を浴びた。騒いでいた音が止まってしまった。

ちよつとシーン……。

え？ アレ誰？ あの美少女誰？ でもどつかで見た事あるよーな……。

そんな事を口々に言っているような気がした。

どうしよう……あたしはどうしたら。

ここはクルッと回って「オハヨ」とスマイル？ ……できるわけが無い。

どうしようどうしよう。何のリアクションも浮かばない出来ないもう逃げたい！

あたしが固くなって目をつぶっていると、一人の男子が近づいて来た。

そして。

「こいつ、僕の連れ」

と……突然あたしの肩に手をまわし、顔を近づけ、さらに小指を立て

てた。

……はい？

……放課後、黒板に堂々と相合傘を書かれるようになってしまっ
た……。

第6話（『放課後の教室2人きり大作戦』）

『由高寿也』

彼は、嘘つきだ。そして、独りが好き。

時々、読書をしている。何の漫画かと思って覗いてみたら『ライアー・ウルフ』……。

……あんたにピツタリだよ。

あたしは普通に小学生生活を送っている。もう以前の悩みは何処かへ行ってしまった。まるで以前は病気中だったみたいだ。由高くんと言った事が本当になる。

あたしが美少女であっても皆は次第に慣れていくのだ。その事を言ってくれていた由高くんには感謝しないと。

「ぎゃっ」

……由高くんの足に引っかけた。由高くんはわざとその華麗な足を出してあたしを転ばせた。

おかげで、ズッコケる。しかも、ぱんつ丸見え。

「防御しろよ。短パンガード」

し、白いレースのぱんつを見られた。今日に限ってスカートの下に短パンを履いていなかった。ふ、不覚。

時々思う。……あんた何なの小学生。

「真木ちゃんてさあ。由高くと付き合ってたの？」

女子は噂話が大好きだ。あたしもそれに加わっている。

今日の話のネタは、あたし。……逃げたい。

「……いいえ。そんな、わけが無い」

やけに機械がかった声を発した。そう否定すると、さらに女子は騒ぐ。「うっそだあ」「ラブラブだよね」と。
ラブラブ？ ブラブラの間違いでないのか。

ついに女子の一人が はた迷惑なオツパツピー的発言を提案した。
「試してみちゃおうか」
「何をうっ!？」

名づけて、『放課後の教室、2人きり大作戦』。

あたしはその名の通り、教室に放課後 置き去りにされた。
由高くんを放課後 教室に赴くように仕向けるから、そこで待て
と言っ。

一体どうやってあの由高くんを……と思いつつ、教室で待つ。するとアツサリ由高くんは やって来た。

「何かご褒美でもくれんの」
ガラッ。

由高くんの声とドアを開けた音は同時だった。まるでここにあたしが居る事を始めから知っていたみたいだった。

わけがわからず様子を見ていると、由高くんは近づいて来てバンッ！ っと机に手をついた。手の下には、一枚の紙が。

ええと、何なに？

紙には、『来たよ 歌 下 立つ 二体 竹』と……そして紙の下の方にカワイイ タヌキの絵が描かれていた。要するに……タヌキ？

『タ』を抜いて読むと『きょうしつにいけ(教室に行け)』
……ですわな。

ちよっと何ソレ あたしに この後どうしろってんの。
「えええと、ととと寿也くんの頭脳っぷりを試そうかと」

……かなり冷や汗が。何て苦しい言い訳だプリンス（気が動転）。

しかも うっかり名前で呼んでしまった。まあいいや。

「子供でもすぐ解ける。それより、何か用」

だから、寿也くんの頭脳っぷりを……。

「無いなら、付き合え」

はい？

あたしは目が点になった。

教室の外でカラスがカーと鳴いた。

第7話（お付き合い）

「この後、待ち合わせている。ちょっとついて来い」

……何だ。かなりびっくりした。本当に、お付き合いが始まるのかと思つた。

こんなあたしの顔なんて放つておいて、寿也くんはチャツチャカ続けた。

「頭数でも、あつた方がマシだろ」

……頭数つて？

「ちよつとした抗争に巻き込まれている」

そういえば、あたしって寿也くんの事が好きだつたっけ？ 大事な所を忘れて抜け落ちている気がする。

「この前、風俗街をたまたま歩いていたら」

たまたま歩くような所じゃないと思うんだけど。まあいいや。

「一人のチンピラと出会つた」

出会いは、いつも突然。

「裏通りで、ボコボコにされて気を失っていたそのチン・ピラ。

僕は かわいそうになつて、ケガの手当てをしてやつた」

ああそんな出会いを……に、自ら関わりに行つていないか。

「そうして、友達になつて。ボコボコにされた理由を聞いたら……」

大人と、小学生だよな？

「金のシャチホコを敵対している組員に盗られたんだつて」

何その名前がウサン臭いブツ。

「敵対している組の奴ら呼び出した。何人来るかは知らないが、これから行く」

何処に！

「背犬川のほとり」

……川が赤色に染まる！

「何で あたしもそれに付き合わなきゃなんないの！ 冗談じゃないわよ！ まだあたし死にたくないわよ！？」

あたしが抵抗すると、寿也はフツと笑う。ああもう呼び捨てだ！
まあいいや！

「良かったじゃんか。死にたくなくて」

何言ってるんだろう。意味わかんない！

「とにかく、あたし帰るから。抗争でも戦争でも、好きにしたら！」
あたしはプンスカ怒って帰った。

どうせ寿也の嘘。ホラ。でたらめに決まっている。信じるわけが無い……。

……なんだけど。

あたしは、いったん家に帰ってランドセルを置いた後、背犬川へ出かけてしまった。

どうせ寿也の嘘で、騙されていたとしても。それならそれでいいと思った。

寿也の事が……心配だった。

好き……なのか、なあ……まだ、そこまでは達していないよね、と思うのだけれど。人として、心配したり気にするのは普通よね？

……

なんて考えた後。ドキンとした。

人として。

でも、あたしは……。

……

……背犬川が見えてきた。まだ川の近くはよく見えない。歩いていくうちに、段々と状況が明らかになってくる。

大橋の架かった背犬川。川幅はソコソコ広いが、水深は思ったより浅い。天候良ければ、ヒザまでくらいしか水面は届かない。ゴツゴツした大きめの石が転がっていて、堀になっている。そこを下つて、大橋の下へ出て近づいた。

立っているのは寿也一人。

寿也を中心に、周りにはチンピラ風の男たちが倒れて……いた。

川もチンピラたちも、赤色一滴 染まっていない。

寿也の両手には、金のシャチホコが。

さて、問題です。第一問。

この状況を、説明して下さい。

「やっつけたぞ。僕一人で」寿也は涼しい顔で言った。「安心しろ。みねうちだ」

お願いだから真面目な顔でサラッと嘘を言わないでくれないかな。何処に刀があるのよ。

「ココ」

寿也は、金のシャチホコを地面に置いた。そして右手だけを少し高めに掲げ、目をつぶって精神集中をはかると……。

光輝く棒が手に現れた。例えると……。

「……蛍光灯？」「ま、似てるか。ミルキー棒」

頭の中が麻痺しそう。いや、してる。

もうダメ、寿也にはついていけない。

あたしは卒倒した。もうダメ、現実ダメ……夢に行かせて。
あたしが夢の中へと走り出す前に、寿也の声が聞こえた。

「僕が そんじょそこのミルクィ星人と同じだと思っなよ」

……末恐ろしいこの子供。

第8話（初めての『ミルキー電波』）

眠りながら確認しておくよ。

あたしはミルキー星人で……寿也も、ミルキー星人だったんだね
……？

あたしは、ミルキー星人の事をあまり知らない。自分が何故、地球に一人で居たのかも。

教師・岩生もとい先生は人間だ。もちろん知らない。ただ先生は、地球に不特定多数のミルキー星人が居る事を知っていて、それを黙って受け入れている。

自分で作ったお弁当を忘れていくような、身寄りの無い しかも宇宙人の子供を結局引き取って育ててしまうような、そんな人間。自分が何者かなんて、知らなくてもいいのかもしれない。だってあたしは人間と変わらない、何の力も無い生物。

でも寿也は。

寿也の事が知りたい。

あたしの事なんかよりも。

きつと、これが「好き」になる一歩手前。

あたしは寿也を好きになる。そう確信した。

確認終わり。

（「……聞こえるか、真木」）

真っ黒な空間の中で、声が光のように感じた。すぐに声の主は寿也だとわかった。でも。

(「……寿也ね。初めてあたしの名前、呼んだ」)

クスクス、と笑ってみせた。体を動かせている実感は無い。なるほど、ただの感情のみの世界じゃないか、コレは。ココは。

続けよう。

(「ミルキー電波は、受信初めて?」)

(「そうだよ。……そんな名前なんだ、コレ。普通にしゃべっている感覚がする……」)

(「不慣れなら、そう長くは続けられないな。お前がスッキリできるように、一っだけ言うておく」)

(「……何」)

(「僕は、嘘はつかない」)

あたしは思いつきり叫んだ。(「嘘だあああああ!」)

(「やかましいな。僕が嘘を言った事があつたか」)

ええ何度でも! あたしは身を乗り出す思いで寿也に反発した。

(「あなたのおかげで黒板に相合傘書かれちゃったり……ええと、そつだ。おまわりさんに いっぞや道端で尋問受けた時だつて…

…誰が太陽光線浴びたら灰になるって? ヴァンパイアか、あたしは!」)

(「僕は真木と付き合ってた覚えは無い。それに、灰うんぬんはただのジョーク。通じたる、笑ってたじゃないか、おまわりさん。嘘は悪意、ジョークはユーモアと ここでは解釈して頂きたいかと」)

(「カイシャク? アクイとユーモア?? ああもう、難しいよ!

あんたもつと小学生らしくしなさいよー！」（

ところが、そこで寿也の声はプツリ途絶えてしまった。
何だろっ、頭が重くなってきた。

とりあえず、眠って休もう。

……

確かに、寿也の言った通り。寿也は「僕の連れ」と言っ指を立てただけで、一言も付き合ってやるとか彼女なんだとかは言っていない。言ってはいないけど……ふーむ……。

いや、完璧 誤解されるって。

絶対、屁理屈だ。あたしの中で「寿也嘘つき説」は消えない。消してなるものか。

ん？ 仮に本当に寿也の言葉が真実だとするならば……。

チンピラたちとの出会いは、全て本当にあったという事なの。

（「正解！」）

何処かで、正解のランプが聞こえ響いた。

第9話（お見舞いです）

あたしは一週間ほど、家で寝込んだ。原因不明の熱。先生は大慌てだ。

あたしがミルクィ星人だという事が引っかけた、病院も行けなければ下手に薬も飲めやしない……。

先生は校長に懇願し、学校をしばらく休職する事にまでした。

何だこのバカ親っぷりは……嬉しいけど……と あたしは熱にうなされながら数日を過ごす、次第に熱は下がっていった。

ミルクィ電波の影響。きっと慣れれば たいした事は無いんだ。早く復活して、学校に行かなきゃ。寿也に会いに。寿也に……。

「お見舞いに来ただけど」

あたしは、パチっと目を開けた。上半身を起こすと、ドア先に寿也が立っていた。

まさかそつちから来てくれるだなんて。

「コレ、ハーブティー。風邪に効くやつ」

持ってきた袋を先生に渡した。いや、風邪では無いんだけど。

「似たようなもんだ。後で飲んでみな」

あれ、あたしの心を読んだ？

寿也はあたしが寝ている布団の足元に正座した。しばらくお互いに黙ってしまったんだけど、やがて先生がハーブティーを入れて戻ってきたので、あたしは寿也がミルクィ星人だという事を先生に説明した。

そうしたら。

先生は少し顔色を変えた。

「由高。お前、やっぱり真木と付き合っているのか？」

先生はサラリと爆弾着火発言を。

「いいえ。ケンカには付き合ってもらえませんでした。今日ここへ来たのもクラス代表」

火が消えた……。

「そうか……少し安心したな。もし付き合っているんだったら、真木に すまない事になる」

「え？」

今度は あたしが返事をした。

「海外へ行こう、真木。お前が倒れている間、友達のツテをまわって調べて、頼んできたんだ。俺は教師を辞めて、お前のために研究チームに入る事にした」

「付け研究っ!？」

「研究チームに入るって……あたしのために!? 頼んできたって、一体何処に……」

得意満面の笑みを浮かべ、人指し指を立てた先生。大きな声でこう言った。

「オーストラリア! MWS調査チーム。MWS……ミルクィウエイ星人だ!」

えーっと、つまり。

……あたし、オーストラリアに行くのっ!?

「行ってらっしゃい」

あっさり寿也は言った。

ちょっとは、引き止めてよ!!

第9話（お見舞いです）（後書き）

【あとがき】

岩生学級は、平和ですね。かなり。

第10話（ネットカフェ午前3時）

「別に無理に来なくなっただっていいんだぜ。だってお前は人間。俺らみたくミルクキーじゃねえもん」

「いや、もうジツとしているのは嫌だ。俺もそっちへ行つて、ミルクキー通になりたい。仲間に入れてくれ」

……インターネットを通じて、そんな会話がなされていた。

ネットカフェ午前3時。真夜中に。教師・岩生は現在オーストラリアに滞在している親友、常野真（じょうのまこと）に連絡をとっていた。

2人の会話からお分かりのように、常野はミルクキー星人。岩生は違う。

2人が出会ったのはもうかなり前の事。なんと、岩生 生後8ヶ月。

まだベビーカーにのっていた頃、公園デビューで初めて出来た友達だった。「俺、マコト。ミルクキー星人。君は？」「イワオ。人間。よろしくね」

……という会話があったかは知らない。

「近所同士の付き合いで、2人はとつても仲良しだった。

「懐かしいよなア。昔は色々 無茶苦茶やったっけ」

「そんな昔話に ひたっている暇は無いんだ。家で娘が待っている。それより答えてくれ。今は存在しないはずなんだな？」『衛星リンズ』は

「おうよ。もうほぼ無いに等しいと思うぜ、何処探しても……でも変な話だな。お前の娘の話も」

「……ああ」

「真木ちゃんていつたっけ。今度会いに行くよ」

先生たちの話はここまで。今度はあたしよ。

軽井真木。小学5年生。

熱がやつと下がって、学校へ元気モリモリに登校。あたしは普通に教室のドアを開けた。

そうしたら。

パーンッ！

爆発音がした。

そしてあたしは紙テープと紙吹雪まみれになった。

……天井に向けてクラッカーを放ったのは。

「復活おめでとう。真木コプター」

……寿也……。

何その道具みたいな名前……。

「そういつたら飛べるかなと思って」

そんなわけない。意味わからん発想。

「真木ちゃん、久しぶり！」「元気そうね、よかったあ！」

寿也の体をドンとどかして、友達数人が集まって来てくれた。

じいじいいん……！ あたしは例えようのない喜びに襲われていた。あたしを心配してくれる、友達！ 優しい言葉をかけてくれる、友達！

ああこれが友達なんだわ！ ……あたしの目の端に涙が溜まっていた。

そして、感きわまってバンザイ！ と……。

……手を上げた所で、あたしの動きが止まった。

教室の後ろにある黒板。

大きく、こう書かれている。

校内学芸会 演目『ロミオンとジュリエール』愛と悲しみのハテ

』

主役 ロミオン 由高寿也
主役 ジュリエール 軽井真木 以下略

……あたしはバンザイのまま奈落の底へと落ちていった。

第10話（ネットカフェ午前3時）（後書き）

【あとがき】

ジュリエール。

ティツシュのメーカーみたいだ。

第11話（佐藤千歳）

「ああロミオン様、ロミオン様。何故あなたはロミオン様なの」

「親が付けてくれたから」

「ハイ カーットオ！ 由高くん、頼むから台本覚えて来て」

そう学級委員長に叱られている寿也。大あくびをしてつまらなそうにしている。

「だって面倒。適当でいいじゃん」

「何言ってるの！ この大河内秋乃様が手がけた脚本、『ロミオンとジュリエール』は、この背犬小学校の歴史に残って語り継がれる名作となるのよ！ 黙って台本通りにしてよ！」

脚本・演出・監督をかつて出た彼女に、逆らえる者は居ない。

たかだか学芸会で……かわいそうな寿也……と、あたし。あたしが学校を欠席している間、劇のキャスティングで あたしが主役に勝手に選ばれてしまった。

そして相手役は寿也。何のマチガイだ。

しかも愛と悲しみだあ？ チョイト哀れみの勘違いでないのか。

「ま、思い出だ。だってお前、もうすぐガンダーラかどっか、行くんだろ」

放課後、帰る前に寿也が聞いてきた。

「ガンダーラじゃなくてオーストラリアよ！ ……うん、だけでも少し先だと思う。最近先生の帰りが遅いから、聞くに聞けなくて」

もう誰も居ない教室で、寿也はドアの所であたしを見ていた。でももう帰ろうとしている。

「人間が何やるうとしてんだか……」

寿也は目を伏せた。

あたしはカチンときた。

「先生を悪く言わないで！」

あたしは怒る。「…………ごめん」寿也は謝って教室のドアから去った。

オヤ？ 寿也が素直に謝った…………ちよつと、不気味。

何はともあれ。季節は秋。

校舎の外に出ると、風を冷たい、と感じるようになった。校門を出るまでの通りに沿って銀杏いちょうの樹が「私たちが主役よ見て」と言わんばかりに賑やかに色を付けている。

視界が黄色つぼく、または赤つぼくなるのよね この季節、と思ひ描きながら一人校門を出た所で。

寿也に背格好のよく似た男の子が、門のそばに立っていた。

ファー付きのベストを着て、端正そうな顔をしている。姿勢がいいのか、スラツとして立ち方が締まっている。

誰かと待ち合わせしているのだろうか。あたしは前を通りすぎた。

「あの」

男の子は話しかけてきた。「はい？」

「由高寿也つて、ご存知ですか？」

ニコツと、愛想よく笑った。

「友達ですけど……………寿也に何か？」

「僕は佐藤 千歳ちとせといいます。寿、帰られました？」

トシ……………つて呼び方、親しげね。

「先に……………帰ったと思うけど」

「そうですね。では、また。ありがとう真木さん」

そう言っであたしが行く方とは逆に歩いて行った。

(何の用だったんだろ、寿也に……………あの人)

あたしは去り行く男の子の背を、角を曲がって見えなくなるまで

見続けていた。

あたしも歩き出す。寒いから早く帰ろう。

そこでハッと気がついた。

あたし、自分の名前言ったっけ？

第12話（若白髪は）

演目『ロミオンとジュリエール』愛と悲しみのハテ』とは。

大河内秋乃が脚本・演出・監督を手がけ お送りする、一途な男女の恋愛劇。

ただしバッドエンドストーリーでは無い。先に死んだロミオンの後を追うようにジュリエールは自分の胸に剣を刺そうとするが、その前に最期だからとロミオンに口づけするとロミオンが生き返るといふ素晴らしい赤面ストーリーとなっている。

しかしあたしが言い出す前に教師・岩生先生の猛反発にあい、脚本にティーチャー・ストップがかかった。

よって、大河内秋乃は しぶしぶ結末を変更せざるを得なくなつた。親ばかバンザイだとあたしは先生を褒め讃えた。

結局、結末はどうなったかというところ。

謎の怪盗紳士が現れジュリエールをさらってしまうという破茶滅茶エンドになった。

……これなら、最初の方がまだマシな気がする……。

急ぎよ、怪盗紳士役になった男子、鴨目くんは言った。

「俺、観客から物 投げられたらどうしよう」

……大丈夫だよ、少しの間だけだから。

いよいよ明日は学芸会の本番。そう思うと、ジツとできなくなってきた。

ワクワク？ それともドキドキ？

両方だと思っけど、あたしは放課後、最後の体育館での練習で非常に落ち着かなかつた。慌ててセリフや動きを間違えるたびに「大

丈夫かな　こんなんで……」と不安がよぎった。

「大丈夫だよ、真木ちゃん」と仲の良い友達は声をかけてくれるけれど、頭ではわかっていても体の震えは止まらない。

ああどうしよう。

チラッと、寿也を見ると。寿也は何かを一心に見ていた。

え、何だろう、と視線の先を追うと、一人の女の子の姿が。

えっ！？　まさか……！？　と、あたしが一歩退いてヨロけると、寿也がその女子の方へ近付いて肩を叩いて呼んだ。

そして「すごく気になってただけ。一本だけ白髪が生えてる」

……

……若白髪は抜くより切った方がいいらしいよ。

「寿也」

最後の練習を終え、一人きりになっている寿也を見つけた。体育館の外の水道で、手を洗っている。

あたしは横から話しかけた。

「何」

「言っの忘れてただけ。佐藤千歳くん、って知ってる？」

「知らない」

えっ、と、あたしは考え込んでしまった。

じゃあ……彼は何。

「そいつが何？」

と寿也に聞かれても、困った顔になってしまう　あたし。

「知り合いだと思ってたのに……」

弱った。

このままでは、謎の少年に　なってしまう。

「うーんとお……かくかくしかじか。ミルミルキーキー」

あたしがこの前　校門で会った事を説明すると、寿也は手を拭き

ながら「ふーん」と言った。

ふーん、って……。

それだけ？

「こっちの謎が一つ解けた」

寿也が あたしを見る。「え？」

「昨日から誰かに つけられている」

第13話（ジュリエールと謎の妖精）

誰かに つけられている。

えっ？ それって女？ それとも男？ …… わからない、と寿也は言う。

一回待ち伏せしてみても、角から飛び出してみただが。おかしな事に居たのはコオロギ一匹。見渡しても、誰も居なかった。確かに後から つけてくる足音は聞こえたのに。

逃がしたのか。くやしいので、そのコオロギは連れて帰った、と言う。

「今朝、コオロギは野っ原に放してやったけどな。どうも腑に落ちん。確かにジツと見られてたんだ」

寿也にしては、よくしゃべる。

……きつと、よっぽど不気味に違いない。

学芸会の本番を迎えた。

もはやストーリーカーの事など、どうでもよい。頭の中は劇一色だ。

ボロボロになった台本を何度でも読み返す。内容なんてもう完璧に覚えちゃいるが、それでも何度もページをめくった。これぞ緊張。

ピーッ！

嫌な音に聞こえた。開幕の合図だ。

「これより5年A組による、演劇……」アナウンスが流れる。

ああ心臓が張り裂けそう。どうしよう！

……すると。

(「大丈夫……落ち着いて。怖くないから」)
優しい声が聞こえた。

「え……？」
幕が開く。ドレスの衣装に身を包んだクラスメイトたちが、陽気なダンスリズムにのってクルクルと踊る。

貴族のパーティーの場面から始まりだ。あたしはもうすぐ登場する……。

ジュリエールとして。

(「さあ出番かな。ホラ、行って。練習通り、転ばないように」)
また聞こえた。

あなたは、一体誰？ ……そばには誰も居ないのに……。

寿也？ ううん、違う人の声。……温かくて、強い声……。

あたしは幸せに導かれるみたい、ゆっくりと舞台の方へ歩いて行った。

絶対トチらない。あたしは黄金のオーラに包まれたかみたい、堂々としていた。

「おお……！」と観客席から声がした。

え？ そんなにすごかった？ とあたしは少し照れる。

何だこの自信は。どこから生まれた？

(ありがとう……謎の妖精さん)

あたしは お礼を言った。

(「いやあ、なににな」)

照れているのか、やけにフレンドリーな妖精ね。

最後に妖精は こう言った。

(「今度メシでも おごってね」)

……
一
氣に夢から覚めた。

第14話（あなたのために）

練習は本番のように。本番は練習のように。
誰が言い出したんだろう、全くその通りだ。

あたしは練習のように、ジュリエールに なりきっていった。

「ロミオン様……何故あなたはロミオン様なの」「あなたのためなら、この名を捨てます」

あたしはバルコニーから、下に居るロミオンこと寿也を見つめた。
練習中の寿也は、実はハゲオンですとかセイバーですとか、アドリブ上等だった。

委員長に嘆かれっぱなしだったけれど、やはり本番は台本通りキチンとやっている。

しかしまあ、何というか……。

「もし この名が2人の障害となるのなら、今夜を限りにこの名を捨てましょう……ジュリエール、あなたのために」

真剣な顔であたしを見る寿也。真っ直ぐ、下から あたしだけを……ニヤリ。いや、ドキン。

こうして見ると、寿也ってカッコいいんだよね、とか思いつつ。
寿也は、どう思っているのでしょうか。一応、メイクと衣装は完璧だと思っただけですが。

おっと、いかんいかん。あたしはジュリエール。ジュリエール。
ロミオンを愛する、ジュリエール。

物語はピークを迎えていた。クライマックス。

あたしは棺の中で花に囲まれて、眠っている。仮死状態、というやつだ。

ここでロミオンが登場。あたしが死んだと思ったロミオンは、毒を飲んでジュリエールの後を追おうとするのだ。後でジュリエールが目覚ますとも知らずに。

ロミオンは駆けつけた。棺の中のあたしを見て、セリフを吐く。

「何という事だ。あなたの居ない この世になんて未練は無い。今すぐ、私も……」

そうそう。その調子。

ロミオンが毒を飲んで死んだ後、あたしは目を覚まして今度は剣で死のうとするのよ。早く倒れちゃって、ロミオン。寿也。

「あなたの元へ……」

……そう言いかけて、セリフが止まった。

シーン……。静かだ。

ツカツカツカ。

ツカツカツカ？ 誰かが近づいて来た音がした。

バツサアアア！ ……？ 布を かぶせたような音。

「誰だ、お前!？」

え？ 寿也の怒った声!？

「君を さらって行くよ。それでは また」

謎の音がした。

ん？

…… 何処かで聞いた声。

タツタツタツタツ。

最後は走り去る音。

……。

……。

あたしは、ガバツ！！と身を起こした。

周りには誰も居ない。

居ないイナイイナイ！！ 寿也も！

どよめく観客。あたしは混乱して叫ぶしか無かった。

「ロミオン様、いずこ！？」

第15話（王子強奪）

寿也がさらわれた。

え？ あたしを怪盗紳士がさらっていくんじゃないの？

予想もしていなかった事態に、舞台袖とあたしは大慌てだ。とにかく幕は下ろされた。

観客は、あたしの最後のセリフが物語のオチだと思っているらしい。ロミオンに捨てられたジュリエール……もしくは王子を強奪された姫。

それより、寿也は何処！？

「寿也！」あたしは駆け出した。

舞台裏で委員長たちも大騒ぎだった。「また寿也くんの悪ふざけなの！？」……と、おかんむり。違う。

ああ、目を開ければよかった。一体、あたしが目を閉じている間に何が起こったというのだろう。

あたしはクラスメイトの間を駆け抜けて、舞台裏を抜け出した。

「真木ちゃん！ 舞台あいさつが」と誰かが言った。「ゴメン、パス！」

あたしはそれどころじゃ無いんだから。

先生を見つけた。中庭でキョロキョロしながらウロウロしていた。

「先生！」

「真木！」

ハアハアと、飛び込むように走ってきたあたしを支えてくれた。

「とととと寿也が……」

「最初、気がつかなかった。鴨目が、出番を間違えたかアドリブか

悪ふざけだと思っただが。……鴨目は、トイレで気を失っていたよ。さつき保健室に運んだ。それより」

「誰だか、わからなかったの!？」

「怪盗紳士の服を着て顔を隠していたから、鴨目だと思っていたんだよ! でも違った。由高は何処行っただ……!」

顔面蒼白の先生。

あたしだってそうだ。血の気が引く。そして、涙が出てきた。

(寿也……! 何処? 何処に行っちゃったの!?! ……)

拭いても拭いても、ポロポロ涙がこぼれてくる。不安が、さらに後押ししてくる。

(寿也あ……!)

悲鳴のように嘆いた。

(「……真木……」)

微かに、声が聞こえた。

「寿也?!？」

あたしは声に出して名前を呼んだ。突然の事にびっくりした先生は、そのまま あたしを見守っている。

(「……僕は、無事だけど……」)

再度、今度は はつきりと聞こえた。紛れもなく、寿也の声だ。

「これってミルクィ電波よね?!? 何て便利なの、ヤッホウ!」
今さらミルクィ電波の利便性について感動している。しかも無料だ。

(「学校の屋上に居るから、来てくれるか。とりあえず」)

「屋上ね!? わかったわ、先生も居るから、2人で すぐ行く!」

あたしがクルリと方向転換して今にも走り出そうとすると、寿也がすごく低い声で言った。

(「早く。色んな意味で、身の危険を感じる……」)

第16話（正体？）

寿也が危ない。あたしは焦った。

あの寿也が、助けを求めている。あの寿也が。
手からミルキー棒を出す事の出来る、あの寿也が。

バーン！ あたしは屋上のドアを開け勢いよく飛び込んだ。「寿也！」

あたしが目にした光景とは。

寿也と、前に校門で会った佐藤千歳とかいう少年。彼が、寿也に襲いかかるうとしていた。

左手で寿也の襟首あたりを、右手でハサミを持っている。

「な、な、な、な、……！」

『な』がいつぱい。

「何してんのよおーっ！」

あたしは猛突進して体ごとぶつかっていった。ドーン！

佐藤くんの体は そばの手すりにぶつかった。「痛っ……！」

イタイ。

痛みを微かに感じた。ジュリエールの衣装のままだったあたしは半袖だったのだけれど。体当たりした時にハサミでサツと腕を引っ掻いたようだ。一筋の線が走る。

「真木イイイ！ 大丈夫かああ！」

親ばか教師・岩生先生の登場。

完全に あたしの先行く足に遅れをとっていたが、日が沈む前には辿り着いたようだ。ゼエゼエと息を切らし髪を乱し、何故かシャツをズボンからはみ出している。

「あたしは平気よ！ 寿也 大丈夫！？」

あたしは寿也の両肩をグワグワ揺さぶった。
激しく前後する寿也の体。

「もう少しでお前に揺れ殺される」

「あっ、ごめん！」

パツと手を放すと、寿也はヨロリと立ち上がった。

「メトロノームの気持ちが体感できた」

少し頭がフラつくのか、気分が悪そうに見える。「寿也あ………！」

「見ろよ真木。こいつの正体」

……寿也が指さした方を見て、愕然とした。

ポタリ。

佐藤さんの腕から、血が。

どうやらハサミで誤って突き刺してしまったらしい。

「……」

佐藤さんは黙ったままだった。

痛そうだ。

いや、それよりも。

血が………白い。

第17話（輝くケチャップ）

ミルキー星人の血は白い。

あたしは知っていた……というより、血は白いものだと ずっと思っていたのだ。

だから吸血鬼の映画を観てもジエイソンの映画を観ても、みんな何で頭からトマトジュースが出ているんだろうと本気で考えていた。それを先生に尋ねた時、先生は とても優しい眼差しでこう言った。

「たまに、アセロラドリンクの時だってあるんだよ」

「へー」

……その後、全ての真実を知った時。あたしは怒り狂って先生をグーで殴った。

先生の口から輝くケチャップが飛び散った。

「……カルピスじゃないよね。それ……血」

あたしは呆然とそう言った。

血が白い事がその証明。

彼は……佐藤くんは……。

「……同士。俺もあんたらと同じ、ミルキー星人だよ」

ゆっくりと立ち上がる。手すりを背に、あたしたちと向かい合わせになった。

「寿。さつき頼んだ事だけど。返事は？」 「ノー」

とても嫌そうな顔で寿也は返事をする。

「そうか……でもまだ諦めない。せめて、メアド交換から始めてみないか」

んん？ メアド交換？

「嫌だ。用があるなら電波で来い。気が向いたら返信してやる」

「本当か？」

「僕は嘘は、つかない」

あたしは「プツ」と背後で笑った。「何がおかしい」と寿也は軽くあたしを睨む。

ゴメンゴメン。そのセリフをまた聞くとは思わなかったもんで。「メアドくらい教えてあげたっていいじゃん。ミルクィ電波って、慣れるまで大変だし。そんな露骨に嫌がらなくなつて」

と、あたしが口を出した。すると佐藤くんは胸に手を押し当て、とても眩しい瞳で あたしを見た。

「君もいい人なんだね……真木さん」

「ええ、はあ、どうも。……あ、そうだ。何であたしの名前を知っているの？」

あたしはずっと秘めていた疑問を問う。

「寿と君とのミルクィ通信を盗み聞きしていたんだ。ホラ、寿が嘘つきとかどうとか言ってた時の」

ああ……あれ。

「筒抜けだったんだ……気をつけよ」

あたしは誓う。便利だけど、秘密な事には使えないんだな。

「俺は君にも興味があるんだ。寿には断られてしまったけど、ぜひ君も、

解剖させて欲しい」

……

あたしの動きが止まる。

は？

今 何て。

「大丈夫。調べたらちゃんと元の体に戻すから。安心して」

……できるかい!!

第17話（輝くケチャップ）（後書き）

【あとがき】

ミルクィの血は外部に触れると白くなるんです。

第18話（パーツが足りない）

「好きなんだ。どうしても」

彼は純粹な少年らしい。瞳に『純心』と書いてある。

しかも『ピユ・ア』とルビ付きで。

「あなたを解剖したい」

何処かのCMみたいな事を。

解剖って、ソコ！ 歪んでるよ 안타！

「それでも お前は友達になるんだな。好きにすればいいけど、帰宅した時にパーツが足りなくなっても僕は知らない」

寿也が言い放つ。……そんなぁ……。

「余った事はあるけど」

身の毛がよだつ事を言う佐藤くん。

一体何処までが冗談なんだ。

今まで黙って聞いていた先生が、やっと割って入って来てくれた。先に手当てをしよう、真木と……君。君が由高にラブボンバーなのはわかった。だけどね、押しつけるだけのラブではいけないよ。相手の事も考えなくちゃ。わかるかい」

先生がとても優しい目で佐藤くんの両肩に手をポンと置いた。

おお、大人らしい事を言っている。さすが先生、肩書きは飾りじゃない。

「真木を解剖なんぞしたら、ただじゃ済まさないからね。覚えておくように」

先生、顔は笑っていますが、目がちっとも笑っていません。

佐藤千歳少年はミルキー星人。あたしと同じく、自分の出生は不明だという。

あじさい学園という、ここより少し離れた所にある養護施設で暮らしていて、たまに背犬川を下って遊びに来る。町に来た時、たまにたま見かけたミルキー星人。同士。

それが寿也だった。

佐藤少年は すごく寿也に魅かれる。そして知りたくなった。何もかも。

電波をキャッチして盗み聞きする。真木という子と仲がいいのか。それならば、寿也に気に入られたその女の子の事も知りたい。会いに行ってみよう。

気持ちは止まらない。いっそ寿をさらってしまおう、フフフのフ。

……という経緯らしい。

あの手に持っていたハサミで、寿也は どえらい目にあう所だったのだ。

少しケガをしてしまったけれど、捨て身のタツクル的体当たりをしてよかったと思う。

佐藤くんは寿也に魅かれて、と言った。あたしも寿也に魅かれて
いる。

何故だろう。わからない。

ただ、あたしは解剖はしないけれど。

「……何だか、寒気が……」

寿也がブルツとひと身震いした。

第19話（伝説）

「ボロいアパートで狭いけど、家に来たまえ。真木、今夜は鍋パーティーにしよう」

という先生の提案で、寿也と佐藤くんを我が家に招く事にした。

「俺の事は千歳でいいよ。サトウと呼ばれるとミルクィ星人て事がバレそうで嫌だ」

学校の下校途中、帰り道で あたしたち3人と先生と、並んで歩いていたらそう言った。変な気遣いね佐藤くん。

「だから呼ぶなって」

うん気をつけてあげる。佐藤くん。「……」

先生もさつきサラリと言っていた、ボロいアパート『しょぼクレ荘』に着いた。古屋なイメージで造られた建物かどうかは、いつか勇気を出して大家さんに聞くしか無い。

ここの2階、奥から3番目の部屋に あたしと先生は住んでいる。「手前から2番目の部屋だな」

と、先生が先行く寿也たちに教えた。つまり2階には部屋が4部屋ある。

5部屋と思っただアタタ、だまされないように。

我が家に辿り着き、先生は玄関の鍵を開けた。そしてドアを開ける。

ガチャ。

そして。

ボタン。

先生は すぐにドアを閉めた。

先生の謎の行動。

「……？ 先生、どうかした？」

先生は しばらく動かなかった。

あたしたちは後ろで「????」という顔をするばかり。

「真木」

先生は、ゆっくりとあたしを見る。

「何……？ 先生、額に汗が」

「いや、今、このアパートに まつわる伝説を思い出した」
伝説って。

「4部屋しか無いはずの部屋の数が、いきなり5つになっていたと
いう」

それは伝説というより怪談では。

「ここで合ってますけど」

と、寿也が表札を指さして言った。表札には しっかり『軽井岩生・

真木』と。

「何か居たんですか？」

千歳くんも首を傾げた。

先生は、今度は ゆっくり玄関のドアを開ける。そして入って行
った。

玄関を進むと すぐに台所の向こうがワンルーム。

「おい岩生。物騒だな、玄関の鍵が開いてたぞ。閉めといたけど」

…… 男の声がした。

「ま、俺にとつちや開いててラッキーだった。ホレ、もうすぐ煮え
る」

コタツの上にスキヤキ鍋。熱い湯気の向こうで、男が一人。
あたしたちの帰りを待っていた……のか？

「真……」

「よう岩生。帰って来たぞ」

先生の手からカバンがゴトンと落ちた。
あたしは男の声に何処かで聞き覚えがある気がした。

第19話（伝説）（後書き）

【あとがき】

手が勝手に書きました。『しよぼクレ荘』。
物書きの奇跡を見たのかもしれない。

第20話（常野真現る）

「初めまして。ジュリエール真木ちゃん」

人なつこそうな顔。パーマな長髪を一つに束ねている。先生と同
年くらいだ。

「もしかして謎の妖精さん……」

「当たり前。メシおごつてとか言いながら、よく考えたら岩生の安月
給じゃ可哀想だった。ので、今夜はスキヤキを持って来てみました」
「やっぱり。聞いた事のある声だと思った。あたしを劇の本番前、
励ましてくれた あの謎の声の主だ。」

つひのまこと
常野真。

先生の友人。2人は先生がラブリーベイビー時代からの、幼なじ
み同士。

そして……彼はミルキー星人。

「オーストラリアからはるばる、戻って参りました」

と、先生の横で自己紹介をした。

ちようど今夜は鍋にしようとして先生が言っていた所だったので、用
意する手間が省けた。四角いコタツ机の上の鍋をあたし、寿也、千
歳くん、真さんが囲む。先生は真さんの横で机の角。

「ゲストとレディが優先だ」と言われ、どけられた先生。

……今度、丸い机を買おうよ、先生。

「真木ちゃん、寿也くんはカレシ？」

いきなり肉をつまみ上げながら真さんが言った。あたしの箸から
マロニーが滑り落ちた。

「違っつ」

…… 3人同時に声を上げた。3人とは、あたし、千歳くん、先生。寿也は、ネギを口に入れた。

別に大声をそれぞれ発したわけでは無いけれど、ちょうどピツタリ同時に声が合ったので、断然拒否に聞こえた。

「何だ岩生。まさか真木ちゃんを一生嫁に出さないつもりか親ばかりと真さんは薄い目をした。」

「真木が認めた男なら、俺も寛容に受けとめよう。けれど2人はただの友達だと聞いている。それより何でお前、由高がそうだと思うた？ 千歳くんも居るのに」

先生はゴツソリと肉の塊をいつぺんに口に入れた。モグモグ。

真さんは「実はな……」と腕を組んで考えていた。しかしやがて話し出す。

「まあいい。暴露しよう、由高くん」

「はい」

「君の事を調べさせてもらった」

「はい？」

寿也の箸が止まった。

「プライベートな事はココでは伏せとく。とりあえず言っておきた事は……君、賢いな。色々と驚いていた」

寿也の顔が強張る。色は変わらなかつたが。

そして。

「まさか あの時のコオロギ」

と、言いながら睨みつけた。

コオロギ？

「勘も鋭い。君には感心してばかりだ。そう、俺はあの時のコオロギ」

第21話（変身）

それから真さんはゴソゴソとカバンの中から、小さな おもちやの銃を取り出した。見た目、ホントに安っぽい水鉄砲みたいだ。

「ミルキー変身銃」。用途・用法はその名の通り」

真さんは試しに先生を撃った。

ズドン。

「ぎゃああ」

先生が消えた。

そんなアツサリ。

「先生!?!」

あたしは手をついて立ち上がろうとした。

「大丈夫。ホラ」

と、真さんはヒョイと何かをつまみ上げ、机の上に置いた。

ウインナー。

……まさか……。

「へえ。変身できるんだ、その銃で。ミルキーも人間も関係無く」

「撃った人間の思い通りの姿に変えられるよ。ただし、これはミルキー電波を応用しているから、ミルキー星人にしか使えない。岩生が俺を撃ったって、蚊がとまったくらいにしか感じないわけだ」

「へー……ちょっと欲しい。いくらですか」

「1000ミルキーでどう」

「円だといくらなんだろう」

「昨日は1000万円くらいの値がついていたが、今日はどうだろ

う。上下が極端だからな。タイミングよければ、1000ミリキー1
円くらいの時ち」

「ちよつとそんな話より先生を元に戻して下さい!」

あたしはバン! と机を叩いた。放っておくと話がどんどん脱線
していく。

あたしが机を激しく叩いたせいで、ウインナーがコロコロと転が
った。

「先つ生〜!!」

あたしが泣きそうな声を上げた。慌ててウインナーをキレイな皿
に盛る。

「僕を尾行してコオロギになって隠れようとしたわけですね。捕ま
えて持つて帰るんじゃ無かった」

一生の不覚、というような顔をした寿也。

コオロギは変身した真さんだったのか……真さんはコオロギにな
って、寿也のお持ち帰りになったわけだけれど。一体、寿也のプラ
イベートの何を見たというのだろうか。

……まあいい。そんな話は。今はどうでも。

「あ、しまった」

真さんはポンと手を打った。

「イメージして撃てば すぐに元に戻るけど。タマ切れだ」

第22話（超能力？）

かくして先生はウインナーのまま、コタツの上の皿の上に放置。

あたしが真さんの首を絞めにかかると、「ぐ、ぐるじい。だ、大丈夫。半日くらいしたら元に戻るから」と真さんは答えた。

半日。

明日は学校が休みでよかった。

「先生……」

あたしは床でオイオイと泣いた。

間違えて鍋に放り込んだらどうしよう。

「さて。もう遅いね。君たちを家まで送っていくよ」

真さんは立ち上がって寿也たちを見下ろした。そして上着を着始める。

「悪かったね真木ちゃん。岩生なら大丈夫だから。岩生も別に今回がこんな事初めてじゃないし。笑って諦めてそして泣いて嘆いているだろうから」

と、床で泣いているあたしの頭をポンポンと軽く叩いた……。

先生、かわいそう……。

「それじゃ、送って行こう。真木ちゃんも行こう。一人残して行くのも何だし」

「いえ。一人でも大丈夫です。先生が哀れすぎて。猫にでもイタズラされたらと思うと」

と、あたしは断った。

真さんは「そうか」と言っただけで玄関へ。

寿也と千歳くんも上着を着て後について行く。

「ごちそうさま。スキヤキ、おいしかった」

「じゃあ。ありがと」

2人と真さんは外へ出て行った。

残されたあたし……と、ウイナー。ポツンと、一気に部屋の中が淋しくなった。

「はあ……」

ため息、とウイナー。

何だか、とつても疲れちゃった。

「それじゃ、俺はココで。ありがとございました」

と、千歳少年はペコリと頭を下げた。そして走り出そうとする前に、

「寿。また会いに来るから！ 電波も飛ばすから！ またね！」

そう言い残して駆け出して行った。

「変な奴に好かれたもんだな、寿也くん」

「……」

千歳少年を見送って、2人は しばらくそのまま突っ立っていた。

「さて行こうか、君のウチ」

寿也は横目で真を睨んだ。とはいっても、軽く。

「そんな目をするな。誰にもしゃべらない。俺は言った通り、賢い子供だと思っただけだ」

「……」

寿也は黙ったまま。

「人間にも超能力を持つ人間は多く居る。ミルクーの中にもそんな奴が居たって、おかしくは無いだろう？」

「そんな話はどうでもいい。さっきは上手くかわしてくれたいからいいけど、真木の事」

「ああ、真木ちゃんね。……君が真木ちゃんの王子様なのは ようくわかったけど」

「……」

寿也は、頭を抱えた。すごく、悩んでいる。

「どうした少年。安心しろって。誰にもしゃべらないから」

「そうじゃなくて……どう誤解を解こうかと……ああでももう、隠さなくてもいいか。あんたには」
寿也が そう言うと、今度は真の方が態度を変えた。「どういう事かな」

寿也は諦めたように振り向いて言う。

「次回に続く」

第23話（リリン王女）

寿也も、自分の出生を知らない。

一番古い記憶で覚えているのは、星空の記憶。都会では絶対に見られないような、天然のプラネタリウム。……おかしな言い方だ。空に光が いっぱい。あれは何。

……あれはね、『星』というのだよ。

星？ ずいぶんたくさんあるんだね。数えきれない。あ、今、何かがシュツて。

……それは、ほうき星。『流れ星』っていうのよ、寿也。

と、まだ幼い寿也の手を引いているのは、女性。優しそうな、女の人。温かい眼差し。

でも雰囲気だけしか覚えていない。

雰囲気だけの女性は まだ幼い寿也に こう言った。

「寿也、あなたはリリン王女を何が何でも守るのよ。私には無理だった」

……。

リリン王女……？

僕が守るの？ 何で？

「アンタ、成長したらこの村を出て、王女を捜して守りに行きなさいよね」

はあ？

「フー。お腹すいたわね帰る。今日はミルクーうどんよ、寿也」

この　たくましい女性は一体誰だったんだろ。寿也には……わからない。大きくなっても。

「星が天かすに見えてきたあ！」

寿也の手を離して、女性は大きく空に伸びるように両手をあげた。

リリン王女。守る。僕が。捜して。村を出る。

王女を、守る使命。

そして……ミルクーうどん。

「これが僕の一番古い記憶だ。僕はその女の人と一緒に村に暮らしていたみただが、あまり生活を覚えていない。僕がミルクー星人だという事を知ったのは、今の両親に引きとられてから聞いて知った。両親には王女の事なんて教えていないけど……」

一気に話し出す寿也に、待ったをかける真。

「ちょっと待て。いきなり壮大というか、ぶっ飛びそうな話をされても、読者がついて来られない。つまりは何だ。ええと……リリン王女を守る」

真はシンプルに結論をまとめた。

「リリン王女というのが……真木ちゃん」

イエス。作者が叫んだ。

すみません。

「何で　わかった。いつから　わかったんだ。真木ちゃんがそれと」

真は興味津々に寿也に詰め寄った。とても興奮している。一瞬、助けを電波で呼ぼうかと寿也は思った。それが、ミルクー棒で……。

「なあ教える。教えてくれよ！　君が普通のミルクー星人とは違う　というのは部屋を見れば明らかだった。君にはひじょーに興味を注がれる。連れて帰って解剖したいくらいだ」

……本当にヘルプ電波を飛ばそうかな。ああでも真木だけの力じゃ無理だな、相手は大人だ、先生は今ウインナー中だし……。と、寿也はウンザリしていたが、仕方ない何処までも付き合うかと心に決めた。

「まさか真木ちゃんに『王女』なんて書いてあるわけじゃあるまいし」

真はハハハと笑った。寿也はハア……とため息を一つ。

「そのまさかだよ」

真の笑いがピタリと止まる。

「え？」

「真木の頭上に、『リリン王女』って書いてあんの」

第24話（ミルキー・アイズ）

寿也の視界。

ミルキー星人の頭には『ミルキーアンテナ』がそれぞれ付いている。

形としては、球に楊枝が突き刺さったような……見た目、まち針のような。頭が針山のような。

とにかく、そんな物が頭に刺さっている。

そしてその球の周りをグルグルと、文字がまわって動いている。その文字は見る人によって読めるように変換されている。

真の頭のアンテナの周りには『常野真』という文字がグルグルと。もちろん、佐藤千歳のアンテナにも『佐藤千歳』と。

「面白い事に、真木の場合は『リリン（王女）』と、とても長い名前が書いてあるんだ」

「な、な、な、な、何ーっ！？」

真は手を上げて大声を上げ、後ろに倒れた。

衝撃的すぎる事実。

真はクラクラしてきた頭を支えた。

「……と、いうわけで。僕は初めて見た時から真木がミルキー星人だという事は知ってたわけ。王女って、こいつか、とも」

「素晴らしい……！ 何て便利なミルキー・アイズなんだ。感動した！」

ブルブルと、体が震えている。

「僕も意味がわからんけど、真木を守らなければいけないらしい。たぶん、王女だから」

「そっだな！」

真は立ち上がった。パツパツと、服に付いたホコリを払う。

「なるほど。そういう意味では君は真木ちゃんの王子だ。騎士と書いてナイトだ。守ってあげなければ。しかし……」

「何」

「それに関わらず。君は真木ちゃんが好きでは無いのか？ ……まあ、まだ小学生だし。早いかもしれないけど」

寿也はまたフウ、と息をつく。

「そっちは興味無い。あんまり」

「ハックシユン！」

くしゃみ一発。「遅いな、真さん……」

鍋を片付け洗い物を済ませた後。コタツに入って真の帰りを待っていた。

机にアゴをつきながら、色々とこれまでの事を思い出したり考えたりしていた。

あたし、何で生きているんだろう。『惑星シャンプー』を飲んだはずなのに。

確かに自分は もがき苦しんで死んだはず……なのに、生きている。何故。どうして。

自分の体が不思議で たまらない。手を広げてみせる。

あたしは生きている……生きていてよかった。

『よかったじゃんか。死にたくなくて』

いつか寿也が言っていた。時々、思うのだけれど。

寿也は何であたしの考えている事がわかるの？

「ただいまー。真木ちゃん、岩生。おまたせ」

ドンドンと、ドアを叩く音が聞こえた。あたしは玄関に出る。ドアを開けると、真さんと……隣に寿也が。

しかも寿也はリュックを持って。

「お……かえり」

何だ何だ！？ 一体、どうなっている？

寿也は帰ったんじゃないの？

「ま、ひとまず部屋に入れて。寒いから」

あたしは部屋の奥へ引っこみながら、「ねえ、どういふ事」と聞いた。

「寿也くんをぜひ研究したくてね」

と、真さんはニッコリと笑う。とても嬉しそうに笑う。

「研……？ それで？」

寿也はOKしたの？ そんなまさか。

「寿也くんをオーストラリアに連れて行こうと思うんだ」

はあ！？

「何なら、解剖してみてもいいかと」

解剖。

あたしはそばにあったウインナーを、真さんに投げつけた。

第24話(ミルクィ・アイズ)(後書き)

【あとがき】

とても長い名前。

いつ公表しようかタイミングが。

第25話（出生）

あたしの知らない所で話が進んでしまっている。
いきなり寿也は このまま明日、真さんと一緒に行くと言い出した。

「突然すぎるッ。いきなりなんて！ いきなり明日オーストラリアなんて！」

と、あたしは訴えた。一体この2人、何考えているんだろうか！？

「まあまあ待つて、真木ちゃん。いきなり海外には連れて行かないから」

「へ？」

ポンポンと あたしの両肩に手を置いて、真さんは あたしを落ち着かせた。

「どういう事？ 寿也」

真さんの後ろに居る、寿也に話しかける。「……………」 寿也は黙ったままで答えてくれそうに無い。

チラッとそれを見た真さんが代わりに説明する。

「オーストラリアに連れて行くのは、もつと後。それより先に行きたい所があつてね。日本だから。安心して」

「日本つて……………何処ですか？」

あたしは聞いた。意味が全然わからない上に、結局やっぱり寿也は海外に。

でも、あたしもいつかは先生とオーストラリアへ……………喜んでいいのか、どうなんだか。

「北だよ。とにかく北」

真さんの冷静な言葉がよく部屋に響く。

「寿也くんが昔に居た所」

あたしはどどういう表情をしていいのか わからなかった。

寿也の出生も謎。

あたしも謎。そういえば、佐藤くんも養護施設に入るまでは、謎。謎トリオ。ミルクィ発。

「そもそも俺がここに来たのは、真木ちゃんの不思議調査のため」
コタツに入り直した あたしたちは、真さんの事情を聞く事になった。

「あたしの？」 「そう」

「でも寿也は」 「身近なミルクィ星人という事で。ついでのつもりだったんだよ」

長くなりそうね。

真さんの話。

あたしは以前、『惑星シャンプー』をアホ飲みして、昏睡状態に陥った。

しかし、奇跡の生還。

単純に、先生は喜んだ。シャンパンとケーキを用意して あたしの復活祭まで開かれた。

「今夜はシャンパーニュ！」と先生は盛り上がる。

シャンパーニュとはフランス地方の名前だが、使い方が間違っ
てやしないだろうか。

…… まったく何に酔っているんだ、先生。子供の前で……。

話を戻す。

大興奮した先生は勢いで電話をかけた。

ミルクィ星人である、真さんに……。
真さんは先生の話を聞いて、訝いぶかしがる。

『惑星シャンプー』を飲んで無事生還？ 有り得ない、そんな事はアレは とつくの昔に生産中止、自主回収された商品だ。もうほぼ今は存在していないはず。

一体、幾人のミルクィ星人が死んだと思っているんだ？

……先生は叫ぶ。「ヒュー！」

まるでお化けにでも会ったかのような悲鳴。

そんな危険な代物だったとは。「どうして教えてくれなかった！」

先生は涙交じりに電話口の向こうに居る真さんに言う。

真さんは あっけらかんと答えた。

「何となく」

第26話（『衛星リンス』）

先生と真さんの押し問答は続いた。

「まさか普通のシャンプーでも口からは入れないだろ!? いくら貧乏極限状態のお前でも!」

先生は酔っ払いみたいに ぎゃあぎゃああと喚^{わめ}く。

「嫌だあああ! 真木が死ぬうとうとう!」

「落ち着けて! 真木ちゃんの姿変われど、生きて元気でいるんだろ!?!」

「あうとう!」

もはや涙でベチャベチャだ。見るに耐えかねる大人の姿。

「だから変なんだ。そんな事例は今まで報告された事が無い。それに……」

「ほれり（それに）?」

チーン! と鼻をかむ先生。ティッシュ一枚では収まりきらなかつたらしく、続けてもう一枚。チーン!

「俺の考えられる限り、助かる可能性のある方法は一つしか思い浮かばない」

「何だそれは」

「コンビニ商品『衛星リンス』を服用する事だ」

押し問答、ひとまずここまで。現在に戻る。

「『衛星リンス』……」

初めて聞いた名前だった。あたしはオウムのように名前を繰り返す。

「『衛星リンス』……」

「『惑星シャンプー』と一緒にセットで売られていたはずだ。容器

にもしつかり書かれているはず。“必ず、ご使用後は『衛星リンス』でケアを”と。ケア無しでも死にはしないが、まあ、した方がいい。潤い感が違うから。正しく使えば、何ら問題は無い”と、真さんは付け加えた。

『惑星シャンプー』の正しい使い方。

もちろん、頭を洗う。だって“シャンプー”なのだから。

「ところがだ」

真さんは腕を組み足を組み直し、目の前にあるウインナーを指でつついて遊んでいる。

ちよつと、やめて下さい。それ、先生なんですから。

「まずは飲んだペットの猫が死んだ」

淡々と、語り出す。

「どう誤ってか口から入れたみたいだな、その猫。別に『ゴメン』と謝って飲んだわけじゃないぞ。あやまり違いだ。……その最初の報告から、わずか数ヶ月の間で、同じような事故報告が25件。ちよつと多すぎ」

にじゅう……って、確かに多い。

「シャンプーを口にしたモノは全員死亡」

しっ、しばう!?

「慌てて生産会社は生産中止、注意呼びかけ、自主回収。それから賠償だ。もうかなり昔の話になるけどね」

大事件じゃないの、それ。……知らなかった。

「とは言っても、ミルキー星の話らしく。記録がそう残っているだけ。“ワクシャン事件”という」

ワクシャン……。

“ワクワクシャンパーニユ”という言葉と先生の姿が一緒になってあたしの脳裏にイメージとして浮かぶ。

……関係ないけど……。

「回収されてもうかなり時間は経っている。昨日おとといの話じゃないんだよ。しかもこの地球で……存在しているとは、考えられない。真木ちゃんがそれを持って、地球に居て。飲んでピンピカピンだなんて。奇跡というより、脅威だ。魔の力さえ感じる」

大魔王の姿が浮かんだ。あたしって何者。

「真木ちゃん」

真さんは真剣な目であたしの目を見つめた。そして、机の上に置いていたあたしの手を、そっと自分の手を重ねた。ドキッとして……あたしはゴクリと唾を飲み込む。

「トイレ貸してくれる」

……あたしはガンッ！ と机に頭を打ちつけた。

第27話（好奇心）

ザー。

ガチャ、バタン。トイレから真さんが出てきた。

「やあゴメンゴメン。話の腰を折っちゃって。えーっと、そうそう。真木ちゃん」

「はい」

オデコをさすりながら、あたしは返事をした。真さんは またコタツに座り直し、あたしを見た。

「シャンプーを飲んでから気がつくまでの間。何があったのか、覚えていないかい」

「えっ……ええと」

あたしは必死に記憶を辿った。あたしは背犬川まで出て行って、シャンプーを飲んだ……それから後は……。

「……覚えてない」

としか、言いようが無かった。「だろうな、ふうむ」

真さんは唸るだけ。あたしは少し申し訳なく小さくなった。

何か少しの事でも、覚えていればよかったのに。

「いいよ、気にする事は無い。君は無事だったんだから。ね？」

優しく真さんは微笑んだ。あたしは口唇をかみ締めて、コクンと頷いた。

「調査を続けてしばらくになるけれど、まだミルキー星人の不思議は多くてね。次から次へと謎は増えてばかりだ。一体俺たちは何処から来て、何故ここに居るのか。何もわかつちやいないんだな」

……そうか。

あたしの出生もわからなければ、ミルキー星人自体の生まれもわからない。

あたしたちは一体、何処からやって来たの。

「だからこそ、調べたくなる。知れば知るほど、謎がまた一つ、一つ増えていく。その謎を解明しに、俺たちは行くんだ」

まるで、開けてはいけないと言われている宝箱を開けたくて、ウズウズしているように見える。

好奇心。

あたしたちを動かしていくのは、好奇心、なんだね。真さん。

「……というわけで」

今度はニツカリと、真さんは笑って歯を見せた。

「不思議少年の寿也くんをオーストラリアに行つて解剖する前に。寿也くんの出生を調べに行つてみようと思つ」

気のせいかも知れないけど。寿也と真さんの仲が急接近したような気がする。

寿也の口数は少ないけれど、ただ真さんの問いかけにも「はい」「か」「いいえ」と答えるだけで、敵意を出したりするような素振りはない。無くなった。

自分が解剖されるかもつていうのに、言い返しもしないし。

何なのだろう、この2人。

あたしの居ない間に、何かあったのだろうか……。

あたしはパチツと目を開けた。

いつもはワンルーム内に、あたしと先生が布団を並べて寝ているのだけれど。今日は違う。

先生は居ない（ウインナー中だ）し、真さんと寿也がお泊まりだ。2つの布団の上に、3人が川の字になって寝ている。窓の方から順に、あたし、真さん、寿也。あたしは窓の方を向いていて、窓から星を見た。

四角い限られた窓のスペースに、星空という天然の絵画。
残念ながら方角が違うのか、月が居ない。

（「真木……」）

ピクツ、とあたしは反応した。でも振り返らない。
声の主は寿也だ。

（「……何？ 眠れないの、寿也」）

（「お前こそ」）

（「あたしも何だか、眠れない」）

第28話（寿也スペシャル？）

また改めてこの“ミルキー電波”は便利だと思った。口を動かさずに済むんだね。

慣れすぎると、無口になってしまっんでないかな。

（「お話してやるうか」）

え？

（「お前がグツスリ眠れるように。お話、してやるよ」「）
寿也が？

ええつと、どんなんだろう。ワクワク。

（「万有引力の検証実験について」）

はい？

（「アイザック・ニュートンが、万有引力によって惑星の運動がだ円軌道になる事を証明したのに対し、キャベンディッシュは1798年に鉛の小球と金属線を用いた『ねじれ秤』の実験によってニュートンの理論の実験的検証を行い結果 万有引力の法則を確認できた運びになって……」）

……おやすみ、寿也。

……

次からは、真木が寝てしまった後の、寿也くんの「お話」です。
かなりレアかもしれませぬ。聞いてあげてください。

寿也の「お話」……

……真木、寝たのか。まあ、仕方ないけど。
ちゃんとオチまで聞いて欲しかったんだけどな。

万有引力の検証実験。

実は、それは別に どうでもいいんだ。

万有引力は、「2つの物体の質量に比例し、物体間の距離の2乗に反比例する」んだけど。

2つの物体どうしが同じ大きさの力で引き合うらしい。

2つの物体が。

例えば、それが 人間 でも。

人間どうしても、万有引力が働く。

お互いを引き寄せる……ただ、あまりにも小さくて、わからないけど。

文字通り、「万物が有する引力」 万有引力。

ミルキーも万物の中に入るよな、もちろん。

僕が言いたいの。

千歳や真木が僕に魅かれているなら。

僕は、

千歳や真木に魅かれているのだろうか、万有引力によって……。

……

……なんてな。

おやすみ、真木。

第29話（北へ）

朝が来た。

あたしが目を覚ますと、台所からトントントン……と まな板を叩く音がしていた。

それから、みそ汁の におい。

ムクツと起き上がって台所を見ると、朝食を作っていた先生がちょうど振り返ってあたしと目が合った。

「グツモーニン、真木。そこの ばかミルクィを叩き起こせ」

……あたしの隣の布団では、真さんが大の字になってまだスヤスヤと。

「熱湯 貸そうか、真木」

包丁を持った先生の顔が歪んでいる。……あまり さわやかじゃないなあ……。

「寿也くんの出生を調べに北へ？ 場所は わかっているのか」

あたしたちは真さんが借りてきたレンタカーに乗り込み、家を後にした。助手席に寿也、後ろにあたしと先生。真さんは運転しながら、先生に返事をした。

「ああ。昨日、寿也くんを送っていった時に親御さんに話をつけてきたんだ。岩生と同じく、ミルクィ星人については受け入れている人たちみたいだったから、話はスンナリとついたよ。で、知っている事を色々と聞いてきた。寿也くんが前に居た場所」

寿也つて、あたしと同じく本当の親が わからないんだね。だったんだ。

何となく、薄々感じてはいたけれど……。

「木葉村^{コノハ}”という所だ。山のそばの、村民300人ほどの小さな村らしい。そこでヒツソリと、寿也くんと、お母さん……だと思っけれど。一緒に暮らしていたそうだよ」

寿也のお母さん。

うわあ、何だか少し新鮮。

「ただ、病死してしまって、それで今のご両親に引き取られたみたいで」

寿也は黙ったままだった。顔は見えないけれど。

寿也は今、何を思っているのだろうか……。

……

車を走らせる。

「……ねえ、真さん」

「何だい？ 真木ちゃん」

車は ずっと北へ向かってきた。途中、休憩しつつ目的地へ近づいていったわけだけれど。

「村には、もう近いんですよ？ だいぶ経ちますが」

「そうだね。もう20分くらい行った所じゃないかな」

「ですよ。あたし、さつきから何度も何度も地図を見ているんですけど」

「合っているよ、方向も場所も。俺、迷った事は無いから」

それは いいんだけど。

「あの……聞いていいですか」

「なあに？ 真木ちゃん。彼女なんて居ないよ。カミさんは居るけ

ど」

「へえー。結婚してたんですか……って、その話はまた今度。それより……」

あたしは率直に意見を申し上げます。

「この辺、どう見たって都会的なんですけど」

……村ではない。

発覚したのは、道路沿いに見つけた看板を、幾つか見た時だ。

“ ようこそ、キバシへ！”

キバシ……？

真さんは突然、閃いためいひように言った。

「どうやら俺は重要な勘違いをしていたらしいな」

「どづいっ事でしょう」

「コノハ、とは読まない。“キバ”と読むんだ。“木葉”と書いて。そして」

真さんは、見つけたコンビニの駐車場へ進入した。

「村は恐らく吸収か合併かされて、“木葉市”になっているみたいだな」

第30話（売り子さん）

あたしたちのしているものを説明しよう。

ビルが立ち並ぶ。同じような造りの、飾りっ気のないビルが。銀行、商社、塾、公共施設といった建物が。

少し行くと、繁華街になる。コンビニ、ファーストフード店、ショッピングセンターやモール街、多種多様なチェーン店の名前が見られる。

建物だけでなく、人も。上層から見下ろすと、あの動く点が全て人だと思つとゾツとする。

タクシー、バス、電車、自転車、車、人。
往来が激しく、生活音が けたたましい。

緑は 何処っ。

「本当に かつては村だったんですか、ココ」寿也が言った。

寿也は今、何を思っているのだろうか……。

残念ながら表情からは読み取れない。

「すごい急成長だな。どんだけ」

真さんは車をコンビニに停めて、降りる。「タバコ、買ってくる」

「あ、あたしも行く。のど渴いちゃった。先生と寿也は？ 何か買って来ようか」

とあたしも降りようとすると、「僕も行く」と寿也も ついてきた。先生も。

あたしはコンビニで買い物をするついでに、手が空いてそうな店員さんに聞いてみた。

「昔、村だったって聞いてきたんですけど。全然違いますね。びっ

くりしちゃった」

40代後半くらいの おばちゃん店員さんだったのだけれど、あたしを見てフツと笑って教えてくれた。

「もう少し東へ行くと、家電街に出るわよ。ええと、何て言ったかしら。あの売り子さん」

売り子さん？

「思い出した。メイド って言ったわね」

あたしたちは東へは行かない。北へ行くんだ。

「時間があれば寄って真木ちゃんにピッタリな服を見立ててあげるよ」

車を再び発進させ、それから渋滞途中で真さんはミラー越しにあたしを見て微笑んだ。

ミラー越しに。

……まさかロリ服のあたしを想像しているんでないだろうか。

あたしは無視した。ああ窓から暴走タクシーが見える。

「今さらですけど。何処に向かっているんですか、今」

助手席で缶コーラを飲んでいた寿也が聞いた。真さんは「ん、ああ……」と少し眠そうに反応した。

「寿也くんのお母さんが居た住所の所……だけど、何か手がかりのある望みは薄そうだな。そうだ」

真さんはパチンと指を鳴らす。

「市役所か図書館に行って、昔の村の事をまず調べてみようっ」

第30話（売り子さん）（後書き）

【あとがき】

人ごみが苦手なため都会という大阪くらいしか行った事がないんですが。友達は上手い例えを言いました。改札口が「人間製造機だ」と。

そして京都で暴走タクシーとニアミスした怖い経験があったため
つい暴走……と書いてしまいました。

良心的タクシーさん、ごめんなさい。

第31話（1048号室にて）

何かミルキー出て来い。……しかしあたしたちの望みは立ち消えていった。

市役所の職員に聞いても若い人たちばかりで「詳細は知りません」と言うだけ。市長さんもまだ若い人みたいだし、行った時には留守だった。

図書館で過去の記事などを探してみても「昔、村だった」という程度の事しかわからない。

村長だったという人はもう亡くなっている。

おじいちゃんおばあちゃんあたりの人に聞いて尋ねてみても「すっかり変わっちゃまってねえ……」と嘆きの昔話を始めるばかりで。

ミルキーのミの字も無い。

……あたしたちは疲れきった。

もう何だかどうでもよくなってきた。村もミルキーもメイド服をあたしが着ようと。

「帰ろうか……もう。ここに居てもムダな気がする」

一応、寿也のお母さんが居たと思われる家の住所にも行ってみたいけれど。

フライドチキンのチェーン店になっており、店先でサーベル・カンドースという黒い紳士服を着たタイガーおじさん人形が立っていた。

日が沈んだ。

あたしたち4人は、ホテルに一泊する事になった。言い出してくれたのは真さん。

「遠慮しないでいいよ。特に岩生、心配するな。俺のおごりだ」

それを聞いてか、先生は夜、何処かへ消えた。

真さんはラウンジに行つてくると言い残して去つてしまふ。

あたしたち子供は、部屋で留守番。ただ、寿也とは別々の部屋だ
けど。

あたしはしばらく部屋で一人、ドラマ『青春ド真ん中でドス来い』
を観ていたが、ドラマが終わつてニュースになると退屈になつてし
まった。

(寿也、何してんだろ……)

ボフツ、とベッドに寝転んだ。でもまたすぐに起きる。

「部屋に行つてみよっ」

1048号室。

『ト・シ・ヤ』だねーとあたしが言つても顔色一つ変えなかつた寿
也。

今、何しているのだろう。あたしはトントンと1048号室のド

アを叩いた。

「寿也あたしよー」

すぐにドアが開いて寿也が出てくる。

「……何」

「暇だっただんで遊びに来ただけだ。入っていい？ 何してたの？」

「一人トランプ」

大きなベッドの上で2人とも座り、ババ抜き大会が開かれた。

また、あたしがババを引く。「うぎゃー」

あたしは伏せこんだ……「どうしていつもあたしがババを引

くのよおー」

あたしが叫んでも、寿也は しれっとしているだけ。
「ババを引きそうな顔をしているからだろ」

……どんな顔なんだろう。どうでもいいけれど、負けっぱなしでくやしい。

「ムダ足だったな、今日は」

終わったランプをひとまとめにしながら、視線を下に落とした
ままで寿也は言った。

心なしかトーンが低い。疲れているのか、落ち込んでいるのか。

「うん……でもまあ、来てみなきゃわからなかったし。いいじゃん、
また帰ってから別の手がかりを探せば」

「……」

「寿也？」

無言のまま、ランプをきり始める。そして5枚ずつ配る寿也。

「ポーカーをしよう。こっちのが得意だから」

あたしは黙って寿也に任せた。

ゲームのさなか、寿也は話し始める。

「このホテルからに限らず、この土地の何処からも星は見えそうに
無いな」

あたしは配られた手札を見つめ、考えながら寿也に「うん……」
と相づちを打った。

「僕が昔で唯一覚えていて印象に残っているのは、母親でも村でも
何でもない」

「……」

「背犬川の上空よりももっと数が多い、星が輝く……星空だった」

第31話(1048号室にて)(後書き)

【あとがき】

1048。

覚えておくといいぞ。

とか言ってみる作者。

第32話（もっと好きになる）

……。

としゃ……？

「ムダ足だとわかっていれば来るんじゃないかな。せつかくだけ
ど」

あたしは引きかけたカードを一枚落とした。

でも拾う気になれなかった。

「真木……？」

落ち着いている寿也の声。

口調はいつもと変わらない。変わらないけれど、でも。

もし あたしが 寿也 だったら。

「……」

あたしの目からポロポロと、涙がこぼれた。

手札の絵柄が にじんで見えなくなってくる。あたしはどれを揃えようとしていたんだっけ？

「……何で泣く。明日、目が腫れるぞ」

「だって……！」

あたしの涙は止まらない。「寿也が……」声が震える。

「あたしが寿也だったら……悲しい。思い出が壊されたみたいで……」

きつとあたしが寿也の代わりに泣いている。

寿也が泣かないから。あたしが泣く。あたしが。

「変なミルキー星人……」

ボソッと、寿也が呟いた。

あたしって変なの？

「自分の出生なんて知ったって、どうするんだろっな。別に知らないままでいいんじゃないか……って思ったりするけど……」

あたしは手で顔を拭いながら「あたしも似たような事を思った事があるよ」と言った。

以前、あたしは自分の事よりも、寿也の事を知りたいと思った。きつとあたしは寿也の事を好きになっていくんだと。

「寿也の事をみんながもっと知れば、みんなが寿也の事をきつともっと好きになるんだよ」

あたしはカードを引く。でも絵柄も数字もまだ揃わない。

寿也は手持ちのカードを広げて下に並べて見せた。

「……千歳がいつぱい、って事か」

寿也を好きになる みんなの顔が千歳くんに。

ついでに みんなに解剖される寿也というものが思い浮かんだ。

あたしは「ぎゃあ」と悲鳴を上げたが、後で爆笑へと変わってしまった。

「おっかしい……」

あたしがベッドの上で涙目で笑い転げると、寿也は「表情がクルクル変わる奴だな」と呆れた。

寿也のカードはロイヤルストレートフラッシュ。

……お見事。

あたしがずっと笑い転げてニヤニヤしていると、「いつか……」
と小声で寿也が言った。

「え？」と聞き直しても「……何でもない」としか答えてくれず。

寿也は少し微笑んでいた。

第33話（電波、届かず）

家に帰ってきたあたしたち4人を待っていたのは、スキヤキ鍋でもメイドでも何でも無い。

ものすごく怒った佐藤千歳少年だった。

「俺抜きで何処行つてたのさっ」

ボロアパート『しよぼクレ荘』の前で、仁王立ちで待ち構えていた。

「何度 電波を送つても、“電波の届かない所に居るか、電源が…” って言われて、居てもたつてもいられなくなったよっ」と、千歳くんは寿也の腕にぎうーっとしがみついた。寿也の顔が“もうどうにでもしてくれ”と言っている。

それより電波を発信すると そんな事 言われる場合があるわけ？
「今度、留守電機能も付けとくから」と寿也が言う。

……はあ。そう……そんなもんなの……。

「真木ちゃん、岩生」

突如、真さんが呼んだので、あたしと先生は振り返る。真さんはレンタカーにもたれかかって あたしたちを見ていると思いきや、何処か違う所を見ている気がした。

何かを、考えている。

「俺は いったんオーストラリアに戻るよ。だから」

え？ すぐ帰っちゃうの？

「アレを貸して欲しい。持って帰って調べたいから。『惑星シャンプー』の容器」

真さんは あたと先生の家で一泊した後、オーストラリアへと帰っていった。

昨日渡した、空になった『惑星シャンプー』を手土産に。

あたしは『惑星シャンプー』を飲み干したが、空になったボトルは大事に保存しておいた。

それは先生が真さんに電話をかけた時に、そうしろと言われていたからだった。

容器を手渡した時、真さんは「フウン……？」と首を傾げた。

あたしが「どうしたの？」と尋ねても、「いや」とだけの返事。そして、

「とにかく向こうに帰って徹底的に調べてみるから」と、約束した。

真さんが飛行機に乗るのは、あたしが学校に行っている間。

あたしや先生は普通に学校に行っていたわけだけれど。

寿也は欠席していた。

(珍しいな。寿也が休みだなんて)

居るはずの主人が不在で、寂しそうにある寿也の席。とても奇っ怪な光景にさえ見えた。

その頃。

空港のロビーで、ソファに座って新聞を読んでいる男、真。搭乗手続きを済ませ、空いた待ち時間を楽に過ごしていた……。

その前に現れた少年。寿也。

行き交う人の騒音をバックに、フリースの上着のポケットに両手を突っ込んでいる。

バサツ……新聞を半折り、その向こうで立っている寿也を、黒い

グラスン越しに見た。

くわえたタバコを灰皿に片付ける。

先に寿也の方が真に近寄ったが、声をかけたのは真だった。「や

あ」「どうも」

簡単に挨拶あいさつを済ませる2人。「一体どうして……」

「あんたとの隠し事が多いから。真木たちには秘密の……」

第33話（電波、届かず）（後書き）

【あとがき】

壊れたパソコンって爆発5秒前みたいになるんですね。
早く修理返ってこい〜（作者の泣き言）。

第34話（違和感）

「まあ同感だな。ミルキー電波も周囲に筒抜けじゃ、使えないし
そうである。ミルキー星人同士でしか受信・発信・通信できない
ミルキー電波の会話は、外部から隠す事は不可能。」

真木の言うと、便利なんだか どうなんだか。

「……便利だと思うけど？ NO！ パソコン・GO！ ミルキー。
ゴゴゴゴ。」

「で、何の話なんだい？」

「木葉村の事なんだけど」

ああ、キバシね、と真は補足した。「違和感無かった？」

真の表情が固くなる。寿也の一言にとても驚いた。

「気づい……てたのか？」

「一応。でもどうする事も出来なかった。真木たちが居たし」

「謎が増えたな」

「まあね」

真は寿也から顔を背けて手を組んで考え込んだ。

「妙だと思っていた……急成長は、いいとして。村の情報が出て来
なさ過ぎだ。記録が全く無いし。村だぞ？ ……人口300人ほど
の。市になったのは、たった数年前かそこの昔の事じゃないか。
何故こんなに手ごたえが無い……」

「同じく。だから変だと思って。市になる以前の村の姿が浮かんで
こない。たぶんコレって」

「隠蔽いんぺい」

「言葉が難しい。隠し事、って言って」

「ああすまん。何だか寿也くんと話していると、ついつい向こうの
仲間と会話しているみたいでな……寿也くんが小学生だという事を
本気で忘れるよ」

「雰囲気です意をつかむから、ご心配無く。隠蔽、って、別に昔悪事があったとは限らないけど」

「うーん……」

今度は腕組みに変える真。

「まっ、昔に何かあって、知ってても教えてくれなかったという事だ。以上」

ポンとヒザを打った。いいのか そんなんで……。

「宇〜宙は〜、せ〜ま〜い〜 ……」替え歌まで歌い出す始末だ。

それを遮って、搭乗案内のアナウンスが流れた。

「おっと。もう行かなきゃ……寿也くん」

「はい」

「真木ちゃんたちには、王女の事、内緒のまま？」

一呼吸 間を置いて寿也は「……はい」と返事をした。それを見て、真は少し安心したかに見えた。

「その方がいい。まだ何も わかって無いうちから混乱させるような事は……ね？」

特に岩生だ、と真は思った。岩生なら、真木を本当に檻に入れてしまいそうである。気の毒だ、真木が。

「実は……あの時。ホテルで真木とババ抜きポーカーやってた時」
ババ抜きとポーカーが一緒にされている。そんな事はどうでもよい。

「真木に教えようか……迷ったんだ」

真木、お前は王女なんだ。

……だから何？

「……言わなくて良かった」

地雷を踏む所だったかもしれない。そんな風に思えた。

「寿也くん」
「はい」

すると真は いきなり立ち上がって、寿也の体を持ち上げた。「
うわあああ！」

見よつ、慌てる寿也を。本日初公開……だったのだろうか？

『高い高い』をされた。寿也の足が浮く。

「はっはっはあー！ 軽い軽い」「……！」

周囲の大注目を浴びる。

……ストンと、寿也は やつと地面に下ろされた……。

一気に疲れた顔になる寿也を前に、さらにピースサインまで。

「今度こつちに来る時は、スゴイモノを持って来るつもりだから。
よろしく！」

「何を……」

何を企んでるんだオツサン、と寿也は脱力した。

「それじゃあ、俺は行く」

歩き出そうとした。忘れる所だったが、彼はこれからオーストラ
リアの仲間の元へ帰るのだ。飛行機に乗って。

「そうそう。わかっているとと思うけど」

最後に、真は忠告を残す。

「ミルキー通信は外部には筒抜けだから。気をつけるよーに」

スゴイモノ。

まさかミルキー星を丸ごと持って来るんじゃないだろうな、と寿
也は一瞬思った。

その直後だった。

真の乗ったと思われる飛行機墜落のニュースが駆け巡った……日
本中を。

第35話（ラッキー伝説）

「すごい煙だな。モグモグ」

と……お茶の間でお菓子を食べながらズブーツとお茶をすすった。

TVでは夜になった今も中継VTRが流れている。画面の中で、深い山の中からモクモクと真つ黒な煙が立ち昇り、現場の悲惨さが生々しくヘリから報道されていた。

懸命な救助活動が続けられている。

「何で生きてるんですか、真さん」

あたしはコタツの机の真ん前に居る真さんにそう聞いてみた。

「強運と書いて俺と読むのさ、真木ちゃん。なあ、岩生」

真さんは後ろに手をつけて、台所でラーメンを作っている先生に呼びかけた。ちょうど、ラーメン臭が部屋中に立ち込める。

真さんは無事だった。なのでこうして落ち着いてTVを観ている。

「確かにお前のラッキー伝説は著書にしても売れるだろう。ベストセラーも夢じゃないな。そして今。また新たな伝説のページが、記されようとしている……」

「アイアムレジエンド」

話は映画化の方向へ。そんなにすごいのか？ 真さんラッキー伝説。「まあ、たまたまだっただけどねー。たまたま、ニホンザルが空港に現れて」

「たまたまですか!？」

「空港の人たちが必死で捕獲しようと頑張ってたんだけど、ラチがあかなくて。仕方が無いから、コレを」

パカッ……いや、サツと自分の着ているジャケットの内側を披露する真さん。そこには規則正しく、5本のダーツの矢が並んで内ポケットに刺さっていた。

ダーツ……？

「ホイ」

と、真さんはスツと一本取って、投げた。

「おまちど……」

グサツ。

ピタリ。

「いやー！ー！ー！」

あたしの悲鳴。

「ラーメン、ラーメン」

真さんは立ち上がって、先生がこつちに運びこもっていた両手のラーメンのどんぶりを受け取った。どんぶり2つ、コタツの上に置かれる。

先生は動きを停止し、「どんぶりを持った状態」のまま固まってしまっていた。

い、一体何が……。

先生のオデコに、真さんの投げたダーツの矢が突き刺さったままだった。とても痛々しい。

「“ミルキーダーツ・固まるくん”。用途・用法はご覧の通り。二ホンザルの時も、とっさに使っちゃったんだよなー。ま、おかげでサル君は捕まってくれたけど。気がついた時には、俺の乗るはずだった飛行機が出た後だったよ。キーン」

……またか。ミルキーアイテム第2弾。

まさか、7つあるんじゃ。

「先生は とうなるんでしょう。……元に戻るのに半日かかるとか？」

「んにゃ、短いよコレは。30分くらい」

……よかった、それくらいなら……。ホッと胸を撫で下ろす。

「でもラーメンのびちゃう」

「あ、俺が食つとくよ」

解決した。

とりあえず見ているのも痛々しいので、オデコに刺さっている三
ルキーダーツは取った。

どんぶりを持った格好のままの先生。口が「ど」の形のままだ。

……これがこういう彫刻かハクセイだったらと思うと……。競売
にかけてみようか、と真さんは面白おかしく笑う。

はあゝあ……。

「寿也くんには会った？」

ラーメンを食べながら、湯気の向こうで真さんが話をふった。

あたしは……。

「学校には来ませんでしたけど……」

「けど？」

「あたし、寿也の家にお見舞いのつもりで、行ったんです」

真さんは「ほお」と物珍しそうに、あたしの話に聞き入った。

第36話（寿也の家）

初めて来た、寿也の家。

普通に、一戸建て駐車スペース 車2台分、庭は恐らく家の裏だろつ、付き。

白い壁造り赤茶けた色の屋根。庭の方からは大きな木の先端が少し見える。

駐車スペースに車は一台も停まっていなかった。

……留守だろうか？ 門で、インターホンを押すかどうか迷っていた所だった。トントンと、肩を叩かれる。
振り返ると……。

……さるぼぼ？

いや、黒い頭巾をスッポリと かぶっているだけだ。そして。

「あなた、真木ちゃんね？ 寿也のお友達の……」
と、ニツコリ笑う。

身に まとつている服が黄金色だ。ハッピーのように見えるけれど、下に着ているものもスカートも、みな黄金色で統一。そして黒頭巾。手に持っているのは、黒いセカンドバックと……どう見ても重そうな、重量感タップリのスーパー『カモイ』と書かれた袋。

買い物帰りらしい、その30代くらいの女性。

……もしかして……。

「寿也の母です。フフフ」

やっぱり。寿也のお母さん！

「あなたが真木ちゃんかあ。いやあ、寿也の部屋の壁にね、ウフフフ。ウフフフ。アハハハハ」

何故あたしは笑われているのだろうか？

「あの……寿也くんは……」

あたしがオズオズとしていると、まだ含み笑いをしながら「まだ学校から帰ってきていないけど」と言っつて、一度あたしから視線を逸らす。

学校に行つていふと思つてたんだ。どうしよう、今日は寿也、学校に来ていないだけだな。

あたしが色々と考えていたら、寿也のお母さんは元気にパツと明るく、

「どうぞ上がつていつて！ せつかく来たんだから！ ちようどれから……」

と、スーパーの袋の中を張り切つて見せた。

「レンガ占いをしようと思つてた所なのっ」

すごくウキウキしながらトトンと足でリズムをとつた。

重そうだと思つた袋の中には、『¥98』と値札の貼られた茶色いレンガが積み入れられていた。

……ここまで聞いていた真さんも、激しく同意する。

「俺も驚いた。寿也くんのお母さんがそんな個性的な女性だったなんて」

「正直かなり迷いました。寿也の部屋を一度覗いてみたくて……興味あつたんですけど、残念ながら占いには興味が」

「……でも家には上がつちやつたんだろ？」

真さんはニヤリと笑つ。

「……はい」

第36話（寿也の家）（後書き）

【あとがき】

黒頭巾をかぶった皮膚が金色のさるぼぼが、自分の携帯にぶら下がっています。

たらしこと一緒に。

第37話（部屋）

あたしは寿也の部屋への興味を選んだ。決してレンガ占いの誘惑に負けたわけでは無い。

「レンガ占いどうだった？」

「素晴らしかったです。もう2度と参加したくありません」

あたしはキツパリと言った。いや、真さんに。寿也のお母さん本人には言っていない。

「俺の時は『紅茶占い』っていつて、エレガントだなあとと思って参加したんだけど。とんでもない。シャワーを借りたよ」

そういえば真さんが寿也を送りに行った時。帰りが遅かった上に、真さんだけ寒がっていた気がする、あの時。

そんな事をしていたとは。もう詳細を聞く気にはならなかったけれど。

「ちょっと変わったご両親だったけど、あんなオープンな人たちだからこそ、寿也くんは幸せなのかもしれないね、今」

真さんの言葉にドキンとした。

あたしには先生が居る。だから……すごく自分は幸せなんだなと思っただ。

ちよつと今、先生の姿がアレだけれど……。

「寿也くんの部屋、見たんだ？ びっくりしたろ」

面白そうに真さんは微笑む。以前 真さんはコオロギになって、部屋を見ている。寿也のプライベート・ルーム。

一体どんな意外なものが置いてあるんだろうと、期待に胸を膨らませていた。

どこかの民族衣装とか、はたまたスペースシャトルの模型とか。頭がいいって言うからブ厚い科学や医学の本が棚にズラーツと並ぶ

とか。それとも路線は脱線してアニメのポスターやコスプレ衣装がクローゼットの中に。

とにかく、そんな風に様々な想像や憶測を張り巡らせていたわけだけれども。

あたしの想像を超えていた。

「意外だった」

あたしは寿也の部屋に一步を踏んだ瞬間。
寿也の世界を知った。

「何にも無くて」

何も無い。

……。

……何も……。

「あつただろ、一つだけ」

真さんは まだフフ、と微笑んでいた。ニヤニヤ笑いにも見える。
あたしの頬が少し赤く染まる。

寿也の部屋にあつたのは。

……あたしの写真、一枚。

一枚。白い壁に囲まれた部屋。ベランダへと続くガラス戸の横にそつと、

真正面を向いて上半身だけ、白いブラウスのあたしが写っている写真だった。

カーテンや、ベランダにはスリッパくらいはあったのだけれど。部屋に入った瞬間に感じた印象は「何も無い」だったのだ……。

ポツンと、その写真だけがすごく目立ってしまった。

恥ずかしい。

「何だろう、あの部屋。机もベッドも本棚も無い。何で何にも無いの……」

「勉強しないから机も必要ないそうだ。宿題する時はリビングでするって言うし。何処で寝てるんだ？ って聞いたら『押し入れ』って……ドラ もんだなあ」

押し入れまでは見ていないけれど、教科書とかも一緒に置いてあるんだらうか。

不思議だ。

不思議すぎる。何でこんなに徹底しているんだ寿也。

「ゴチャゴチャしているのが嫌いなのかな。キツパリとあっさりとしていて、群れない。独りが好きなタイプ」

と、真さんが寿也を分析した。

第37話（部屋）（後書き）

【あとがき】

普段何しているんだろつか寿也。
あやとり？

第38話（ケンカ?）

寿也は狼みたいだな。狼少年、寿也。何か前にもチラッと思った事があった。

「寿也つて……孤独」

言葉にしてみたなら、寂しくなってしまった。

ああもう、あたしどうしたらいいんだろう！

「ちなみにアレは寿也くんの念写。カメラを持って、写し出した写真だ。イメージだからね。写真を撮られた覚えは無いだろうか？」

そう言う真さんの言葉通り。あたしは寿也に写真を撮られた覚えは無い事にハタと気がついた。

「すごいね。立派な超能力だ。あの写真は初めて念写してみたんだと言っていた。思いのほか上手くいったんで、記念に貼ってあるんだつてさ」

……何だ。そうだったのか。あたしてつきり……。

ちよつとガツカリ。

「ま、真相は本人に聞いたら、いつか聞いてごらん」

真さんは ちよつと意味深な事を言った。

本人につて。……うーん……。

いつか、ね……。あたしは少々、途方に暮れていた。

「どうかしたの？ 真木ちゃん。そんな切ない顔をしていると、危ないオジサンたちに襲われちゃうぞ」

……真さんもその部類に入るのでは。まあいいや、それはどうでも。

「寿也……家に帰ってきた途端、ものすごく怒っちゃって」

あたしが部屋を見たから。

それを察した時、寿也はきつと、ものすごく怒った。
だからあたしが寿也のお母さんに玄関まで見送られるまで、ずっと。口を利用してくれなかった……んだと思う。

「そっか。ケンカになったのか。冷戦。……大丈夫。そのうち、ほとぼりも冷めるよ」

「うん……」

真さんの言葉が全身に染み渡る。

泣けてきそうだった。

次の日、真さんは何処かへ消えた。

『2・3日消えます。シュシュツ』という、置き手紙を残して。

シュシュツと消えた真さんの事より、あたしは寿也の事で頭がいっぱいだった。

どう謝ったらいいんだろう。『勝手に部屋を見てごめんなさい』？

でも、部屋を見たいと言ったわけでは無かった。

あの時……。

「寿也つてさあ、ホラ。友達居ないのよ。困った子ねえー。だからっ、ンモー、嬉しくって嬉しくって。寿也にもついに……ああ青春！ ピンク春と読んでも青春！ なのね」

と……寿也のお母さんは大興奮していた。

あたしは寿也のお母さんとリビングのソファに並んで腰掛けて、紅茶を頂いていたわけだけれど。

意味のわからない事を言われてチンプンカンプンだったあたしの手を引いて、

「見せてあげる！ 寿也のスイート・ルーム！」

と寿也のお母さんは調子をこいた。手を引かれるがままのあたしだった。

……今から思えば、遠慮しとけばよかったんだ。
もう遅い。寿也は怒っている。

……。

第39話（何処かで）

あたしは学校帰りの途中だった。

もう紅葉も、終わりに近づいていた。ここ2・3日でグッと寒さが増している。

そろそろ一枚 上着がいるのかな、と考えつつ校門を出た所で。バツタリ千歳くんと出会った。

「や。寿、元気？ 相変わらず電波送つても留守電にメッセ入れても、返事くれなくて」

と、今日は白のダウンベストを着ている千歳くん。手をパツと上げて挨拶あいさつをした。

「いつもと変わらないけど。……たぶん」と あたしは言った。

ここずっと、寿也とは口を利いていない。怖くて話しかける事ができなかった。

怖くて……。

「ふうん。何か元気ない。まあいいや、それより真木さん。一度さ、聞いてみたかったんだけど……」

チラッと、横目で あたしの顔を窺うかがった。
何だろっ？

……

……その時ちょうど木枯らしが吹いてきて……あたしと千歳くんの足をさらっ。

ザワツ……。カサカササ……。

落ち葉が団体で地面の上を、駆けてくる。

千歳くんは静かにあたしを見つめた。

……

千歳くんがゆっくりと……口を開く。

「……俺たち何処かで……会った事無いかな？」

ザツ！……

いつせいに、風が吹いた。まるで太鼓を打ったよう。

静かだった空気が騒がしく、あたしたちを撫でた。木々が見えている。あたしたちを高めから、見下ろすように。

枯葉舞い散る秋の終わりの夕暮れ。あたしと千歳くんの居るこの場所だけが、いつの間にか別次元にすりかわったかのように思われた。

千歳くんの言葉が妙に頭にこびりつく。

『俺たち 何処かで……』

何故そう思うのか……と。

あたしは返答できなかった。

「……ごめん。気のせいかもしれない。気にしないで。寿に、よろしく」

……クス、と頼りな気に笑って千歳くんは去って行った。

あたしは立ち止まったまま……。

まるで時間を止められてしまったかのように、動く事ができなかった。

あたし、千歳くん、寿也。

……あたしたち、魅かれてる。

……おかしいな……？ どうして あたしたちは魅かれ合っただろう……？

答えの出ない問いがグルグルと頭の中で回っていただけだった。

あたしはその足で背犬川へ行っただ。ただ何となく……だ。そうしたら。

川原に、寿也が居た。「げっ」

あたしの進む足が止まる。辺りは夕暮れから徐々に暗くなり始めていた所だった。

あたしは寿也が かがみ込んで何かをしている様子を、まだ遠くの方からジッと目を凝らして見ていた。

ここからだ、寿也に気づかれずに済む。だけど、寿也が何をしているのかが、見えないし わからない。

どうしよう。気になるな。困ったな。

あたしもその場に かがみ込んで、しばらく寿也の動きを見ていた。

何か手を動かしているように見えるんだけど……と、寿也の手元に注目してジッとしていた。

するど。

寿也の手元の物が、崩れた！ 何だ何だ？
あたしはパチンと指を鳴らした。わかったぞ！

川原の石を積んでいるんだ！

……。

……何やってんの？ 寿也……。

第40話(UFO出現)(前書き)

受験生の方は40話は読まないで下さい。41話も? 気にしない方はどうぞです。

第40話（UFO出現）

あたしは立ち上がる。

そうだ。寿也に謝ろう。そう思いついた。

うん、それがいい。こうやって手をこまねいて待っているよりは、きつといい。

決心したあたしは歩き出し、寿也の背後に忍び寄る。

堀を下り、寿也の背後に近づいて「と……」と口を開いた時。

空が突如、輝き始めた。

段々と白く……川の水面をも照らし出す。

「な、何！？ ……あれ」

あたしが叫んだ。光だけけど、淡いせいか優しい輝き。目を細くした程度で、ポカンと空を見ていた。

そして あたしの声が聞こえたのかどうかわからないけれど、寿也はあたしの声に振り返る事も無く、慌てる様子も無く かがんだままで。

ただ顔を上げて上空を見ていた。

また、積みかけていた石がコトンと、寿也の手元で崩れる。

あたしと寿也の前に現れたもの。

それは……。

「UFO……」

寿也が呟いた。

土星のように、球の周囲にリングが取り巻いたような形の、飛行物体。

銀色に優しく光り輝く発光物体。

遠くからやって来たのだろうか。川の上空でピタリと止まってい

た。

「……………」

あたしと寿也が並んで唾然としていると、ピタリと止まったUFOはスウ〜ツと下へ……川の水面スレスレで止まった。

UFOが動くたびに周囲に風が発生し、あたしたちの体にぶつかる。

大きさ、軽自動車一台が入っていきそうなほど。

やがて、リングを避けて出入り口らしき空穴がゴムのように伸び縮みしてできた。

中から人が……出てきた。

細身体型で、サングラスをかけた白衣のお姉さん。白衣に隠れて見えにくいけれど恐らくタイトスカートを履いて、そこからスルリと音が鳴りそうなほど滑らかで細い足がのびている。

前髪は七三分け、少し赤茶の混じった黒い髪の手端はパーマがクルッとかかっている。

誰が見たってスタイルのいい美人だ。憧れる。

しかし宇宙人だろうか？ ……これだけ美人体型でも。

あたしが戸惑い、迷っていると。美人な宇宙人（仮）はこちらに進み出て来ようとした。

そして……。

ザブン！

当たり前なんだけど、UFOの下は……川。

だから……落ちた。

第41話（こんにちは）

何で わざわざ川の上に降りてきたんだろうか、この未確認飛行物体またの名をUFO。

出てきた人？ は川の中に落ちているし。

……ただ、浅かったから、首から下の衣服が濡れた程度で済んでいる。

「Oh! Noオ！!?」

そのまんま、『Oh! No!』のポーズをとっている。美人な宇宙人（仮）。

「あ、あの。大丈夫ですか？」あたしは言語が通じるか わからなけれど、とにかく声をかけてみる。さっきのは英語のように聞こえたのだけれど。

「大丈夫よプリンス。ありがとう。ちょっと着地失敗ね。いつもこうなんだから……」

よかった、日本語だ。あたしはホツとする。

しかしいつも着地失敗していると言った口ぶりだ。本当に大丈夫なんだろうか。

立ち上がった寿也があたしより前に出る。

「あんた誰だ。僕か真木に何か用か」

気のせいかな、寿也が強気な気が。どうしたんだろう？

「初めまして。私はMWS調査チームの総括メンバーの一人。綾島あやしまのどか。日本育ちのミルキーよ。よろしく」

サングラスを取って、黒い瞳を見せた。

「真から連絡を受けてすぐ飛んで来たんだけど。あなたが寿也くん
で、そっちが……」

「真さんはココには居ません。それより、真さんに何て言われて来たんですか？」

まるで言葉を遮るかのように、寿也は質問をぶつける。

寿也……？

「やけに突っかかる子ね。寡黙な子と聞いていたのに。まあいいわ。私、調べに来たのよ」

そう言いながらズブズブと水の中を歩き、寿也の前まで歩み寄る。

「調べに来たって……？」

と、あたしが言いかけた時。

何と何と、その綾島とかいう人は！

ひしっ！

と、寿也に抱きついてしまったではないか！ 濡れた服のままです。

「……！？」

目を丸くする あたし。寿也も、かなり手格好が驚いている。

しかも何と！ 抱きつかれたかと思ったら……！

モミモミモミモミ。

絡みついた腕で、寿也を もみほぐす。

ぎゅゅゅと、しがみついた状態。

「なにになになにに……！」

あたしの両手が、胸の前でワナワナと震える。

「なななななっ……」

ドツカンッ！！

あたしから何かが噴火した。

「何してんのよおおおおっ！！」

第42話（データ）

あたしは その綾島とかいう女の人を思いきり突き飛ばすか、引っぺがそうとした。

勢いよすぎたのか2人の体は離れたけれど、寿也だけ尻もちをついてしまった。

しかしあたしは謝るところでは無い。

ちよつと、何してんですか！

「気にしないで。これが私流の調べ方だから。寿也くんのデータをとろうと思って。私の力で血液検査もレントゲンも必要なくなるからね。さてと、あなたのも とらせてもらえるかしら」
そう言つて、あたしの方に寄つて来た。

「い、いやあああ！」

あたしは叫ぶ。

さらに、後ろを向いて、逃げる。

「あ、待つてよ！」

逃げるあたしの後ろの方で叫ぶ。「ちよつと！」

「寿也のバカアアア！」

あたしは混乱して、自分でも わけのわからない事を叫びながら走った。

おかしい。

寿也に謝るところか、ますます溝を深くしてしまつたような気がする。

あたしは家に帰つて落ち着いてから、沈んだ。

……

真木が去った後。

寿也は静かに立ち上がった。眉間にシワを寄せながら、パンパンと服についた砂を払う。

「真木に王女と言うな。知らないんだ本人は」

寿也はジロツと相手を睨んだ。

「そうだったの。だからあんなに……ごめんなさい」

本当に申し訳なさそうに、シユンとする。「まあバレてないからいい」

少し落ち着いて、寿也は平常な顔に戻った。

「本当に飛んで来たんだな……目立ちすぎだ」

「私、超能力が少し使えるの。よろしく、同士」

と、手を差し出し握手を求めた。

「まだあなたを信用していない。今度来る時は普通に、真さんと一緒に来て」

寿也はそう言ってプイと去った。

握手を堂々と拒否された綾島のどか。

「エーン……」と、のどかは泣き真似をしてみせる。

そして、チロつと舌を出した。

あたしのムカムカは成長していた。

家の台所で、フライパンの中のチャーハンにイラつきをぶつけて調理している……のだが、はたから見ると何処かの中華料理人にとり憑かれているように見えるだけかもしれない。

ジャ！ ジャー！ ジャー！ ジャー！

かき混ざる具。フライパンの中で踊る飯。暴れ狂うコンロの炎。

非常にあたしはイライラしていた。

「おまちどう！」

皿にチャーハンが盛られドドン！とコタツ机の上に置かれたが、具も飯も黒焦げで皿からこぼれていて汚い。

さらにスープも。汚い上に味が……小宇宙。

「ま、真木。今日はやけにアグレッシブだな」

かなりウロたえる先生。「べつに！」あたしは気にせず座ってチャーハンを食べる。

カカカカカッ！

……音にすると、こんな感じでチャーハンを口に かき込んだ。

知らない、寿也のバカ。

冷静に考えれば、寿也は何も悪くないのだけれど。

ええいつ、ただのヤキモチだ。オラオラオラあっ！！
カカカカカッ！

「真木い……」

先生の両目から涙がドバーツと流れていた。

きつと、スープが辛かったに違いない。

第43話（握手）

数日後。

冬がそろそろ近づいてくる頃。日がもう、こんな早い時間に沈みかけている。

ある日あたしと寿也は先生に呼び出され、理科実験準備室に集まった。室内には、壁際に棚や人体模型が並ぶ。理科で使うフラスコや試験管などの器具や調具がキレイに整頓され、隅に寄せられて。部屋の中央周囲は広く場所が空いている。

「そろそろ2人とも、仲直りしないか」

先生だけが丸イスに腰かけて、そう切り出した。部屋の中央にあたしたち3人は集まっている。

あたしと寿也がケンカしたまま険悪なのを見るに見かねて、言い出してくれたのだろう。腕を組んで、難しそうな顔をする先生。

「でないよ、真木の飯が。いやいや」

ポロツと先生は本音をこぼした。昨晚食べた天井がよほどキイタのかもしれない。

あたしの表情は固かった。寿也は……相変わらずいつもの無愛想だ。

「仲直りの握手をしよう。ほら、2人とも手を出して」

先生に促されて、あたしと寿也はためらいがちに片手ずつ手を前に出した。

握手。すれば、仲直り、できる……。

これでやっと……。

あたしと寿也は握手した。それは別に問題無く、普通の握手だった。

ただのだけれど。
手を繋いだ瞬間。

(え……?)

フツ……と、辺りが暗くなった。音も無くそれは突然。

沈みかけていた太陽が、地平線の向こうで力を失い落ちてしまったのではと思つて窓の方を見たりした。

ところが。

「……!？」

窓なんて無い。暗くなつただけではない。準備室にあつたはずの棚や調具、人体模型といった物が何も無い。

あるのは暗闇だ。暗闇だけ。あたしたちだけ。

先生の姿も無かつた。……消えた？

「と、寿也……!？」

「待て」

こんな時でも慌てない。それは尊敬するけれど……でも……。

寿也は沈黙したまま、あたしと手を繋いでくれたまままでいてくれた。
た。

そのおかげで あたしは不安が……ふくらまずに済んだ。

あたしたちが しばらく手を繋いだままでジツとしていると、やがて闇が晴れてきて少しずつ周囲の様子や形が明らかになっていった。
た。

まず刈られていない伸びっぱなしの植物がたくさん目に入る。そして木々。……野の匂いがする。山の中の山道にあたしたちは居るらしい。人が通れるようになっていいる緩やかな坂道の途中に立っていた。

太陽が薄い雲に隠れてか、頭上空にぼんやりとあった。ただあたしたちは周りに浮かび上がってきた物に、驚くしか無かった。

「ココは理科室じゃない……外だ」

「ココは何処なの!？」

寿也と繋いでいる手に力が入った。キョロキョロと、見渡す。

木々のあいまから、ココは高い位置にいるのか下方の景色がチラチラ見える。見える範囲は木や植物が生い茂るだけで、人工物は見当たらない。

「何か……焦げ臭い」

あたしは変な臭いが風にのってする事に気がつき、クンクンと臭いを嗅いだ。

「火事だ……」「え?」

「見る」

寿也はもっと下方の、もっと遠方先を見るようにアゴで方向を指した。

あたしも見る。

寿也が言った通り、ココよりはるか遠方で建物から黒い煙が上がり。炎が姿を現し激しく建物を燃やしているさまを目撃した。

「あああ!」

あたしはびっくりして、寿也から手を離れた。

どう見ても火事だ!

白っぽい壁造りの建物だと思った。でもまるで、あの建物は……。

「病院……」

ボソツと、寿也が呟いたのをあたしは聞き逃さなかった。

「そうだよ! 病院じゃない!? だってホラ、十字のマークが」

よく目を凝らして火の中を見ると、確かに建物のてっぺんに付いているマークがそのように見える。

病院が火事！？

あたしたちがその光景に釘づけになっていたせいで、背後の草陰から出てきた人物に気がつくのが遅れた。

ガサラツ。

草木をかきわけける音。寿也の方が先に振り向いた。

第44話（木葉村）

遅れて、あたしも振り向く。

「！」

後ろに現れたのは女の人……あたしたちを見て、ビクッ！と驚き足を止めた。

黒いジャケットのスーツ姿。白いパンプスを履いている。ショートカットで耳に真珠のピアスがチラついている。どう見ても山向けの格好ではないし、パンプスはせっかくの白さが泥まみれだ。「あなたたち……」と目を大きく見開く。

「追っ手じゃなさそうね。村の子？」

と、その女の方は聞いてきたが、あたしはどう返答していいのかわからない。

困っていると、「ココは何処ですか」と寿也が逆に聞き返した。

「木葉村……よ」

女の方は、あたしたちを調べるように目を移しジロジロと見る。

木葉村！？

「と、寿也。木葉村って」

「真木、落ち着け」

と、あたしたちが、そんな反応をしていると。さらに驚いた顔をして女の方は叫んだ。

「寿也って、いった!?」

信じられない、といった顔をする。

ええ？ 何なに？

どういう事 ……!?

「私は澤田蝶子。ちょっと仕事の手でココに寄って、それで」
「女の人がまず自己紹介をした。少し考えた後、「あなたたちの名前は？」と聞く。

「由高寿也」

「軽井真木」

あたしたちも名を明かす。すると、寿也の方を見て蝶子さんとは愕然としていた。「嘘でしょ……？ どうしてココに来たの……？」

そんな事を言っている。

「僕を知っているんですか？ さっぱりわけが、わからない」

寿也がそう言う。あたしも同感だ、と蝶子さんに視線を送った。

蝶子さんの片方の目尻から、涙が。口を手で押さえて、懐かしむように寿也を。

「私は あなたを知っている……私の事、覚えてない？ 寿也」

寿也は困惑した。はっきりとは わからないけれど、一生懸命心当たりを思い出そうとしているように見える。

「寿也……」

と、もう一度、蝶子さんが声を漏らして名前を呼んだ時。

寿也は何かに弾かれるようにパチンと、目の色を変えた。

「ミルクうどんの！」

……

ミルクうどん？

「僕の母ですか。それとも……」

え！？ ……あたしは驚いて2人の顔を交互に見た。けれど、蝶子さんはすぐに残念そうに力無く首を振る。

「……違つわ。誤解。私は あなたの母親じゃない。あなたのお母さんから……あなたを少しの間、面倒をみていただけ。……ごめんなさい」

何故か謝った。

寿也は一步前に入る。

「母は何処ですか」詰め寄る。

しかし蝶子さんは答えない。顔を曇らせた。寿也から顔を逸らす……。

あたしも さっぱりわけがわからず どうしよう、と寿也を見守るが。

やがて寿也の体はバツ！ と後ろを向いた。

「まさか、あの火の中!？」

寿也が身を乗り出す。すぐ前は道の無い、木々が阻む急激な坂だ。崖だ。「寿也、危ないよ!」……

目先、遠くでは。変わらず延々と病院らしき建物が燃えているさまが。火は全然鎮火する気配は無い。

あたしは寿也の腕を掴んだ。

第45話（火事）

「危険なの！ 行ってはダメよ！ 村の人たちに見つかってしまつたら、あなたも……！」

あたしと寿也は ゆっくりと蝶子さんの方を向く。

寿也が？ 行ったら危険？

どうして？

「わけを話すわ……ついて来なさい。……未来の子たち」

涙を拭きながら、蝶子さんは山道を歩き出して下って行った。

ここは木葉村。木葉市になる前の。

要するに、あたしたちは過去の木葉村へタイムワープしてしまったのだ。

何という展開。

こんな都合のいい事って、あるのだろうか？ 寿也と手を繋いだだけなのに。

それにしても、これはチャンスだ。

この蝶子という人は、知っている。寿也の出生のすべてを。

「ひとまず、村を出るわ。私の車に乗って。アレだから」

蝶子さんが山を出た所の道路沿いに停めてある、ワゴンR車を指さした。

あたしと寿也は言われた通りに車の後部座席に、並んで乗り入った。

エンジンがかかる。蝶子さんは車を発進させる。狭い道で華麗に車をバツクさせたりして、Uターンした。

話の続きは、しばらく車が走ってからになった。

蝶子さんから話を切り出す。

「驚いたわ。寿也つて、まさか！　と思っただけど。由高、つていつたから。確信したの。由高さんは、今のあなたのご両親でしょう？」

「……はい」

「さつき、まだ4歳だったあなたを由高さんに預けてきたわ。私はあなたの本当のお母さんの様子を見に、こっちへ戻って来たんだけど……」

顔は見えないけれど、声のトーンが下がる。

「あんな火事、もう助からない……」

絞り出すような声で言った。

さつきの火事を思い返す。遠かったけれど、はつきり炎が見えたという事は現場は　かなりの大火事だったのでないだろうか。

「村の人が放火したとは限らない。ただの事故かもしれない。だけど、あなたとあなたのお母さんは、村の人たちから嫌われて……気味悪がられていたから」

「……」

あたしと寿也は無言だった。

村の人たちから嫌われていた？

だから？　だから火をつけたの？　何で？

「村の人たちは、ヨソ者を嫌う。しかも、あなたは……」
そこまで言つて黙った。あたしは、ハツとして言った。

「ミルキー星人だから……？」

「そうね」

蝶子さんはバックミラー越しに　あたしたちをチラッと見た。

「と、いう事は、あなたもミルキー？」

「は、はい」

「そう。寿也のお友達？」

「そ、そうです……。手を繋いだら、こんな所へ来ちゃって」

「フウン……？ 不思議現象ね。そんな事が」

あたしたちの会話にメスを入れるように、寿也が口を挟んだ。

「母は、村の人たちに。だから村の人たちは未来まで、それを隠そうとしたってわけだ」

第45話（火事）（後書き）

第46話（赤い消防車）

車は大きな道路を走る。

寿也は、ヒジをついて車の窓から外を見た。窓にうつつた寿也の顔が うっすら見えるが、表情は特に崩れてはいない。

「隠す……？ そう」

寂しそくに言った蝶子さんはハンドルをきる。車は止まる事無く、景色は段々とビルや商店といった建物で賑やかになりつつあった。今、何時だろう。日は高いから、昼なのだろうけれど。

……カンカンカンカン……ウゥ。

時々、あたしたちの車の対向側を赤い消防車が何台も通りすぎて行った。

「ミルキー星は 侵略された」

……。

いきなり、蝶子さんの口から『ミルキー星』という言葉が出て、驚く。

「そこには王と王妃、それから王女と、側近の科学者たちが居た」
空気が突然張り詰めた。

え、と あたしはキョトンとする。

ミルキー星の王様？

「しかし侵略によって王と側近の科学者は……」

その先は言わなかった。

「……残されたのは、王妃と王女と、科学者の奥さん。科学者が残したアイテムを持てるだけ持ち、アイテムを使って、命からがらミルキー星をワープ脱出。しかし混乱のさなか、王妃は星に取り残され行方は不明」

まるで何処かの物語のように、蝶子さんは同じ低いトーンの口調で話していく。

あたしたちは邪魔せず、ただただ聞いていた。外では外の喧騒のはずなのに、何故だか音なんて聞こえないほど車内は静かだった。

「地球に辿り着いたミルキー星人たちと、まだ産まれたての王女を抱えた科学者の奥さん」

……カンカンカンカン。ウ〜ウ〜ウ〜。

また横を、赤い消防車が走っていく。危険を思わせる赤。慌てるような耳残りの音。^{おん}

「その科学者の奥さんが、寿也くんのお母さん」

カンカンカンカン。

もう何台目なんだろう。わからない数。

「そして」

不吉を前兆するかのようになり、胸騒ぎがおさまらない。

「王女とは、リリン王女」

リリン王女……？

聞いた事が無い。

一体、それは誰。「知らないわ。寿也、知ってる？」とあたしは横の寿也に聞いた。

「……………さあ」

寿也は窓の方を向いたまま。

蝶子さんは続けた。

「よっぽど悲惨だったんでしょ……………。寿也くんのお母さんは、おかしかった」

ズキ……………と、胸が痛んだ。

寿也の顔を見る事ができない。

「地球に持ってきた、『惑星シャンプー』を飲んだ」

あ、と声に出そうになった。

『惑星シャンプー』……………あたしは死のうと一度口にした。どういうわけか、生きていたわけだけれど……………真さんの話では、絶対にそれは有り得ないと。

ならば、寿也のお母さんは……………？

「死のうと思ったのね……………でも、死ななかつた」

蝶子さんの言葉。

え？

死なない？

「双子が産まれた」

第46話（赤い消防車）（後書き）

第47話（片われは？）

は？

双子が産まれた……って。どういう事？

あたしは、わけがわからなくなった。

すると寿也は顔を窓から運転席の方へ向けた。バックミラー越しに、蝶子さんを少し睨むかのように……見た。

「僕が双子？」

寿也が言う。

「双子お！？」

あたしの大声が車内に響いた。

車がピヨンと、飛び上がった……のは気のせいだ。

寿也が双子。

正直、ミルキー星が侵略された事よりもショッキングなニュースだった。

……うそお……。

あたしが寿也をジロジロと見たら、寿也は「何だよ」と言わんばかりの顔をする。

寿也だって同じく、衝撃的だったはず。

この地球の何処かに、もう一人の寿也が？

「片われとは会っていないの？ まだ未来では」と、蝶子さんが何気なしに聞く。

寿也の片われ。

片われ……。

……。

あたしと寿也の目が合った。いや、顔を見合わせた。

思い当たるフシが、無くはない。ミルキー星人で、寿也に背格好のよく似た人物。

あたしと寿也の脳裏に、一人の人物が可能性として思い浮かんだのだ。

一人の人物が。

何故か、脳裏に浮かんだ彼の両手には、手術用のメスと鉗子^{かんし}が。

……やっぱり？ ……

「私があなたのお母さんと出会ったのは病院で。私は、ミルキー星人が居ると噂を聞きつけて調べに来ただけだったの。あなたのお母さんと仲良くなって、色々とこれまでの事を教えてくれた。守ろうと思ってた。あなたを守るために、あなたを私の友人に預けて……」

「あの！ 王女と、その片われの子は、どうなったんでしよう!？」

あたしはシートの後ろから運転席へ身を乗り出す。蝶子さんは答えにくそうだったけれど。

「それが、わからないの。寿也くんのお母さんが…… 2人を連れて何処かへ行ってしまった事が一度だけあったのだけれど」

2人…… 王女と片われだけを連れて？

「村へ戻って来た時には、彼女一人だったらしいわ。そして口も割らず、病室ですつと寝たきり状態のまま…… まだこれから探すけれど、もしあなたたちに心当たりがあるのなら……」

ピカッ。

突然、車の前方が大きく光り出した。

「!?!」

視界いっぱいの中へ、車が飛び込んで行ったようだ。

蝶子さんも光の中へ、消えて行く。「やつ……!?!」

あまりに眩しくて、目を開けていられない。あたしも寿也も、腕で身をかばうような姿勢をとった。

光の中へ。光に、包まれていく! ……

寿也……!

何……処……!?!?

あたしは手さぐりで、すぐ隣にあるはずの寿也の手を探した。でも見つけられない。どうして。

やがて、光は おさまった。

「真木!」

聞き覚えのある声我突然 聞こえた。

恐る恐る目を開けると、両腕を挿んであたしの顔を覗きこんでいる、懐かしい先生の顔。

先生!?

「何処に行ってたんだ! 消えたと思ったらまたすぐ現れて。由高

は!?!?」

「えっ!?!?」

先生の言葉に驚愕した。すぐに周囲を確認する。

ここはちゃんと理科実験準備室。先生も居る。戻って来たんだ。

でも寿也の姿が無い。

「寿也！」

あたしは先生に　すがりながら、暗くなり始めていた窓からの空
に、叫んだ。

第48話（背犬川で）

寿也だけ、別の地に降りた。

ココは現代では無い背犬川。

しかしそれは寿也には最初、わからなかった。

まずは寿也、自分の現在位置を確認する。

川に架かる大橋の上に居たので、橋を渡りきり、橋に書かれている名前を見た。

『背犬橋』

（……あやつぱり。特に現代のとは変わりが無いな）

寿也は少しだけ安心した。

道端に一つ、クシャクシャに丸まった新聞の きれはしを見つけ
る。その小さな塊を寿也はヒョイと拾って、広げた。

日付が書かれていた。その日付から、だいたい自分がどの時代に
居るのが判明できた。

（そう現代から遠くないみたいだな……さて どうする）

いくらミルキー超人的ハイパーボンバーな寿也でも、タイムワー

プは できない。

途方に暮れる。一体どうやって帰ればいいのか。

真木も居ない。居な……。

ふと、橋の下方を見下ろした。背犬川のすぐ側の、川原で。
誰か居る。

一人は倒れていて、側に誰かが居る。何かをしている。手に白いボトルを持ち、どうやらその中の液体を倒れている一人に飲ませているようだ。

寿也は隠れながら、コッソリと少しずつ、様子が見える程度まで近付いていった。

倒れている方も、何かを飲ませている方も子供だった。そして倒れている方は、女の子。ブ厚い、ギャグみたいな黒いメガネをかけた太っちょの少女だ。

何かを飲ませているのは普通の少年。白いパーカー。陽にやけたような肌だが華奢な体つきだった。そして寿也はこの少年を知っていて確信していた。

(千歳……！)

今より少しばかり幼げな、千歳だった。

……一体何を？

寿也は全神経を集中させた。今ココに居る自分とこの距離からなら会話の音も聞きとれるかもしれない。

ミルキー電波を応用してでも聞いてやろう、と、寿也はしゃがんで身を固く、息をひそめていた。

一人言でもいい。何か話さないか。

一言だけ聞こえた。

「俺の理論じゃ助かるはずなんだが。まあいいや、起きると面倒だし」

そして少年は、手に持っていたボトルの表面を着ていた自分の服で拭き、倒れている少女の側にそっと置いた。それから川下へ去

って行く。

ヒュウウ……風が吹いた。川の表面に波を立たせる。完全に相手の姿が去って見えなくなった所で、寿也は立ち上がった。

今度は自分がまだ倒れたままの少女に、近づく。何をされたんだ？

少女の顔にハッと気がつく寿也。

一步退く。

少女の顔がブスだったからでは無い。

千歳と同様、寿也はこの少女をよく知っていた。

「真木……！」

第49話（理性、そして感情）

寿也の中で、バラバラになっていたパズルのピースが組み合わさっていく感覚が走った。

『惑星シャンプー』を飲んだ真木。

『衛星リンス』を飲ませた千歳。

そういえばシャンプーの話をしていた時は一度も、千歳は その場には居なかった。

何て事だ。

こんな事なら、千歳とデートでも何でもしてもっと話をしておくんだっ……たかもしれないが、まあいいか。解剖されたら嫌だしそれは と、寿也は思った。

「うっ」

真木は苦しそうに呻き声を上げた。顔は赤みを増していて、顔中、全身に汗が浮かび上がっている。熱もあるのではないだろうか。

（何故だ？ 『衛星リンス』で真木は助かるんじゃないのか？）

……

寿也の額にも微かな汗が。寿也はヒザをついて、そして苦しそうにあえぐ真木の顔を見つめた。かなり息もゼエゼエと、困難に陥っている。

とりあえず気道の確保。真木のアゴをクイと持ち上げ、呼吸をしやすいように頭を反らせた。

触ると、熱い。

どうなっているのか、真木の体は。

まさか真木の体の中で、シャンプーとリンスがケンカでも？
…と。

寿也は焦った。

このままではきつと、真木が死んでしまう。

(でもココは過去だぞ。余計な事をして、もし未来に影響が出たら
寿也は空になって転がっていたシャンプーのボトルを掴み、

(何が『俺の理論じゃ』だ。真さんもいい加減な事を。どうする…
…)

と、下口唇をかみ締めた。

ボトルを置くと、少しコロコロと転がる。

寿也の中では理性と感情が うごめいていた。

真木を見下ろす……。

(この真木はまだ姿が変わる前。僕はこいつが王女だという事は知
ってはいたが、特に深く関わる気なんて最初から無かった。手の内
に入れといた方が手を貸せてやりやすいかなとか、死なない程度で
見守っていてやるかとか……それぐらいしか思っただんだ…
…けど……)

誰かに言い訳をしているとも見える寿也の言葉は続く。

(でも真木は……一度関わり出してからは、どんどん……僕の中
に)

演劇で主役をやって。同じ鍋のスキヤキを食べて。

ホテルでトランプ。自分の家の部屋は見られる。

過去へは一緒にタイムスリップ。

何故か真木の顔ばかりが浮かんでくる。

笑った顔、へこんだ顔、叫ぶ顔、怒る顔……表情が、クルクル変

わる。

とても真似できない……

真木の泣いた顔が浮かんできた。あの……ホテルでランプを
していた時のだ。

何で泣いているんだ……『だって、あたしが寿也だったら、悲し
い』。

（変な奴……僕の代わりに泣く、なんて。

それとも おかしいのは、僕なのか）

「う……」

もう一度、真木が声を出した。寿也はグッとコブシを握る。

そして手を……両手を。真木の心臓のあたりに、広げて重ねて……
置いた。

第50話（集中）

集中しろ。

集中するんだ。

助かるか、わからないけれど……。

「あぐ……うづ……」相変わらず真木は苦しい声を。

（真木……！）

夕日はとつくに沈み、夜が始まるうとしていた頃。黒いカーテンが、景色を包む。橋の上を、自動車や自転車が通る音がする。

皆、帰路を急ぐ頃合いだ。風も一緒になって、水面をさらっていき……。

でも寿也にはいつさい聞こえない。

他の そんなものが存在するとは認めないように、寿也と真木だけの空間を。

まるで世界には2人しか存在しないように。

まるでミルキー電波の世界のように。

神経を研ぎ澄ます。

（真木……！）

気でも電波でも水でもアラレでも。何でもいい。よかった。

（死ぬな……！）

真木を…… 助けて。

…… 寿也の両手の下から、やがて淡い緑色の光が輝き出した。
そこを発源とし、徐々に周囲に広がっていく！ ……

まずは真木の全身を包み込むように広がり、それからさらに範囲は広がって寿也の体にまで。

背犬川のほとりで。
輝く……淡く、儂い^{はかな}ような、生命をイメージさせるような、緑色の光。

そんな光の光線が、あちこちに伸びていく。

今 ココに。

寿也の全エネルギーが、集中する。

「寿也が居ない！ 寿也は何処！？ 何処に行ったの！？」
先生！ とあたしは先生の胸に飛び込んで泣き続けた。
先生はあたしを落ち着かせようと、ポンポンと肩を叩く。
あたしと寿也は握手をした途端、過去へとワープしてしまっ
いきなり戻って来たものの帰って来たのは あたし一人。
寿也が居ない。寿也は何処行った！？」

「困ったな。由高をどう捜せば……」
と、先生も弱りきった顔をしていると。
突然、部屋の中の何も無い空間から大きな物体が出現し、先生の

背後からぶつかった。

「×××××……！」

先生の言葉にならない悲鳴。

先生の後頭部に直撃したみたいだが、先生は倒れなかった。

その大きな物体……とは。

「ああ！」

あたしは声を上げた。

先生に当たったのは、リングの部分。それは。

数日前に背犬川にやって来た、土星に形状よく似た UFOだ！

やがてブシュー……ッと、入り口が開く。

「よう岩生！ 待たせたな！」

機体の中から明るい声が聞こえた。

入り口から出て来たのは。

「真さん！」

そう。

ずっと行方をくらませていた、真さんだった。

「こんにちは岩生さん、初めまして。綾島のどか、ミルキー星人です。久しぶりね、真木ちゃん」

と、真さんの後ろからヒョコツともう一人、姿を見せた。

真さんと のどかさん。2人のミルキー星人、登場。

先生は後頭部を痛そうに押さえながら涙目で真さんに聞いた。

「お前何処に行ってたんだ……イテテ。そしてそれは何だ。突然何も無い所から現れたぞ」

狭い理科準備室内いっぱい大きな機体。指さして先生は怪しそ

うに見た。

真さんは機体の胴体をポンポンと叩きながら、“ニビーン”と歯を見せて笑った。

「『タイムマ・シーン』!」

そう宣言するかのよつに叫ぶ。……え!?

「タイムマシン!」?

第51話（行くあても無く）

あたしは先生をドンと横に思い切り突き飛ばして……先生は壁際に突っ立っている人体模型に突進して当たった。

ブチュウ。先生と人体模型の嫌な音が部屋に響いた。

しかしあたしは それどころでは無い。しかも気がつかずに、真さんに すがった。

とりあえず すがった！

「寿也を助けて！ 寿也が居ないの！ 寿也を捜して！」

あたしの寿也コールは止まらない。あたしは熱狂的な寿也ファンのように叫び続けた。

寿也、必ず助けに行くから！

……待ってて！

……
……

緑色の光に包まれて。

寿也がフツ……と力の限界を感じたのと同時に、光は段々と消え入った。

辺りは静寂のカーテンに覆われている。

どれほどの時間が経過していたのか。わからなかった。

寿也は真木の顔色を見て、流れそうになる汗を拭った。

真木の容体は安定している。スヤスヤと、寝息を立てて平気そうだった。

もう、だい、じょう……ぶ。

寿也はその場からそっと離れて……歩き出した。

力を使い果たした寿也は川上へ向かって。彷徨さまようようにフラフラと……歩く。

寿也が川沿いに行くと時々、川の中をスーパーの袋や広告の紙ゴミが、川下へ向かって流れて行った。

寿也は何処へ行こうとしているのか。

特に、決めていなかった。

(とりあえず真木は助かった。他の誰かに見つかったら厄介だ……真木の側からは出来るだけ離れておいた方が……)

行くあても無く。

時の狭間に一人取り残された寿也。

あの元気な方の真木は無事だろうか？ 僕みたいに何処かの過去か未来で迷子になっているんじゃないのか……。

僕の名前を呼んでいるんじゃない。

早く助けに行かないと。あいつは王女なんだ。僕が守らなくちゃ。

僕、が。

と……思った所で、寿也の足がもつれた。身をかばう事ができずに転ぶ。

起き上がれる力も……無い。

(真木……)

チロチロと、すぐ横で流れる川の水音。

まぶたを動かす事すら出来ない寿也の耳に、優しく響いていた。

(ごめんな……)

時折、そよ風も吹いた。寿也の髪をフワリと撫でる。

自然が、寿也を、包む。

第52話（回収）

「寿也あつー!!」

……………？

……………

……………真木？

突如、うつ伏せに倒れていた寿也は自分の体がフワツと浮き上がるのを、感じた。

驚いて反射的に目を開ける。

川原の地面が、遠ざかっていく！

……………どうなっている???

と、寿也は混乱した。すぐ間近で明るい声がした。

「寿也しつかり！ 迎えに来たよ！」

寿也は声のした方を向く。

やっと現状が飲み込めた。

以前に真木と居た時に、2人の前に現れた……………球の周囲をリングが取り巻く形をしたUFO。今 見ると、丸い窓が一つ球の表面に。その窓の中、心配そうな真木や真の顔が見える。

そしてさらに。

こんなもの前には備え付けて無かったはずの機体、球の側面から……………太いアームが一本グイーンと伸びていて、その先の『手』に寿也の体はガツチリと掴まれていた。

名前の通り、『UFOキャッチャー』。1プレイ1000ミルキー

で どうだ。

「……………」

「どうやら僕は助かったんだな。真木も…………。と思った途端、一気に全身の力が抜けた。」

心底ホツとして、寿也は次第に意識が薄れていった。「寿也ああ！」

真木が元気に泣き叫ぶ。

(やかましい…………)

反面、寿也は心の中だけで少し笑っていた。

寿也はグツスリ眠りながら変な夢を見る。

真木が自分に向かって土下座する夢。

「勝手に部屋を見てしまい、申し訳ございませんでした!!……………」
深々と両手を地面につき、頭も地に伏した真木。格好は、あまりよろしく無い。

いやしかし。

「ああ、そうだな。忘れてた、そんな事」

寿也は真木に言っただけだった。

「今度ウチに来たら、キャベツ占いをしよう」

母さんいわく、春キャベツが好ましいぞ、と。付け加えておいた。

第52話（回収）（後書き）

【あとがき】

キャベツ占い？

床に皆でキャベツを叩きつけて 勝ち割るんですよきつと。

「大吉！」

第53話（繋がり）

現代に戻った一行。

寿也を真木の家へ運んだ後。布団で寝ている寿也を取り囲み、それぞれが座っていた。心配そうに、寿也の様子を窺うかがっている。

UFOもといタイムマシンは、背犬川をずっと下った先の湾の中に沈めて隠してある。

水陸時空を自由自在に移動でき、まだまだオプション豊富な乗り物。マシン。MWS調査チームが誇る、素晴らしい乗り物だった。

真がかつて言っていた『スゴイモノ』が、コレを指すかは……わからないが。

「なるほど。澤田蝶子さん、ね……」

真さんが腕を組んで頷く。あたしの真正面で、寿也を挟んであたし話を聞いてくれていた。

「知っているんですか？」あたしが聞く。

「ボスの娘さんだ」

「総括長の娘さんね」

同時に真さんと のどかさんが答えた。「総括長おっ!？」

コホンと、真さんの隣で のどかさんが咳払いをした。

「私たちチームのボスよ。その娘さん。知らなかった、そんな所に繋がりがあったのね。ボスも娘さんも人間だけど、素晴らしい人たちよ。……寿也くんのお母さんの事を聞きつけて、助けようとしてくれていたのね、きつと……なのに」

ぎゅっと、下口唇を噛んだ。その先は言えない。

「仕方無しさ。済んだ事をどうこう言っても。もうわかった。今さら これからもう一度 木葉市へ行つて、知られたくない過去をほじくり返すつもりなんて無いよ。……それより真木ちゃん」

真さんが真剣な目であたしを正面から真っ直ぐに見た。

「は、はい」
一瞬たじろいだだが、またトイレを借りるんじゃないかと、心の中で思っていた。

しかし違う。真さんは少し何かを考えていたみたいだけれど、やがて決心したみたいに改めてあたしの顔を見た。

「君はミルキー星の、リリン王女なんだよ」

……………。

へ？

あたしはズッコけてみせた。

「やめて下さい。こんな時に冗談は……………」とあたしは しょーがないなあといった顔で起き上がって見たが。

雰囲気为重かった。皆、黙っている。

誰一人、笑っていない。「え、ちよつと……………」

あたし一人だけ、空気が違っていた。明らかに。

え。どうして。何で。

だって、冗談なんですよ。

「嘘じゃないんだ。真実。寿也くんも知っている。黙っててゴメン」
真さん、素で そう言った。

あたしの背中に冷や汗が。

「………… ホントに？ …… ホントに、あたしが………… 王女…………？」
まだ信じられなかった。

すると、あたしの隣に並んでいた人物たちが大きな声を上げた。

「真木がおうじょーっ！？」

「寿も知ってたんですか！ スゲー、王族が間近に！
先生と……。」

千歳くん。

あたしはまだ聞いてはいない。あなた、寿也の双子の兄弟なの？
……と。

第54話（照合）

「蝶子さんの話が本当なら、ミルキー星の事情が姿を現してきた事になるね。真実に一步近づいたってわけだ。……ミルキー星が何者かに侵略を受け、脱出したミルキー星人たち。その脱出した中に居た真木ちゃん、本当は王女。寿也くんのお母さんとやらは……どうあれ、地球に王女を抱えて逃げのびたってわけだな」

でも火事で……とあたしは真さんの説明に心の中で続けた。

もう、悲しい事實は呼び起こすのを控えよう。

「寿也のお母さんは、何を考えたかはわからないけど……『惑星シャンプー』を飲んだんです。でも生きていた……」

あたしも説明を追う。

聞いた真さんは難しい顔を浮かべる。

「不思議だ。飲んで、生きているなんて」

あたしは俯うつむいていた顔をキツ！ と見上げる。真さんを見る。言うなら今だ。そう思っおもって口を開いた。

「寿也に双子の兄弟がいるの！」

……

やはり、皆は驚く。

「!?!」「何だっなんて!」「どういう事なの」「寿が起きたよ!」「……いつせいに声が飛び交う中、最後の千歳くんちとせの声に皆が寿也の方を見た。」

寿也は、これだけ騒がしい中。そつと目を開けていた。

「寿也!」

あたしの歓喜の声と同時に、上体を起こす。

だがすぐに「寿いっ!」と、千歳くんちとせに飛びつかれて。せっかく

起こした上体をまた後ろに倒してしまった。「よかったあああつ！」
涙ながらに、スリスリと寿也の胸に頬ずりする千歳くん。
……話を続けていいかしら……。

あたしは。たぶん寿也も。

千歳くんが寿也の片われなんじゃ、と疑っている。

この2人が。

「調べられないかな。寿也の双子の兄弟かどうか。……千歳くんの
体」

あたしが言うと、千歳くんは「俺？」とキョトンとしていた。
すぐに のどかさんが名乗りを上げる。

「大丈夫よ。すぐに調べてあげる。器具も検査も無しで、あたしの
能力で血の成分やら骨格やらDNAやら、調べて照合できるから」
またすぐに。のどかさんは行動に出た。

のどかさんは寿也から千歳くんの体を引っぺがして……千歳くん
の体に抱きついた。

そしてモミモミ。千歳くんをマッサージするようにモミほぐした。
「イテテテテ」

そうか……寿也に以前にしたコレ、調べてたんだ。あの時に寿也
の体も。

「何だか体が軽くなった気がする」

と、千歳くんは のどかさんから離れて立ち上がって、上体をひね
りながらホツ、ホツと肩を動かした。

「肺にガン細胞があったわ。まだ小さかったけど」

「ガン」

のどかさんの報告に、千歳くんはショックを受けていた。「後で
治しに行きましょうね」と、のどかさん、アフターケアは忘れない。

「……で？ 結果は？ 照合終わった？」

真さんが尋ねた。少し眠そうだった。

「バッチリ。お2人は……」

完全に双子です」

ジャジャジャジャーン！！

……『運命』の曲が何処からか鳴り響いた。

第55話（作用）

「アラ。失礼。アルペンからだわ」

スツクと立ち上がり、のどかさんはハンガーにかけて吊っておい
た、自分の黒ジャケットのポケットから携帯電話を取り出して画面
を開いた。ピッ、とキーを押して画面をスクロールさせ、やがて携
帯電話を閉じる。

アルペン……って言ったけれど。誰なんだろう？

「アルペン、っていつて。俺らのチーム仲間。アルペンと俺との
どかと。ボス。この4人がチームの主力メンバーなんだ。あと部下
が多数」

と、真さんが説明してくれた。

のどかさんはジャケットを着ながら、「ちよつと連絡取ってくる」
と言い残して玄関から出て行った。

残ったあたしたちは、それぞれ顔を見合わず。

「……すごいドンピシャで『運命』の曲の着メロ、流れましたよね」
中断された話をどう戻そうかと思いつながら、あたしから話をし出
してみた。さつき上手い具合のタイミングで流れた『運命』の曲は、
のどかさんの携帯電話の着メロだった。これが『何でやねん』とか
の着ボイスでなくて、よかったと思う。

別にウケ狙いで寿也と千歳くんが双子になつたわけでは無い。

「寿！」

もう一度、千歳くんは寿也の体に飛びかかった。

しかし寿也は。今度はサツと体ごと、身をかわす。千歳くんは
ひるまなかつた。

瞳をかなりキラキラさせている千歳くん。

「俺と寿とは一心同体だつたんだね！ ヤッター！」

バンザイ、と手を上げている。

一心同体。それは2人が産まれる前までの話では？ ……今は別々なんだし。

「性別を乗り越えても、結婚はできないんだよ？ お2人さん」

横ヤリを入れたのは真さん。「ああああ……」と千歳くんはバンザイのまま、布団の上に倒れた。

「『惑星シャンプー』の作用」

真さんは考えながら、ヒモを辿るように解釈をしていった。

「口から入れたら死ぬだけだと思っていたが……例外もある」

「どんな？」

あたしたちはゴクリと唾を飲んだ。

「妊婦の場合だ。お腹の中に赤ちゃんが居る場合、子供に影響する」

第55話（作用）（後書き）

【あとがき】

のどかさんの携帯が普通の携帯だと思ったら大間違いだ。
ミルキーの持ち物には注意が必要だ。

第56話（誤った使い方）

あたしは真さんの言葉に、背筋がゾワツとした。

真さんは続ける。

「元は一つだったかもしれない。しかし2人に分かれてしまった…
液体が どう働いたかは知らないが、誤った使い方をすれば違う
結果が起きる。覚えておくようにね」

戒め、のように感じた。一番にそれを感じたのは あたしだ。

あたしは死のうと思った。今は飲んだ事をバカみただったと、後悔している。

あたしは美少女になったけれど、だからといって幸せになれるのか はたまたま なれたかというと、それでも無い。

あたしはあたしだ。先生は あたしの姿がどうであろうと、大事にしてくれている。

下手をすれば あたしは死んでしまって、先生が悲しみに暮れる所だったのだ。

先生、ごめんなさい。

もう、バカな事はしません。

あたしは誓う。空の何処かの、今はどうなっているのか わからないミルキー星に。

「あの〜」

黙って聞いていた千歳くんが口を開いた。

「何？ 千歳くん」あたしは気を取り直して千歳くんの顔を見る。

「惑星シャンプー 惑星シャンプーって。何だか俺だけ、話が見えない感じ。ねえ一体何の事？」

ああそうか。これまで千歳くんはカヤの外。千歳くんの前であたしの不思議の話は、した事が無かったかも。

それは何だか、かわいそうだ。「あのね、あたし、昔……」

あたしは説明した。あたしが かつてブスの黒メガネで、惑星シヤンプーを飲んでも無事だった事。背犬川のほとりで。

すると千歳くんは ひょうひょうと答えた。

「あ、それ知ってる。真木さんなんだ、あの子。俺『衛星リンス』を飲ませて、逃げたけど」

怒る気にも なれなかった。

千歳くんは「家に容器は保存してあるよ。取ってこようか」と言っ
つて、いったん自宅へ帰った。

『衛星リンス』

惑星シヤンプーのケア用品。決して口から入れるものではない。

あたしと違ってさっきの真さんの戒めには、特に反省する様子も無く……というよりは、本人が全くわかってないような気がする。

つかみ所の無い人だ。まあ、あたしは死なずに済んだからいいけれど。

「ふつう。こんなもんかな」

買い物カートを押しながら、レジへと向かった。

ここは近所の大手スーパー。今夜は おでんだ。しかもあたしと先生だけでは無い。寿也と千歳くんと真さんと、たぶんのどかさ

も。あの狭いアパートの部屋の中に、ぎゅっぎゅっ詰めた。きつと外がどれだけ寒くとも、部屋の中は下手をすれば夏並みに暑くなるのではないかと思う。

6人分の食材をカートの中の買い物カゴに放り込み、レジで並んで順番を待つ。

ふと、レジの側の陳列棚にあるアメが目にとまった。

あたしは手にとる。そしてそのアメの袋をカゴの中に入れた。

中に入れたというよりは、大根やらニンジンやらナスやらカボチャやら、本日特価の白米5キロ『べっぴんさん』やらと。食材はカゴの中で山積みだ。カゴの上に乗せた、と言った方がよい。

白いパッケージのアメ袋。

『ミルキーキャンディー・おふくろさん』

おかめが丸い小さなメガネをかけたようなキャラクターが描いてあった。

第57話（現代に戻った後の話）

買い物からキャリーバックを引いて家へ帰って来ると、寿也が出迎えてくれた。

「あれ？ 他の皆は？ 寿也一人？」

部屋に入ると寿也が寝ていた布団は片付けられていて、コタツが用意されていた。上にはミカンが小さなカゴに数個入って置いてある。

まだ体が完全でない寿也は、お留守番だったのだけれど。先生たちは何処へ行ってしまったのだろうか。部屋には寿也しか居なかった。

「学校から電話があつて先生は学校。真さんは さつき戻って来た綾島さんとどっか行つた。千歳はまだ戻って来てない」

「そう……。じゃ、おでん作るよ」

と、あたしは買ってきたものを袋から出し始めた。

台所で食材を広げたり冷蔵庫にしまつたりしていると。コタツに入つてポーンとTVを観ている寿也が話しかけてきた。

「真木」「ん？」

「どうやって僕を助けに来れたんだ？ 過去まで。ずっと引つかかつてた。僕が過去の何処に居るのは わからなかつたろ？」

寿也の言う通り。

寿也と離ればなれになつて あたしだけが現代に戻つた後の話。

たまたま、真さんと のどかさんが乗ったタイムマシンが来てくれて、これで寿也を助けに行けるぞと大喜びした あたしは。

「……………で？ 寿也くんは。何年何月何日地球が何周回つた時に、居るんだい？」

という……真さんの指摘と書いてヒコウを突いた質問に、ヤラれてしまった。

そんなの、わかるわけない。

ああ、寿也は一体何処に居るの!?

あたしはパニックになって、その場へあたりこんで四つんばいになった。

絶望。

あたしの頭の中に、その2文字だけが仲良く笑っている。手を繋いで。

手を繋いで?

「ああ!」

あたしの頭上に閃きのマークが。あたしは一つの可能性を思っていたのだ。

「千歳さんと手を繋げば、過去へ行けるかもしれない!」

イチかバチか。

あたしは、初めてミルキー電波を発信する。

(「千歳くん……! 千歳くん、聞こえたら返事して!」)

初めてだし上手くできるか……。精神を集中して、何処に居るのか わからない千歳くんに呼びかけた。

発信できているのだろうか。自信は無いけれど。

あたしは焦る気持ちを抑えつつ、待った。

アツサリ返事がきた。

(「真木さん? わあ、何だか嬉しいな。寿だともっと嬉しいけど」)

と、明るい陽気そうな千歳くんの声が。あたしはシメタと思った。

（「まだ電波には慣れてないの。とにかく、千歳くんに会いたい。今、何処？」）

また熱を出してしまって倒れたら厄介だ。用件だけを手短かにしたかった。

（「何処って校門前だけど……寿、一緒？ 会えるかなあと思ってた」）

それを聞いて、あたしの胸は躍った。

（「今すぐ行く！」）

あたしは真さんに話し、タイムマシンごと外の校門前へ！

第58話（同じ奇跡）

校門前で あたしたちは騒ぐ。

「寿がミライカムカシに行方不明だつてえ〜!？」

何それ、と千歳くんはバカにしたように言った。「本当なの！

協力して！」

あたしは懇願する。千歳くんは「いいけど……」と疑わしい目をした。

さらに。

「そんな上手くいく？ 寿と握手したから俺と握手しても同じような奇跡が起こせるって言うんでしょ？ 俺は同じ奇跡が2度起こるなんて思えないし、それじゃ奇跡と呼べないんじゃないか、って思うけど。有り得ない事が一度だけ起こるから、奇跡って言うんじゃない。奇跡、という言葉のランクを下げて、偶然、って呼ぶ？」とかかんとか言い出した。

どうでもいいわよ。奇跡でも偶然でも奇遇でも。あれ？

言葉が増えてしまったけれど、そんな事はどうでもいい。

「条件が合えば、同じ奇跡も起こるよきつと。とにかくやってみようか」

真さんがフォローしてくれた。

同じ奇跡。

あたしは絶対上手くいくと、信じている。

まだココでは言うてはいないけれど、千歳くんは寿也と双子かもしれないんだ。

可能性は強くなる。

ただ、あたしは、信じている。

「で……結果、来れたわけか」

コタツに入ってリモコンでTVのチャンネルを変えながら、机に頬づえをついて寿也はあたしを見ずに言った。

ちょうどTVでは漫才をやっている。

今売り出し中の新人コンビ『シロとクロ』。「2人合わせてグレイゾーン！」が売りの若手漫才師たちだ。

はつきり言つて、あんまり面白くない。

あたしは台所でトントんと、野菜を切っていて寿也の方は見ていない。一度見てみたいものだ。寿也を笑わせるほどの凄腕漫才を。

「そういう事！ ただ、皆で繋がっていたけどなー。タイムマシンごと」

あたしは寿也に答える。

そうなのだ。

千歳くんとあたしは手を繋ぐ前、皆で手を繋いでいった。先生、真さん、のどかさん……のどかさんは もう片手で、操縦バーを握っていた。

こうして用意は万全で、皆で一体になって。起きてくれるかわからない奇跡にかけた。

「帰りは普通にタイムマシンを操縦して帰ったの。寿也は、覚えてないよね。寝てたし」

「……ああ」

のんびりした声が後ろから返ってきた。

いいな、こういうのんびりしているのって。

王女とか村の火事の事とか寿也の事とか……せわしなかったせいだよ。

そのせいで、今のこの時間をとても貴重に感じている。

……ジジくさいだろうか？

「フフフ」

ビクッ。

カタタンツ。

あたしが驚いて持っていた包丁をまな板の上に落とす音。
その前に……今のって……。

あたしは ゆっくりと後ろを振り返る。寿也の方へ。
後ろ姿しか見えない、机に頬づえをついている寿也。

今……寿也が笑わなかった??

あたしは奇跡を見た（聞いた）のかもしれない。

TVでは新人漫才師の『シロとクロ』がまだ、面白くないはずの
漫才をやっていた。

第59話（行きたい過去）

「明日の夕方の飛行機でオーストラリアに帰るよ。本当に」

グサツと、鍋の中の玉子を箸で突き刺しながら真さんは言った。

コタツ机とそれにくっつけて予備用の折りたたみ机も登場。机が増えたおかげで、あたし、先生、寿也、千歳くん、のどかさん、真さん……と。6人が座れた。

ただ、鍋が若干あたしと先生から遠い。なので先生の分のおでんの具を、取り分けてあげている。

部屋の中は温かった。皆ホクホクしながら、熱々おでんを食べ始めている。

「え？ 飛行機で帰るの？ タイムマシンで、ひとつ飛びできるんじゃないの？」

と千歳くんが三角になっているコンニャクをフーフーと吹きながら聞く。

あたしも同じ疑問を持った。

「アルペンに……仲間に怒られちゃってね。燃料を無駄にするんじゃないよ。やねえ大バカ野郎、ってね。まあ確かに。アレ、中に乗る奴が多ければ多いほど、エネルギーやら要るわけで……。帰りは のどかだけ乗って、俺は飛行機で帰る」

ちよつとした節約のつもりらしい。

ふーん、そうなんだ。

そういうもの。

もう帰っちゃうのか……寂しいけれど、真さんたちにとって仕事とかあるよね。そうそうあたしたちの事ばかりで引きとめてしまつては迷惑かも。

「それまでに。何処か、行きたい過去とかは無いかな」

全体を見渡して真さんは聞いた。「え？」あたしが返事する。
行きたい過去？

「せっかく持つてきた乗り物だからさ。あと一回くらいは、余裕があつて過去へ時間旅行くらいできると思うんだよ。何、さっき言つてしまったけど燃料うんぬんは気にしないでいい。向こうへ帰ればまだ たくさんあるんだから。どうだろう？」
と……真さんは提案してくれたわけだけれど。

あたしたち皆、人の顔色を窺^{うかが}つたりして……考え込んでしまった。

急に言われても思いつかない。皆がそういう雰囲気を持っていた。あたしも考える。

見ておきたい過去。未来は……あんまり興味は無かった。

だつて未来は これから見られるけれど。過去はどう頑張つたつて見られないし。見られるはずの無いものを見ておいて、スッキリした方がいいと思う。

過去は謎ばかりだつたはずだ。

見ておきたいもの……会つておきたい人……。自分ではダメだよ
ね、歴史が狂いそうだから。

皆、考えながら おでんの具を食べている。

何でか急に、お通夜になつてしまつたみたいだ。確実に、鍋の中
の おでんは無くなつていく……。

「ゲフツ」

先生のゲップが、静かな部屋に響いた。

「真さん」

カタンと、お茶碗の上に箸を置いた寿也が、真さんに呼びかけた。

皆がハツと寿也に注目する。

あたしも寿也？ と眉をひそめた。

「何だい？ 思いついた？」

真さんは心なしか優しげな瞳で見っていた。遠慮なく、寿也は言う。

「僕の母親と話をしたんだけど」

第60話（行ける所まで）

ここまで来たら、誰も何も文句なんて言わない。

寿也は あたしなんかより、よっぽど辛いはずだ。本人は何も言わないし無愛想なだけけれど。

きつとすごく辛いはずなんだ。

「じゃあ……。行ってくるよ、岩生、のどか、千歳くん……。真木ちゃん」

と、タイムマシンに乗り込む前、真さんが呼びかける。

ここはタイムマシンを沈めて隠しておいた湾の港。時刻は深夜の0時過ぎだ。

大きな倉庫が建ち並び街となつて。でも深夜だからシーンと静まり返っている。時々、風が老朽した錆だらけのフェンスを、カタカタと叩く。同じく赤茶けて錆ついているドラム缶の横にある、売店のノボりをパタパタと いわせていた。

少し寒い。凍えはしないけれど、小さくブルブルと身震いがした。タイムマシンに乗り込むのは、寿也と真さんのみ。他のメンバーは お留守番だった。

本当は あたしも行きたかった。でも、あたしが行った所で…….
と思つて、自分を止める。

行くのは寿也だけでいい。真さんは操縦しなければならぬけれど。

皆、意見は一致していた。

「これを渡しておく。……見まわりの警備員にでも見つかったら、面倒だらうしね？」

真さんはコミック本サイズくらいの赤いきんちゃく袋をカバンから取り出した。固形の何かがたくさん入っている。

ゴソゴソと手を入れて取り出して、一個ずつ皆にハイと言って配り始めた。

それは……

おしゃぶり。

「くわえておいたら、自分の姿は見えなくなる」

さらに「ただし見つかったからでは くわえても効果は無い」と付け加えた。

何ていうアイテムなんだろう？ おしゃぶりミルクキー？ 何でわざわざおしゃぶりにしたんだろうか……。

「じゃ、行ってくるよ。寒くて凍えそうなら、家に戻っていたらいいから……」

真さんは あたしを見て言った。それでも言うっておかないと、あたしがココで待ち続けてしまおうと言わんばかりに。

あたし、待つわ。

朝日が昇ったって構わない。風邪ひいたって、構うもんか。どうせ家に帰ったって、眠れそうに無いもの。あたしはそう思っていた。真さんはフツ、と口元で笑って、寿也の肩を叩いた。「行くこう」……」

無言の寿也。でもそれは一瞬の事で。すぐに「……じゃ」と背を向けた。

(……)

あたしは、今見た寿也の顔が気になった。

はたから見たら、いつもと変わらない落ち着いた表情。誰も気がつかない。

あたしは気がついた。

ほんの、まばたき程度の時間だったけれど。寿也は一瞬、あたし

の目を見たんだ。

何かを『言っつて』いるかのようじ。

タイムマシンの入り口から、真さんと寿也が乗り込んだ後。

あたしは閉まる前に、入り口の床に足をかけた。

「！」

その場に居る皆からの注目を浴びる。ギョツとしてあたしを見ていた。寿也も、真ん前で。

「やっぱりあたしも行くわ。行ける所まで、ついて行く！」

第61話（パスワード）

「さてと。パスワードは何にしようか」

操縦席に座った真さんは、腕を組んで考えていた。真さんの前に英字のような文字がズラリと長く一面いっぱい並んだ画面と、アルファベットや記号の書かれたパソコンのキーボード目のような盤が。

少し横には太さの違う、レバーが幾つか並んでいる。あたしの座っている席からではあまり見えないようになっていて、機材の裏側には細い、何十もの本数の赤や青といったコードが見え隠れしている。

ヒエー、下手には触りたくないっ。

とは言っても、発進・着陸の際には必ず固定ベルトを身につけてお締め下さいと入り口の辺りにそう書かれたシールが貼ってあり。今のあたしたちはその通りベルトで固定されているため下手に触る所か手が届かないから触れない。

あたしと寿也は横並びに座席に座り、両肩からかかるようなベルトで体を固定していた。ジェットコースターにでも乗って旅立つ気分だ。

「パスワードが要るんですか？」

「何ケタの」

あたしと寿也は前の座席に居る真さんの背に呼びかけた。

「ん……4ケタから10ケタの間。別に適当に決めて、いいんだけど。適当でいい割には、帰りに同じパスワードを入力しないと元に戻れないという、恐ろしいシステム」

と、ポリポリと頭をかく。

確かにそれは恐ろしい。もし帰りにパスワードを忘れてしまったら。

あたしたちは、路頭どころか時流に迷い先祖の皆さんこんにちは

なんて事になってしまっつかも。

ココは慎重に。

うーん、4ケタ以上の……何がいいだろう。

「1048で」

すぐに寿也が言った。1048？

「1048ね。へーい」

またすぐに真さんが了解の返事を。

1048。

『ト・シ・ヤ』だねー、と。過去のあたしが言った。

ゴワアアアン。プシュウウウツ……。

問題無く、タイムマシンは何処かの地上に着陸した。砂埃が舞っている様子が丸い窓から見える。あたしたちはベルトを外し、外へ出た。

固く身構えて外へと出たが、機体の周りにはのんびりした田んぼや畑が視界いっぱい広がるだけで、幸い人の姿は無かった。降り立った所が山裾で、古い使われているのがわからない大きめの家屋の陰に上手い具合に隠れていたのがよかつたかもしれない。

もし堂々と田んぼや畑の真上に着陸していたら、ミステリーサークルが出来てしまう所だった。しかも、あたしたちが宇宙人だと大騒ぎしてしまうかも。

一応、宇宙人なので間違ってはいない。

「おしゃぶりして。タイムマシンも見えないようにシールドを張っておく。ココが何処だか、見当はつけそうかい、お2人さん」

と、真さんはタイムマシンの中から外に出ていたあたしたちに言っ

た。
それぞれが持っていた おしゃぶりを口にくわえ、辺りを見まわす。

全然わからないなあ……日が、まだそんなに高くは無いから朝だとは思っけれど。

寿也はどうかと見ると、ちょうどスツ、と……腕を上げた寿也。一方を指さしている。
その先には。

……白い建造物。余計な装飾や看板も無い、シンプルな建物。前に広がるのんびりした田畑の遠方に小さく存在する、異質な物とさえ思わせる建物。

見覚えがあった。

よくよく目を凝らして見ると、十字のマークも顕在だ。

「病院……」

寿也のお母さんが居る、居たと思われる……火事に見舞われていた、あの……。

まだ燃えてはいない。

たぶんきつと……あそこに居るんだ。寿也のお母さん。

あそこだよ……寿也。

第61話(パスワード)(後書き)

【あとがき】

再度1048。

覚えておきたまい。

第62話（病院）

場所の見当がついたので、タイムマシンは もう少し移動した。病院より数十メートルは離れた森の中にタイムマシンを落ち着けた。念のため、さつき真さんが言ったように機体には、自身を見えなく隠すためのシールドを。

3人とも、口には それぞれおしゃぶりをくわえていた。バブバブ。

真さんが持つてきて渡してくれた このおしゃぶりをつけると、透明人間の如く姿が見えなくなるらしい。

「本当に見えてないのかな。あたし、寿也も真さんも見えるんだけど……」

と、あたしは確かめるように真さんに聞いた。

「そのはず。見つかってしまっただけでは、効果が無いんだよ。だから俺にも今、2人の姿は見えている。まあ安心して。大丈夫だと思っから」

そう返事が返ってきた。うーん、信用しとくよ真さん。

「じゃ、気をつけてな。ココで待っとくから」「頑張ってね、寿也」
真さんとあたしのガッツに見送られ、ずっと緊張気味だった寿也は歩き出した。

振り返る事無く。

ただ真っ直ぐに……病院だけを目指して。

バブバブ。

道なりに続くアゼ道を辿り、寿也は病院に着く。

手前の駐車場を突き抜ける。遠くから見ると、建物は老朽化し傷んでくたびれていた。白い壁の外装は、黒ずんでいる箇所が処々と見受けられる。

ゆっくりと寿也はガラス貼りの両開きのドアの片方を押し、できるだけ誰にも気づかれないようにと慎重に目を配らせ、まずは数センチ、そして寿也が通りぬけられるほどの隙間を開けた。

人気が無い空気。診療時間内のはずだが、開けてすぐの待合所に外来は一人も居なかった。寿也は少し安心して開けた隙間から体の中へと滑らせる。

どうやら、受付の向こうに人が一人居たみたいだが、恐らく姿の見えていないせいもあって寿也には全く気がついていないようだった。

人気が無い。

……静か過ぎて不気味だ。

寿也はココに来るまで、ちゃんとくわえ続けていた。おしゃぶりを取るうか考えたが、やはりやめておいた。いつ何処に誰が潜んでいるかもわからないし、ココは過去だ。下手をして歴史を変える事にでもなったら……と。

色々と考えながら、待合所から奥へと伸びている暗い廊下へと進んでいった。

ヒタ…ヒタタ……。

気持ちできるだけ足音を立てないように、ヒンヤリとした廊下を歩いた。

お化けになつたみたいだな……そんな風に寿也は思いながら。もしかして病院に登場してくるお化けって皆おしゃぶりをしたミルクイ星人なんじゃとさえ、思った。

そうかもよ。

「……」

寿也は何気なく後ろ上方を見上げた。何か気配を感じて見たが、特に何も無い。あるのは暗がりの中の天井と、垂れ下がってチラチラ光るクモの巣だけだった。

第63話（気配）

2階へ。

さつき壁に案内板があった。見た所、どうやら入院患者は上の階だ。大きすぎず小さくも無い敷地内のこの病院の建物の中に、患者数はどれくらい居るのだろうか。

そしていつかはあの火事で……。

ピタ……と、寿也は足を止めた。

寿也は ある考えが浮かんだが、またすぐに引っ込めた。
そして再び歩き出す。

ヒタ……ヒタ……。

2階に上がった寿也。通路に出ると、廊下に沿って片側にドアが一定の間隔に並び、反対側には窓が突き当たりまで並んでいる。何処の窓が開いているのか暗がりわからづらいが、風が吹いてくるのを感じた。

通路を歩きながら……ドアの一つ一つに示された、横に書かれている入院患者の名前の札を順に目で追っていく。

鈴木……栗沢……マイケル……ドットコム。

寿也は とつくに気がついていていた。

自分は、母親の名前を知らない。

蝶子も教えてくれなかったし、自分だって誰にも聞かなかった。
どうやって見つけるのか。……

寿也には自信があった。

きつと近づけば、気配でわかる……と。

アンビリーバボ超能力少年。

ヒタ。

廊下を進み、一番突き当たりの部屋のドアの前で。寿也は立ち止まった。

名前は……書かれていない。

でも、誰か、居る。

寿也は思った通り、『何か』を感じた。言葉では説明ができないけれど、全身で、衣服を超えて肌を感じる、『何か』。

気配か。

寿也は恐れも衝撃も来る事 構わず、普通に……引き戸になっている戸を開けていった。

ゆっくりと……しっかりと……。

フワッ。

……さわやかな、心地良い風が流れ込んできた。寿也の体をくすぐる。

ユラユラと、部屋の中の正面で揺れている透けた黄色のカーテンがまず、目に入った。窓が開けっ放しだ……。

「……………」
くわえていた おしゃべりを外してポケットに入れた。中に入ると、部屋の中央に白いベッドが一つ。真っ白い布団の中で、誰かが寝ている？ ……

女性だ。黒髪が長く、枕を隠しているから。

「母さん……」

寿也から自然に声が漏れた。

誰かから母親の名前を覚えてもらったわけでは無く、何か本人と確定できるものがあつたわけでも無い。証拠は無い。あるのは……。寿也の自信だ。

「寿也です」

何の反応も無いベッドの中で眠っている女性……に、寿也は名乗りを上げた。

「……」

本当に眠っているのだろうか。寿也はベッドの横まで近づいた。すると。

突然、パツチリと女性は目を開け、ガバツ！ っと上半身を起こした。

驚く寿也。あまりにびっくりし過ぎて後ろに倒れて尻もちをついた。

ガシャンツ。

すぐ側にあつた小さなワゴンに寿也の肩がぶつかった。「……！？」

パチクリとした寿也の前に、ピースサインをする女性。そしてニカツと、笑つ。

「よつこそ息子。待ってたわよ」

第63話(気配)(後書き)

【あとがき】

何でもかんでもドットコムねん。

第64話（これから）

サツと両足をベッド脇に放り出し、足をブラブラさせた。うつむき加減で上目づかいに寿也を見ている、薄いピンクの上下パジャマを着た女性。黒い髪は長く、造作も無く垂らしている。

「フッフッフッフッフ……フウ」

不敵な笑いをこぼしたかと思ったら、最後はため息をついた。
何なんだ この女。

寿也は尻もちをついたまま、この女性の一挙一動に……呆然とするしか無かった。

待っていた？ 僕を？

わけを聞かせてほしい。寿也は目で訴えた。

女性はニツと、口唇の両端を持ち上げた。楽しんでいるように見えた。

「あたしに会いに来たんだねえ。来るの、わかってはいたけど。あたし、『見える』から」

と、不思議な事を言う。

「何が『見える』？」

「未来」

あつさりと軽快そうに答えた。

未来が見える？

「あなたにもあるんでしょ？ 超能力。……まだ無いか？」

寿也は「いや……少しだけしか、まだ……」と曖昧あいまいに答えた。

ミルキー棒が作れますと胸を張って言えばいいのだが。どうも寿也はこの女性の前では調子が狂う。ちつとも考えが読めなかった。

「あたしは知っているの。これから何が起ころのかも。置いてきた王女たちや預けてもらった寿也の未来も。細かいところまではわかん

ないけど、だから、さ」

「……知っている？　これから自分の身に何が起きるのか……」
寿也がそう言った時、風が強く吹いてきた。
花瓶にささっていた一輪花が、大きく揺れた。……

「あたし　これから死ぬのよ」

微妙に笑っている顔が病的な気がした。

(何で笑う……蝶子さんの言う通り、気がおかしいのか……?)

寿也は懸命に考え出した。

母の言葉から、一つの答えを見つける。

寿也と、王女と、千歳を自分から引き離れた母。まだ幼かった人。引き離されたわけでは無い。また、衝動的でも、無い……?

未来が『見えた』から。

だから……安全な未来へ、母は託した。自分の元より安全な、『未来』へ……。

そういう事なのか？　……母さん……。

「一緒に逃げよう。母さん。未来へ」

寿也は立ち上がった。真っ直ぐに、ベッドに腰掛けている母親を見つめた。

ココに来るまでに、寿也は考えていたのだ。

歴史を変えてしまうと　わかっていても、母親を助けたら　どうなってしまうのか。

未来は。宇宙は。

世界は。寿也は。

寿也はジッと、母親の顔色を窺^{うかが}っていた。やがて、ビシリと言
放たれる。

「皆死ぬよ。そんな事したら」

その目は怖かった。熱を持たない、無感情な声と顔。寿也でさえ、
背筋が凍るほど

「あたしが許さない。歴史を変えるなんて。寿也」

第64話(これから)(後書き)

第65話（許さない）

あたしが許さない

ジットリと、嫌な汗が寿也の背中を伝う。さわやかだった風は、緊迫した空気に変わっていた。

「僕は……」

寿也の握る手が、震えていた。やがてそれは広がって、口元も、足も、目も耳も。全身が、小刻みに震え出していた。

寿也の中のものが、我慢できないと苦しく飛び出そうと騒いでいた。

「母さんが無事なら……！」

パンツ。

寿也の頬が叩かれた。「甘ったれんじゃないよ……」

……

しばらく2人とも動けず、時間が流れた。

寿也をにらみながら、声を張り上げる母。眉をつり上げ、真しんに迫る。

「もう帰んなさい。あんたを皆が待ってる。心配して待ってる。あたしゃ嬉しいよ、自分の息子がこんなに皆に愛されて。この、ぜいたく者」

母強し。寿也は目をこすった。

しっかりと立って、スタスタとドアの方へ歩み出た。そして母親の方に振り返って……。

「くそばばあ！」

……。

ピシャンッ。

ドアを乱暴に開け、出て行った。バタバタバタと……走り去る音が段々と遠く。

いつの間にか窓の外の日はいかにも高く。光は熱線となって、地上を照りつける。

逆光となった母親の顔は真剣に。

「早く帰れ、寿也。もうすぐココが、火の海になる……」

声を押し黙らせ……泣いた。

病院を出てから真木たちが待つタイムマシンへと戻るまでの田んぼ道。カエルの合唱がやかましく、トンボが空を忙しく。青空は白い雲や風を自由に遊ばせて、陽気さを演出していた。

寿也の気持ちは歩きたんびに、だいぶ落ち着いていったが、それでもなかなか思考と感情はおさまりきらず苦しんでいた。

怒りよりも悲しみ。悲しんだ後はまた怒りが、寿也を襲ってくる……。

(せっかく助けに来たのに……「もう帰れ」か……)

怒りと悲しみシーソーが続いていると、やがて歩いている道の先向こうから元気な声が聞こえてきた。

「寿也ー！」

手をブンブン振っている。おしゃぶりはしていない。

真木だ。それから隣に真。2人とも、寿也に笑いかけながら「おかえり」と言っている。

寿也は小走りに駆け出した。

さっき言われた言葉が、背中を押しているかのように。足が、寿也を真木たちの待つ所へ連れて行く。

“あんたを皆が待ってる。心配して待ってる。

こんな皆に愛されて。この、ぜいたく者

”

第66話(パス1048 その1)(前書き)

脱線エピソード行きます。

正式サブタイトルは【パスワード1048 - ト・シ・ヤ・】です。
いつものより長めで、脱エ。ピ中は1話5000文字ほどです。
ひと夏の真木たちを、どうかお楽しみ下さい……。。

第66話（パス1048 その1）

タイムマシンに戻った寿也は、妙に明るかった。

タイムマシンに乗り込んだ後、後に続くあたしたちに振り返っていきなり「ミルキービーム」……とか言っただけで自分のオデコに両手のピースサインを添えつけて、エア―攻撃を繰り出した。

「うぎゃあああ〜」

と、のど元を押さえて苦しみ倒れるリアクションをとったのは真さん。後ろにスローで倒れた。

「あ、ミルキービームは肩こり・腰痛・疲労・シコリ・弁慶・悪心・赤子に効くから」

寿也はそう言ってスタスタと先に座席に座った。

そんな温度差の激しい小漫才にあたしは苦笑いをして席に着いた。

さて、現代に帰ろうか。

3人とも、座席に着いてベルトでしっかりと体を固定する。あたしと寿也が横並びになっている前で、操縦席の真さんが突如「あ」と声を上げた。

「何」

「どしたの、真さん」

あたしたちが揃って聞く。頭しかシートの背もたれのせいどころからは見えない真さんは、ペシペシと自分の頭をフザけて叩いている。

「パス入力、間違えた」……そんな事を。

パス？ パスワード入力？

……って、あの、ココに来る前に言っていた4ケタの…… 『10

48』の事？

あたしはココに来る前の やりとりを思い出す。覚えやすいようにパスワードを考えたはずだ。『1048』……『ト・シ・ヤ』と
「『1048』だったろ……『8』を『6』って入れちゃった」
真さんは両手を天秤のように掲げて肩をすくめた。

「『トシロー』じゃないよ。『ト・シ・ヤ』だってば」
あたしのブーイング。

「『5』だったら『ト・シ・コ』さんだな。へっへっへっ」
話を展開する真さん。下品な笑い付き。

「人の名前で遊ぶなよ。どうでもいいから、早く再入力して」
展開を強制終了させようとする寿也。

……ところが。

「残念。入力失敗には、ペナルティが下されるシステムなんだ」
という事を言い出す真さん。

「は!？」

あたしたちは叫んだ。そんなの初耳だ。

無情にも、タイムマシンは何処かへ向かう。さて何処へ。

ヒント。未来か過去の、どちらか。

「いったん未来か過去へ降りて、24時間を過ごさなければならぬ
罰システム」

さらに真さんは付け加える。

「どの時代に降り立つかは運次第、またはタイムマシンの気まぐれ」
あたしと寿也はもっと音量を上げて叫ばずにはいられない。

「何だそりゃあああ!」

……。

かくして、タイムマシンは何処かの土地へと降り立った。

あたしは着陸後、まだ座ったまま丸い窓から外の様子を窺^{うかが}う。耳を澄ましてみる。ひよっとすると外では突然のタイムマシンの出現に、人だかりができて大騒ぎしているかもしれない……そう思った。しかし。

窓から見えた景色に、少しあたしはホツとした。

「大丈夫みたい。ココ、どうやら海岸みたいだよ」

寿也も真さんも、ベルトを外しながら窓を見る。そして外にさっそく出てみる事にした。

真さんがギューンと、ゴムのように機体の壁を引っ張り穴となった出入り口を開けてくれて、あたしたちは表へと一步を踏み出した。

予想通り、誰も居ない。目の前には海が広がるばかりだ。見渡す限りの海と、降りた所はただの砂浜。波うち際にタイムマシンは位置していた。入り口に手をかけながら真さんは言う。

「一応機体にはシールドを張って隠しておくよ。それじゃあ行ってみようか」

ザザ……ン。波が穏やかな音を立てる。キュアツ……手の届かない青空の中で鳥の声。鳥も何羽かバラバラと、空の中を楽しそうに遊んでいる。

天気も良く、日光はあたしたちの頭上でサンサンと輝き、遠海ではうっすらと横のびに細く連なる陸が見える。ココは何ていう海なんだろうか。

「……暑いつ」

あたしは我慢できなくなって言葉を吐いた。

その次を考える前に、来ていた白のダウンジャケットを急いで脱ぎ、出入り口がまだ開いているタイムマシンの中の床めがけて放り

込んだ。「暑いんだけど」……もう一度繰り返す。

タイムマシンの中では全然感じなかった温度が、外に出た途端
急激にあたしたちを襲ったのだ。

太陽はサンサンといった陽気な性格では無く。ジリジリと熱線で
容赦無く地上のものを焦げつかす……火の玉だ、きつと。

ジットリと、汗が体中から にじんでくる。顔から手から足から
背中からも。

あたしはさらにもう一枚、黒のカーディガンも脱ぐ。脱ぎながら
寿也たちの方も見せせずに、

「暑いでしょ!? 脱いじゃいなよもう。何でそんな涼しい顔して
るわけ2人とも!」

とフーフー息をついてみせた。何を言っても まだ暑い。暑い暑い
暑いったらないわっ。

「季節は夏なのかな。どうやら」

真さんは着ていた茶色のジャンパーを脱ぎ、あたしと同じくタイ
ムマシンの中に放り出した。あたしは履いていたラメの入ったスニ
ーカーと、厚めの あったか靴下も脱いでポイト。

寿也も脱ぐ。リバーシブルの上着と、下に着ていたトレーナーま
で脱いで。ランニングシャツになった。

あたしは長袖の袖をめぐり上げて何とか七分袖に。本当は履いて
いたジーンズパンツも脱ぎたい所だが、替えは無いので断念した。

そんな風に身が軽くなっていった あたしたち。だがタイムマシ
ンの入り口付近は衣類の山だ。

あたしは その山を片付けて。ピットリと嫌な感じで肌につくジ
ーンズや髪の毛を恨めしいと感じながら。

さあこれで再出発だと……でも何処へ。

「地形や海の色、鳥とかを観察してみると、たぶん日本だとは思っ
ただけだな。……ああホラ、見て」

と、真さんは砂の中に埋まりかけていた空き缶を掘り起こした。よ
く日本で宣伝している大手メーカーのものだ。「日本メーカーだか

ら。きつとたぶん」

真さんは空き缶をペコペコとへこませたり戻したりして手で遊んだ。

しばらく海岸沿いに歩いて行くと。ガヤガヤと騒がしい声が近づくことに大きく聞こえてきた。

もう少し行つた所で海の家や、露店が並んでいるのが見える。人もそこを中心に集まっているようだ。

すれ違う人は日本人ばかり。焼きそばやカキ氷といった屋台が並び、前を通りがかると鉄板のジュウジュウという音やソースの香ばしい匂いがやって来る。

子供が何人も飛び走りまわり、イチャイチャした若い男女のカツプルや ほのぼのとしたファミリーの姿が あちこちに。砂浜では他にも、スイカ割りをしたり砂の山に埋もれて昼寝しているオジサンがいて、それぞれ好きに海をエンジョイサマーしていた。

「水着でも買つてこない？ 何処かに売ってないかな」

やけにキョロキョロしているなあと思っていたら真さんてば。そんな事を。

「いいよ。疲れるし」

「日焼けしちゃう。あたしも遠慮しとく」

寿也とあたしは子供にあるまじきテンションの低さで拒否をした。

「何だよ2人。子供のくせに……シクシク」

真さんの泣き真似。……何なに、そんなに遊びたかったの真さん？

「こうしよう。水着が売ってあつたら、遊ぶ！」

目を輝かせている。

そんなに張り切っちゃって。真さん。

探すと、レジャー用品の他に水着を売っている店があつた。真さんは あたしたちの横で飛び跳ねて無邪気に喜ぶ。あたしたちより

よっぽど子供みたいだ この大人は……。
あたしは薄いピンクのフリル付きワンピース、寿也は青無地のハ
ーフパンツの水着をそれぞれ真さんに買ってもらった。
真さんの水着は黒の星座柄。そしてエアースーツを一艘、レンタ
ルで借りてきた。

海を満喫する気マンマンのあたしたちは、店から砂浜へ出る。ヒ
サシを出ると容赦なく太陽は光線を浴びせた。

あたしは日焼けを気にして、真さんに頼んで日焼け止めを。「塗
りましょうかレディ？」と真さんはモミ手と言ったが、「……いえ。
結構」と丁重に断った。

横では寿也が無言でサンオイルを体に塗っている。
真さんはボートで海へ。

あたしと寿也は浅瀬で泳いでいたり。砂浜で砂の城を作ったりし
始めて遊んだ。

だいたい砂の城の形が完成に近づいて来ると、あたしは手を止め
て寿也を見た。

寿也は黙々と、水分を含ませた土を被せてペタペタと城の外形を
形づくっている。

……あたしは ためらいもあつたけれど、勇気を出して聞いてみ
ようとした。

「寿也、あのさ……聞くの、どうしようか迷ってたんだけどね……」
「ん？」

「どうだったの……？ お母さんには、会えた……？」
恐る恐る聞いた。ものすごく慎重に、寿也の機嫌を気遣った。も
し寿也を傷つけてしまったならと。そんな心配をしていた。

しかし寿也は そんなあたしの気持ちも とつくに察しがついて
いるのか、普通に答えてくれた。

「『未来が見えている』んだとさ」

「『未来』……？」

「僕らの事もこれから自分の身に起こる事も全部お見通しみたいだった。余計な事をして歴史を変えるなと怒られた」

「は……？ はあ……そうだったの」

世の中全てお見通しって事？

寿也のお母さんて。何だかちよつとスゴ者。

「『くそばばあ！』って言って帰って来た。そんだけ」

く……。

あたしは目が点になった。まさかひよつとして親子ゲンカ？ ……

…こんな時に。

「ドえらいお母さんだったんだね……あたし、“親子！ 時空を超えた感動の再会！ ～ハンカチのご用意を～」風にお涙頂戴劇を想像してただけ。実際はそんなもんなのね……って、寿也、これからどうするの？」

あたしは休めていた手をまた動かし始めた。だけど城とは関係無く、土団子を作り始める。

「何が」

「すぐには燃料が無いだろうから無理だけど。また……行ってみる

？ 寿也のお母さんに会いに」

「いや。いい。頑固そうだから」

目を伏せた。

そう……寿也がそう言うのなら、と。あたしは それ以上は言わなかった。

「あれ……？ 真さんは？」

ふと、海の方を見ると。

さっきまで沖の方でプカプカと浮いていた、真さんが昼寝してい

るはずのボートの姿が無かった。

周囲や近辺を見渡しても、居ない。

真さんが消えた？

あたしは立ち上がって手についている土を払い、ヒザの土をもパツパと払って。もつと広範囲にまで視野を広げて、真さんを捜してみた。

おかしいな。

海の家に入ったんだろうか？ 見える所には少なくとも、居ない。「トイレかもしれないし。相手は大人だから、心配無いと……一応、思ってる」

言いながら寿也も少し気にし始めた。

「あ、ミルクィ電波はどう？ あたし、やってみようか！」と、あたしは提案する。我ながら、ナイス思いつき。「できるのか？」と寿也は聞いた。

「一度だけ千歳くんを呼ぶのに成功した事が。近くに居れば、たぶん……」

あたしは さっそく目をつぶり、こめかみを手で押さえた。

集中だ。これ大事。

集中……。

(「真、さん。真さん……おい、常野真、さあーん……」)

あたしは名前を呼んだ。しばらくジツと待つ。寿也もあたしを黙って見ている。

(「何処に居るのー。返事をしてええ」)
あたしは何度も呼びかけ、名前を呼ぶ。何度も。

……。

おかしいなあ。返事が無い。電波が発信できていないのかな。
あたしはチラッと寿也を見ると、「大丈夫。僕には聞こえているから」と言ってくれた。

寿也に聞こえているという事は、発信はできているらしい。
それはホツとするけれど……だとしたら、返事が無いのは……。

あたしが徐々に真さんの身を心配してくると、微かに、誰かの声がした。

(「……ら、誰?」)

(「え? 今、何て?」)

よく聞き取れなかったあたしは聞き返した。

(「真さん? 真さんね? 今、何処で何してるの」)
すると次からは、はっきりと聞こえるようになった。

(「俺は常野真だけど。ええと、たぶんだけど、そこからならもつと離れた……灯台がある方面に向かって1・2キロくらい行った先の所あたりに居るよ。今ビーチバレーしてるんだ」)

は? ビーチバレー?

あたしは寿也と顔を見合わせた。

いつの間にそんな離れた所に行ってるんだろう。

瞬間移動でもしたんだろうか。

(「突然居なくなっただからびっくりしたわ。返事があってよかったけど。心配するじゃない」)
とあたしが言ったら。

しばらく真さんは黙ってしまった。アレ? とあたしが(「真さん?」)と不思議がると、真さんも不思議そうな調子で聞いてきた。

（「君、誰？」）

第67話（パス1048 その2）

記憶喪失。

あたしはすぐにピンと そうきてしまった。

「と、寿也どうしよう。真さん、あたしたちの事、覚えてないみたい！ ひよっとして……」

と、あたしは寿也の腕を掴む。オロオロしていると、「落ち着けつて」と寿也はあたしの手をどけた。

「場所は わかった。灯台が見える所だろ。行ってみるか」

寿也はスタスタと歩き出す。

「どうしよう……」

真さんの身に何が。もしや岩で頭でも打って……ああ、嫌なイメーじばかりが浮かんでくる！

真さんの頭が先生みたく石頭だったら平和だったのに！

「何してる、置いてくぞ」

先行く寿也が振り返って呼んだ。あたしは慌てて寿也を追う。「

ま、待ってえ！」

後ろで、完成されなかった砂の城が淋しそうにあたしたちを見送っていた。

うつすらと遠くに かすんで見える灯台に向かって海岸沿いに歩いて行くと。砂浜に人だかりができているのが見えてきた。

中央に しきりのネットが設置され、その両側に それぞれ2人ずつ人が居る。そういえば真さんが言っていた。ビーチバレーしてるって。それがコレ??

ネットを挟んで男女一組の若い人たちが、白いビーチボールを追っかけていた。周囲の人だかりや声援をくぐり抜け、あたしたちは前列の方へ出る。

(ん……?)

あたしは片側でプレイしている、一人の男の人に目がとまった。

(真さん……?)

一瞬、真さんかと思った。けれどよく見ると違う。他人だ。

くるくるパーマがかかった髪をしているけれど、長髪では無い。短い。そして、体つきも心なしか細いような。あたしが知っている真さんは、もっと肉づいていた気がする。

そして何より、星座柄のパンツでは無い。ミリタリー風のショートパンツスタイルだ。

とすると真さんは。

何処に居るんだろう……。

あたしは周囲のギャラリィを端から順に見て捜していく。ところがちつともそれらしい人が見当たらないのだ。

「おかしいなあ。もう一度、通信してみる？」

あたしがハアツ……と息をつく。

「いや。疲れるだろ。僕がする」

寿也が代わりに引き受けてくれた。

そうしたら急にギャラリィがワアツ！　と歓声を上げた。

「あと一点！」

「圧勝だな！」

チラホラと、四方八方から声が聞こえた。

どうやら試合は大詰めらしい。あたしたち2人とも、試合の様子を見る事にした。

さつき真さんかと思われた若い男と、長いストレートヘアを一つに束ねた体の曲線が美しい紺色ビキニの女性がペア。

相手はガツチリした山男体型の男と、首から下のスタイルがボン・キユ・ボンのターコイズ色ビキニを来た女性だった。

相手側の方が、苦渋の表情をしている……という事は、負けてい

るんだね、きつと。今の試合経過。たかだかゲームで、そんな切羽詰まった苦しい顔をしなくても、と思っただが。

粘る事も無く、あっという間に勝負はついてしまったようだ。真さん風の男が、空中にトスされたボールに手で激しく叩きつけてアタックを。それが相手コートの方角に見事、鋭く華麗に決まった。

ワアアッ……そしてパチパチパチ……。

決まった瞬間に、観客からの大きな拍手が。あたしもつられて手を叩く。

あたしの頭上から声が聞こえた。

「どうだ。カツコイイだろ」

あたしは突然の声の出現にびっくりして、前を向いたまま頭だけを動かし後ろを見た。

後ろに居たのは正真正銘、真さん。あたしの視界からでは、真さんのアゴが見える。

何だ。居たんだ。

「カツコ……って。誰が？ 知り合いが居るの？」

と、あたしは真さんに尋ねた。真さんはチラッとあたしを見下ろして、すぐに視線をコートの方へ移す。

「あの、最後に決めたイケメン」

どうやらあたしが真さん風と思っていた男の事を指しているらしい。彼がどうした？

「アレ、昔の俺」

「ちよっ……あつ、と、は、えと、は……何いつ!？」

意味不明な言葉をあたしは発してしまった。解説は寿也でも不能だ。

寿也はあたしとは違い、すんなりと受け入れた。

「へえ。じゃあさっきの真木の電波の相手をしていたのは、あっち

の方が。ヤバかったな、真木」

納得している。

え？ ……つまり。あたしのミルキー電波を受け取った人は、あそこで試合をしていた過去の真さんの方で……。今あたしの後ろに居る方が紛れも無く、本物。

だとしたらヤバかった……。本当だ。もし下手な事を言ってしまったりして過去の真さんと鉢合わせなんて事になっていたら。歴史や未来が狂ってしまいかねない。何処がどう転ぶかわからない、それは何だか怖い気がした。

「記憶喪失にでもなったかと思ってた！ ……何処行ってたんですか、もう」

あたしがプーとふくれ面になると、「ちょっとトイレに」とか言いながらハツハツと笑った。あたしたちを連れ、近くの海の家陰に隠れた。パラパラ……と、観戦を終えた客がまばらに散っていく。

「その後、色々と思い出してきた。ココ……何処かで見た事があるなあと思っていたら。それもそのはず。俺、学生時代の夏だけココでバイトしてた事があった。そんなまさかと思って記憶を辿って。こつち側に来てみたら……何とオ！」

両の手の平を上に掲げ、『アラびっくり！』のポーズをとった。

「居ました居ました、昔の俺。懐かしいなあ。ビーチで女の争奪戦」

あたしは真さんの言葉の終わりにぶっ飛びそうになった。「争奪戦んんっ！？」と。

「わけを話すとね」

真さんは事情を説明する。簡単に言うところだ。

真さんは友達の人とココでバイトをしていたわけだけだ。

休憩中、ビーチで遊んでいたら。

その連れの女の人がナンパされたそうだ。しかも、しつこく。

仕方無いので真さんは助けようと口を出した結果、スポーツで決

着をつけようという事になった。

で、真さんは難なく圧勝したと。

おめでとう真さん。あたしはとりあえず心の中で　そう言っておく。

「ふーむ。カッコいいなあ俺。輝いてるなあ俺。外から見るとあんなにだっただんだ、俺」

と、真さんは　しみじみと『俺』コールを連発した。大丈夫かなあ、『俺』酔い。

「……という事は。今夜、これから素敵な事が起こる」

「!？」

あたしと寿也は眉をひそめた。真さんはそんなあたしたちにフフ、と笑いかけ聞く。

「刺激的ロマンナイトが訪れる。……どうだい？　見るかい？」

ニヤニヤ笑ってあたしたちを観察した。

刺激的ロマンナイト。

ええーっと……。

どうしましょう。

あたしの中で、『好奇心』と書かれた服を着た羽のついた天使と、『遠慮』と書かれた服の天使と。『寿也に任せる』他力本願な天使と……その他の天使たちが、コタツの周りに集まってワアワアと会議をしていた。

皆、天使のくせに自分の意見を通そうと頑固だ。コタツの上のミカンも手に取り減っていく。

「見る」

……そう言い出したのは『寿也』と書かれた服を着た はみ出し天使だった。あたしでなく、寿也本人の……。

天使会議、ココまで。

「と、と、と、寿也!？」

あたしは目を丸くして、無表情で言い放った寿也を見た。……何を考えていたのか、知りたい。

「ま、まあ。じゃああたしも。寿也が言うなら」あたしはそう答える。

本当にそうかな？ とあたしの中の天使の誰かが言っている気がした。

ええい、潰せ、天使! 「うぎゃあ」

真さんはまたまたニヤリと笑って、「じゃあ今夜。日が沈んでからココで」と言って手を振って去った。

去ってしまった……。

あたしたちが残る。呆然と、突っ立ったまま……。

「カキ氷食べよ」

寿也は海の家の中に入っていった。

日が沈むまで、あたしたちは海の家の前ベンチで並んで座ってカキ氷を食べたり、また海で泳いだりして過ごした。

しばらく遊んでいたのが疲れてきた。砂浜にシートを広げてその上で休んでいる。いつの間にか寿也は体育座りのまま、眠ってしまった。俯むすぶいて寝顔は見えないけれど、スースーと寝息を立てている音がする。

そういえばタイムマシンに乗り込む前って、深夜だったっけ。本
当なら寝ている時間に、あたしたちは遊んでいる事になる。そりゃ、
疲れるわよね。

あたしも……眠い。

段々と、目のあたりが重く感じてきた。一回そう感じたせいか、
段々と、また重く……。

ウツラウツラとしてっていると、突然横から何かが倒れてきた。「!
あたしの伸ばしていた足の上に、重みを感じる。驚いて目を開け
ると、あたしの太ももの上に寿也の頭が。どうやら体勢が崩れて、
乗っかってしまったようだ。」

「……………」
あたしは赤面した。

どうしましょう。

寿也は気がついていないのかいないのか、眠りこけてしまっている。
何だかとてもそれが、小憎らしい。

(ま、いつか……)

どうする事もできないので、そのままジツとする、あたし。
考えてみたら、寿也は今日ずっと気を張りつめっ放しだ。あたし
よりさぞ疲れている事だろう。

休ませてあげよう。

あたしの中の、『母性』と書かれた服を着た天使が、ニコニコと
微笑んでいた。

だいぶ人が、帰ってしまったのか少なく閑散としてきた。

海の向こうで日がゆっくりと沈んでいく様子を、あたしはずっと
座ったままで見ていた。

しかしそれも終わり、夕日が完全に沈み終わった後。ちよつと風が冷たいな、と感じた所で寿也が目を覚ましゆっくりと起き上がった。

海の方から視線をあたしに移すと、何処かホツとしたような顔になった。

「ごめん。完全に眠っていたみたいだ。戦車と対決する夢を見ていた」

……ああそう。楽しそうね、ソレ。夢の中だけだといいわね。

「ううん、いいよ。それより、遅いな。真さん」

キョロ、と横を見てみると。ちよつと真さんらしき人がこつちへ向かって歩いてきた所だったのが見えた。手を振りながら。

さて。

行ってみますか、『刺激的ロマンナイト』。

真さんの横に並び、あたしたちは海岸沿いに歩いた。

何処に向かうのか真さん任せだけれど、それよりもあたしは別の事の方が気になった。

真さんが片手に持ってぶらさげている、白い大きめの紙袋。中には黒いビニール袋のような物が見えた。何だろう？

「それ何ですか真さん。何処からそんな物を」

と、あたしが聞いた。

「海の家のおばちゃんたちにもらって来てね。ちよつとこしらえた……まあいいから。それより、目的地に着く前に、打ち合わせをしておくよ真木ちゃん、寿也くん」

打ち合わせ？

あたしも寿也も、よくわからない顔をしていたが。

「悪いけど協力してほしいんだ。いいかい」

と、ウインクする……ううーん、まあいいけど。何するんだろう。

「この先に岩場があつて、そこである男女のカップルがイチヤイチヤしているんだけど」

「真さんですか。若かりし頃の」

すかさず寿也が話に斬りかかった。真さんは直接それに答えずフツ……と意味ありげに笑いサラリと前髪をかき上げた。シヤラララ。何その貴公子の輝き。

つまり的中なんですネ。それならそうと言ってよ、驚きませんか
ら今さら。

「するとそのムードをぶち壊すかのように、クマオ星人が登場だ」

「は!？」あたしが叫ぶ。

クマオ星人!?

「覆面を被^{かぶ}っているが、中身はアクマ星から来たクマオ星人。俺らはそいつをやつつけるんだ!」

真さんは片方の手に力をこめて前方へ振りかざす。アクマ星から来たクマオ星人? 何そのややこしい設定。アクマ星人じゃないわけ? しかもあたしたちが正義のヒーローみたいに。

「へえ……倒していいのそいつ」

「イエツサ。もう、ボコボコにやっちゃって、そいつ。俺の過去には支障は無い」

は、はあ。いいのかなあ。クマオさん。

「でも、過去の真さんと今の真さん。2人が鉢合わせしたら、マズインじゃない?」

とあたしが心配すると、真さんは持っていた紙袋を上を持ち上げ、バンバンと紙の胴体部分を叩いた。「そこでコレの登場!」

だから何なのよ、ソレ。

第68話（パス1048 その3）

ゴツゴツとした岩が自然に並ぶ、岩場に着いた。もう夜なので視界に見えるものは少ない。

辺りの海は静かに波を打っている。明かりはというと、遠方の陸にポツポツとした明かりと、灯台が照らす光。そして上を見上げると無数に見える、星だった。

あたしは岩場の岩に足元を気遣いながら、真さんと寿也の後を追う。2人ともサツサカ行くので、あたしは必死だ。でも慌てて転んでケガをするといけないので、遅くとも慎重にゆっくりと足場を確かめて進んでいる。

やがて2人は一ヶ所に立ち止まってその場にしゃがんだ。岩場の陰に隠れているつもりらしい。やっとこさあたしも追いつき、寿也の隣に並ぶ。

「じゃあ皆。コレを被って待機」

真さんは紙袋の中から、黒のビニール袋のようなものを取り出し、あたしたちに一つずつ配った。

頭からスッポリと入るくらいの大ささのゴミ袋だ。しかも3ヶ所、穴が三角を作る形で開いている。

一体コレは……。

「覆面。顔がバレないように。特に俺」

と言つて、スポツと真さんは自分用のゴミ袋を被って見せた。

まるでマパペ。

顔のうち見えるのは両目と口だけだ。……怪しい。

あたしも寿也も仕方無く受け取った袋を被る。お互い変なのは言いつこ無しだ。

あたしたち3人は息をひそめ、岩陰の向こうに居る人物たちに注目したわけだ……が。

ココで、初めてあたしは相手の様子を窺った。

あたしたちが隠れている場所から7・8メートルは行ったあたりの所で。若い男女が背を向けて並んで立っていた。男は水色の、女の方は白のパーカーを着ている。下は水着だ。2人とも、こちらに背を向けて海の方を見ているので、顔がわからない。

でもたぶん。昼間見た背格好や雰囲気とも一致するので、男の方は過去の真さんだろう。そして同じく、女の人も……真さんとペアを組んでいた人だろうと思った。

2人、何しているんだろうか。ジッと、ずっと、動かないけれど……。
まさかこれから……。

ゴクリ。

あたしの喉が鳴る。『刺激的ロマンナイト』……あたしの顔が熱いのは、袋を被って呼吸がしにくいせいだろうか、果たして。

あたしだけで無く、寿也も真さんも一心に前を見ている。無表情な寿也はともかく、真さんの目つきは真剣だ。何その集中力、真さん？

でもアレだなあ。

少し離れているから、会話がちっとも聞こえてこない……。

その直後。

女の人の方が動きを見せた。

過去の……真さんに寄り添い、そして顔を見上げて真さんを……しばらく見つめ合ったまま……。

(きゃああ～)

あたしは心の中で驚き興奮していた。心臓がドキドキと高鳴る。

握った手に汗が。力が。

もしかや2人は このまま……。

とか何とかこれから妄想モードに突入しかけていた矢先だった。

「ゴガアツ!!」

……!

盛り上がってきたムードをぶち壊すかのように、離れた所から声が上がった。野獣のような野太い声。

「ああ!」

あたしが声を上げる。

何と、寄り添う2人の横からダダダダ……と、二足直立のクマが走ってきたではないか。

「きゃああああ!」

悲鳴を上げたのは、女の人。

「美名!」

名前を呼んだのは過去の真さん。過去の真さんはその、美名と呼んだ女の人の腕をとってこちら側の……あたしたちが隠れていた岩陰の方へ、やって来た!

こっちに来る! まずいつ、見つかる!

「行くぞ寿真木!」真さんが叫ぶ。寿也とあたしの名が一緒にされた。何だか太巻きの親戚の名になった。

声をかけた真さんは勢いよく立ち上がり先駆けて、岩を大股で飛び越えて行った。

まっ、待って真さん!

あたしも、そして寿也も。慌てて立ち上がって飛び越す。真さんのように優雅には無理だが、何とか岩を越えた。

あたしたち3人の出現に、逃げてきたペアは立ち止まって驚く。

「な、何だい!? 君たちは!」

過去の真さんが美名さんとやらの肩に手を添えて、あたしたちに

不審の視線をぶつける。

まあ無理も無い。あたしたちは黒いゴミ袋の覆面を被っていたわけだし。後ろからは二足歩行のクマだ。どうする真さん。

「フッフッフッフッフッフ……大丈夫だボーイ」

不敵に笑う真さん。腰に手をつけて堂々と2人の前に現れた。

真さんを挟んで寿也、あたしと両隣に並ぶ。

「味つけ戦隊！ サシスセソル ジャー！ ！ ！」

はああ！？

真さんは正義のヒーローの如く説明のしにくいポーズをとってみせ、そう宣言した。

味つけ戦隊サシスセソルジャー……。

そんなの打ち合わせてましたっけ？

「ボクたちが来たからにはもう安心だ！ 行くぞ、ミルキーブルー

！ ミルキーピンク！ とうっ」

とう、というかけ声と共に真さんは過去ペアの横を通り抜けて迫り来るクマへと立ち向かって行った。

出遅れたあたしたち……ミルキーブルーの寿也と、ピンクは、あたしか！？

「待て！ ミルキーレッド！」

と、寿也も後に続く。……ノリノリね、寿也まで。

あたしも過去ペアの真さんたちの脇をすり抜けて、クマの方へと走り出した。

後ろでは過去ペアの2人が驚き呆然としているんでしょうけれど……あとあと。

先に あのクマをやっつけなくちゃ！

「グガアッ!？」

あたしたちの突然の出現に、クマも止まって ひるんで身をすくませている。しばらくあたしたちとにらみ合った。

ジリジリと、お互いの出方をうかがっている。しばらくそれが続いていった。

(ん? あれ?)

あたしはハタ、とさっきの真さんとの打ち合わせの時の会話を思い出した。

(真さん……確か『覆面を被っているが、中身はアクマ星からやってきたクマオ星人……』とかかんとか言ってなかったっけ?)

前に居るクマを見る。広がる海を背景に、月明かりの逆光のクマオ。

あれって覆面? ……どう見ても本物そっくりなクマが立って歩いているんじゃないの??

不可解だけれど。

あたしがアレコレと考えていると、真さんが先陣をきってクマオに飛びかかった。

「しよゆキーク!」

真さんのスラリと伸びて肉付いた足が、クマオに突きのように鋭く刺す。「ぎゃああ!」胸ぐらに入った。

人間のような悲鳴をクマオは上げた。え? 人間のような?

「ス パーンチ!」

お次は真さんの右ストレート! ……クマオの顔にキレイに入る。

「どがああ!」

また、人間のような悲鳴が。

「シオ チョップ!」

さっきのスパンチでヨロめいたクマオに、寿也は助走をつけて飛

びかりながら上体をひねらせ右斜め上方から振りかぶった手刀を、一発。

「ひぎゃー」

段々と高音になってきたような、クマオの悲鳴。

連続攻撃を受けたクマオは何とか立つが、足元がおぼつかなくフラフラとあたしの方へと歩み寄って来た。そしてあたしの方へ、のしかかるように倒れてきたのだ！

「きゃー！」

あたしは無我夢中で、両手を突き出してクマオの体をはねのけた。力いっぱい。

ドーン！

「ミ、ミソブロックうー！」

あたし、泣きそうになりながらも戦いに参加する。あたしにはじかれたクマオは再度、ヨタヨタと今度は真さんの方へ！

「トドメだ！ そりゃあ！」

真さんはクマオに正面から突っ込んでいく。何と、クマオの懐ふところに体ごと突っ込んで入りこんだかと思っただら……。

そのまま、クマオの体を持ち上げてしまった。「うらあ！」
知らなかった。真さんて超力持ち。

宙に浮かんだクマオの体。足をバタつかせ「は、離せ！」と叫んでいる。

「必殺！ “サトウ落とし” ！！」

ズドーンッ！！……地面の上に、クマオは放り投げられ叩きつけられた。

そして……ピヨピヨと、クマオの頭上に小さなピヨコが回る。完

全にノビた。

サトウな割には甘く無かった。

「決まったな。クマオ星人をやっつけた」

あたしの隣に来たブルー、もとい寿也はそう言った。

「ねえ……中身って、人間……？」

あたしはソロソロと近寄って、完全にノビて うつ伏せに倒れている暗がりの中のクマオをよく観察してみた。んん？

……クマオの背に細く長く体に沿うようにラインが。触ってみると、それはチャックだった。「……」

あたしはチャックを開けてみようかと思ったが、とどまった。

「このクマ着ぐるみだったんだ。毛まで よく出来てる。暑いのに……」

何で真夏にクマの着ぐるみを。何処で入手したんだろうか。そして放っておいてもそのうち蒸されて気絶したんではないだろうか。そんな風に同情した。

「こいつは人の恋路を邪魔するアクマ星彗・クマオ星人・ナンパ族だ。恐らく昼間のビーチバレーで負けたのを根に持って、復讐しに来たんだろう。これで俺の過去の謎が解けた。ずっと考えていたんだ。俺らを助けに来てくれたあの素敵なヒーロー・レッドは誰なんだろう、って。まさか俺自身だったとは。ありがとう神様。サンキユーマイゴッド。ときめきナイトを謝々ハハン」

完全に酔っている真さん。本当に大丈夫なんだろうか、『俺酔い』。そんなに、少年のように瞳を輝かせて……。

あたしは色んな意味で心配だった。

「それにしても2人ともナイスアドリブだったね。寿也くんのシオチョップ。真木ちゃんのみソブロック。おかげでサトウ落としが雷のように決まったよ。さすが演劇で主役を張っただけはある」

ウンウンと、真さんは あたしたちをほめたたえる。ほめたって何も出ないわよ真さん。

「さて……」

真さんはクマオの片腕を自分の肩にかけ、そのまま気絶しているクマオの体を引つ張り上げた。

「クマオを海に捨ててくるよ。それまで先にタイムマシンに戻って待ってて」

そう言つと、真さんはクマオの足を引きずりこの場から去って行った。

しばらく突つ立って見ていたあたしたちだけれど。やがて後ろから声をかけられた。

「何だかよくわからんかったけど。ありがとう、謎のヒーローたち。ミルキーピンクとブルー」

ビクツ！ と体を引きつらせて振り返る。

忘れていたけれど、過去の真さんと美名と呼ばれた女の人。その2人がジツとあたしたちを見ていた。

あたしは寿也の方を見る。

どうしよう。いいんだろうか、ココは過去なのに人と関わってしまっても。

……クマオをやっつけといて言うのも何だけれど……。

「いえ。この世に悪がある限り、僕たちは駆けつけます。それではまた。行くぞ、ピンク」

と、寿也はあたしの手を引つ張って海際に沿って歩き出した。

「じゃ、じゃあ ごきげんよう遊ばせ。オホホホ」

あたしはそう笑いながら、寿也に手を引かれていった。後ろではまだ過去ペアの2人が、いつまでもあたしたちの方を見ているようだった。

しばらく歩いて行くあたしたち。一応、タイムマシンのある方へとは向かっているはずだ。

ある程度、真さんたちから離れて見えなくなった後。寿也が立ち

止まってあたしの手を離す。あたしも寿也も覆面を取り、「はー」と大きくあたしは息を吐いた。

「面白かったわね、正義のヒーローごっこ。あたしびっくりしたけどワクワクした。寿也はどう?」

ウン、と大きく手を伸ばして。寿也の方を見た。

あたしと寿也の目が合う。ん?

「……」

何故か無言の寿也。どうしたどうした?

あたしが返答無く困っていると、寿也は「いや……」と、視線をあたしより後方へ向けた。

「月とか海とかキレイだなーと思っただけ」

あたし振り返る。

寿也の言った通り、月と海との夜の風景。月は半月で空も海も真っ黒だ。空の光は月と星、海の光は空に照らされ波光り。同じ黒なのに皆が個性を持った黒みたいだ。空の黒、海の黒、陸の黒。素敵ね。

あたしも、風景をしばらく見ていた。時々吹く海風に髪がなびく。

そしてそれが気持ちいい……。

「僕たち、帰るんだな。故郷に」

「え?」

あたしは寿也に笑いかける。何、寿也。よく聞こえなかった。

「故郷……地球、僕たちの住む家。それとも………ミルキー星」

海はただ、静かに波を立てていた。

第69話（再起不能）

プシューウウウウ……。

あたし、寿也、真さん。3人を乗せたタイムマシンは今度こそ正確なパスワード『1048』を入力する事に成功し、現代に戻って来た……はずだ。

いつもそうだけれど、あたしはベルトを外しながら周囲の様子を気にする。タイムマシンが一体どのような地に降り立つのか、わからないからだ。外を唯一、直に見える丸い窓から覗き込む。

後ろから、あたしを見ずに真さんは声をかけた。

「たぶんだけど。このタイムマシンは常に降りても大丈夫な場所・時間・気圧・大気成分・着陸面積なんかを計測したりして、自己判断してくれると思うよ。だから、いきなり降りても平気なはず」

ベルトは外し、何やら前かがみになってカチャカチャと。機材が工具を触っている音をさせながら真さんが言った。ふーん、そう……。

それを聞いて安心したあたしは「そんじゃ、入り口開けて！ 寿也、そのボタン」と、真さんの少し横にある入り口の開閉ボタンを指さした。

寿也がボタンを押してくれたおかげで、ゴムのように伸び縮みした入り口が開く。

「ルルルルルルン」あたしは上機嫌だった。ピョンと跳ねて、外へ出る。

その時。

「……ブアツカもんがあああアツツ！！」

「!!!」

いきなり罵声を浴びた。

あたし、驚く。

両手をバンザイしたまま、後ろめがけて倒れ込んだ。なっ、何っ
!?

突然の大音量、大音響加えてこの世のモノとは思えない形相の顔
を見て、衝撃に耐えかねたあたしは しばらく再起不能になった。

寿也が駆け寄る足音が聞こえる。「真木!？」

あたしの目はキラキラ星マークになっていて、頭上にはヒヨコと
ニワトリがミニサイズで追いかけてっこをしていた。しばらく動けま
せん。

あたしの代わりに寿也が怒声の主を確認する。

あたしに引き続き、ギョツとする寿也。入り口の前には両腕を組
み、激しく世の中全てを恨み憎んでいるような目つきで立ちほだか
っていた男が居た。

真さんがヒヨッコリ座席の陰から頭だけを出して、「おんやあ？」
とノンキそうに答えた。

「アルペン」

第69話（再起不能）（後書き）

【あとがき】

さて、今日からまた頑張ります（どりゃあ〜）。
結構、アルペンの怒鳴り声の書き方に悩み修正しまくりました。
平仮名にしたり「！」をいっぱいつけてみたりと。
どうでしょうね結局。

次回70話へ続く。

第70話（アルペン）

深緑のタートルネックに、茶色のトレンチコートの男。肩幅がガツチリしていて、引き締まっていた。

しかし、坊主。

「あ、悪徳明神!?」寿也が言い放った。

「誰がだ。クソジャリ」寿也の言葉も あながち外れていないような気がした。

「アルペンじゃないか」。はるばるオーストラリアから？ 元気？ 真さんが入り口からそのアルペンという男に話しかけた。あたし、再起不能中で倒れたまま。でも声だけは聞こえていた。

「真。表へ出る」

威厳のある声が地に響く。真さんは言われた通りに外へと出た。

そこに すかさず！

ヒュンッ！！

坊主、もといアルペンさんの鉄拳が空をかい^くいた。外へ出た真さんを襲った痛そうな一撃は、鮮やかな真さんのステップにより上手くかわされてしまったようだ。

しかも真さん、後ろにそのまま体を倒して拳をかわしたかと思ったら。もたれかかった機体の弾力を利用してポヨンッと、跳ねて体を起こさせた。

その反動を利用して。

ボグッ。

……。
……と、真さんの突き出したパンチが、アルペンさんの鼻上にヒッ
ッ下。

アルペンさん、後ろ遠く5メートルくらい吹っ飛ぶ。

……うわあ……。

あたしは倒れていて正解だったと思う。寿也はしっかりと、その光景を目に焼きつけた。

真さんはイエイ！ とばかりにガッツポーズを。

「さすが伝説の男、俺！」

パチッと、ウインクした。

第70話（アルペン）（後書き）

【あとがき】

気絶しているのに真木が説明をしているという、
また型破りな事を……。。

ユレイ真木の探偵ファイルという事で。

第71話（もう一つの名前）

アルペンさんの鼻の上にガーゼが貼り付けられ、鼻からの出血を止めるために鼻栓をされた。

あたしと先生の家に帰って来て のどかさんに手当てを受けた後、アルペンさんは両腕を組み あぐらをかいて どっかりと座ったまま、静かにしていた。

ただ……顔が鬼のように強張っている。シワの数を数えるのに――苦勞しそうだ。

「あの……お茶です どうぞ」

あたしが怖々と湯気立つお茶の入った湯のみをアルペンさんの前に置いた。

「ありがとう」

ビクウツ！

あたしは丸いお盆を持ったまま、背筋をピンと伸ばした。口が力ーパンマンのようにフニャフニャと震えている。顔についているタテ線は いつまで経っても消えない。ずっと青ざめたまんまだった。

「そんなに怖がる事は無いだろうが」

アルペンさんが あたしを見る。あたしはサササササと後ろに下がった。

そのせいで、真さんにぶつかる。

「おっと……アルペン。優しく優しく。真木ちゃんは、王女様なんだからね」

ニッコリ笑う真さん。ああ何だか癒される。

「噂のリリン王女が。もう一つの名前は何という」アルペンさんが尋ねた。

もう一つって？

あたしは何の事やらと、首を傾げた。するとコタツでテレビを観ていた寿也が言った。

「チヨツチヨビーエセツクレアイリー＝ユーク＝トスボン＝リリーガ」

……。

ええと……。

あたしや真さんの体が固まっていると、アルペンさんが繰り返した。

「チヨツチヨビーエセツクレアイリー＝ユーク＝トスボン＝リリーガ、だな。わかった」

わかったんですか!?

あたしはヨロヨロと よろめきながら、台所の方へ戻った。すると、ちょうどトイレから出てきた千歳くと軽くぶつかった。「わっと。大丈夫 真木さん？ 顔色悪いよ」

あたしの額に千歳くんの手が触る。「熱は無いみたいだけど」

「平気……平気よお」

あたしはアルプスの少女みたく、アハハハハ……とお花畑を駆けけるように。でも狭いので気分だけで。千歳くんの前を抜けて行った。

イツちゃったあたしはひとまず。先に説明をしておく。

現代に戻ってきた あたしたちは、出発時と同じ湾の港へ着陸した。ただし、早朝。

卒倒した あたしを真さんが背負い、タイムマシンの機体は湾の底へ沈めて隠して。家へと戻った。

あたしたちを、先生たちが温かく出迎えてくれた。

あたしたちと共に居た、顔面血だらけのアルペンさんを見て先生たちは最初、「な、なまはげっ」と叫び驚いた。きつと鬼の事を言いたかったんだらうと思う。

あたしたちは それぞれ用を済ませて座る。

そういえばアルペンさんは、何をしにココへ来たんだっけ？

会ってから今まで。今も。

アルペンさんの般若みたいな恐ろしい顔は、崩れる事は無かった。

第71話（もう一つの名前）（後書き）

【あとがき】

長い名前の公表。分かる人には分かる話で。
作者、記憶不可能。

第72話（『恒星トリートメント』）

アルペンさんは、どうにも帰りの遅い真さんや のどかさんに業を煮やし、我慢できなくなつて飛行機で飛んで来たという。

おわかりのように、相当ご立腹だった。犠牲者あたし一名。

「今日の夕方に帰るつもりだったんだぜ。いや、ホントに」

真さんはゴロニヤン、とフザけてみせた。

「待つてられんつ。今まで再三連絡を取り合っている間に言つてなかつたかその台詞。^{セリフ}いつになったら実現するんだフザけた野郎めがのどかもだ。お前らが不在のおかげで こちとら忙しくてやつてられん！ しかもタイムマシンまで持ち出すとは……。アレはまだ試作段階だと言つただろつ」

クドクドクドクドとお説教が続いた。

何故か あたしたち全員、キッチンと正座している。寿也も千歳くんも。あたしは背筋までちゃんと。

……ちよつと待てよ？ タイムマシンが試作段階？

どういふ事なんですか、とあたしは真さんを横目で見た。真さんはピュウ と口笛を。

「まあいい。それより。コレも試作段階の代物だが、持ってきたぞ真」

アルペンさんは自分のスーツケースを開いて、皆の前で無地のベージュ色のボトルを取り出し、置いた。

ボトルには、黒のマジックで殴り書きがしてあった。

『恒星トリートメント』

恒……？ 皆の注目が集まる。

「何ができたんだ？ ソレは」真さんが聞くと、アルペンさんは何十枚かが束になったA4サイズくらいの書類を取り出し、パラパラと一枚ずつめくっていった。

「お前がオーストラリアに小包で送りつけてきた例の……」惑星シヤンプー』『衛星リンス』の空ボトルにまだ付着していた成分を調べられたおかげもあって、研究の段階で止まっていたものが一気に完成に近づいた。それは感謝する」

そう言いながらアルペンさんは透明のチャック袋に入って密封されていたボトルを、それぞれケースから取り出す。それらをあたしたちに見せた。

第73話（開発）

『恒星トリートメント』……？

何に効くんだろうか。何をしてくれるんだろう？

「『惑星シャンプー』は不要なものを取り除き、『衛星リンス』はその後をカバーしてくれるようにできている。この『恒星トリートメント』はリンスとは違い、シャンプーの後に傷ついたりした部分に入り込み栄養を与えてくれる」

ええと……つまり、リンスの代わり？

「将来、毛生え薬としても開発を考えているが……」
と、アルペンさんがボソリと言った途端。

その場に居たあたしたちの視線が、アルペンさんの頭に集まった。アルペンさんの頭には髪の毛一本も容赦なく無い。

「何だ皆。何処を見ている？」

あたしたちは「いいえ」と手や頭を振った。気にせず、話を続けるアルペンさん。

「普通に洗髪として使用する分には、問題は無いと思う。リリン王女のような特別な場合の服用は……どうなっても私は、知らない。保障はしない」

「まあ仕方無いさ。ご苦労様、アルペン。ついでのソレ、大変興味深いものを持ってきてくれてありがとう」

真さんが素直にお礼を言う、「いや、何」と言いながら出した物を次々とスーツケースにしまっただけだった。

「さてと。用が済んだので、私は帰る。タイムマシンで」

しまい終えたスーツケースを持って、スックと立ち上がろうとし

たアルペンさんを、真さんが制した。

「アルペン！ せっかく来たんだ、一日ゆっくりして行かないか！」
アルペンさんの片腕を掴んで、ヘラヘラというかニコニコ顔で笑いかける真さん。

んん？

すぐにアルペンさんの怒号が飛んだ。

「ばっか野郎！ 遊んでいるヒマがあるか！ お前とのどかの首根っこ捕まえて、とつと帰るつもりで来たんだ！ 早く帰って仕事し……」

と、そこまで言いかけた所で。

不気味な沈黙が降りた。

あたしたちはゴクリと唾を飲み込む。

「まさか真……タイムマシンの燃料がもう……無い、なんて、はず……ないよなあ？」

アルペンさんは真さんを……薄笑いで見下ろしている。

あたしの目の錯覚だろうか。地と空気が震えているような。

彼を中心に。大気が、時空が、乱流が。

いやーっ！

あたしの心の叫びと共に、今までで一番の大音量の音が鳴り響いた。

「バカ野郎がッッ！！！」

第74話（未来を決めた者）

火山が噴火したような地響きと共にアルペンさんは あたしたちに色んな事を教えてくれた。

ああ…… 仏の逆鱗には触れては ならないもんだと。よくわかった。もう嫌。

アルペンさんは本当に真さんの首根っこを掴み上げ、のどかさんを引き連れてオーストラリアへ帰って行った。

あたしたちに平和が戻って来る。ああよかった……。

数日。すっかり秋という存在は隠れ、冬という新しい者が姿を現して来た。町の出先では、次に来るイベントのおかげで日増しに賑わいを見せ始め、彩りが鮮やかになってくる。あたしは買い物に行くたんびに衝動買いというハタ迷惑な気持ちと戦争だ。

あたしだって年頃。お化粧したりとか小物とか服とか欲しい。でも我慢しないと。先生が部屋の角隅にでも行って「安月給でゴメンねオーラ」を醸し出しながら すねてしまふ。

…… 頑張れ先生。もう言わないから。

あたしは買い物物の途中だった。両手にソコソコ重いスーパーの袋を引つ提げ、店を出る。すると子犬を抱っこしてスーパーの前を通り過ぎようとしていた千歳さんとバツタリ出会った。

「やあ」

柴犬の子犬と一緒に、千歳くんは あたしに微笑みながら声をかけた。

「その子どしたの。可愛い」

あたしも微笑みながら子犬を見る。手が塞がっていたからナデナ

デ出来ないのが残念だ。

「そこで拾った。ウチの施設じゃ捨て犬や猫は引き取り主を探す呼びかけを積極的にやっているんだ。ある程度の期間 呼びかけて、それから……」

視線を前に移した千歳くんは歩き出した。「じゃ、そゆ事で」と去ろうとしたのをあたしは追う。

「あたしもそつちだから、待って待って」

あたしは千歳くんの横に並んで一緒に帰路を歩く事にした。

街路樹が規則的に連なる大通りを歩く。道が舗装されているのでキレイだ。

子犬を抱っこしながらも、あたしの手の片方のスーパーの袋を持ってくれた千歳くん。「いいよ重そうだし家まで距離もそんなに無いでしょ」って。

あたしは感謝しながらも言葉に甘えて持つてもらっていた。

「じーさんばーさんの相手が多いからさ。荷物持ちなんて至極当たり前」なんだそうだ。

そうか、千歳くんは施設で暮らしている。妙に落ち着いているのもそのせいなんだね。

「あのさあ」

「何？」

突然千歳くんから呼びかけられた。

「寿のお母さん……俺の母親でもあるんだけどさ。未来が見えるって言ったんだよね？」

あたしは「うん。そうみたい」と何気なしに返すけれど。

「何で母は俺たちにシャンプーとリンスを持たせて突き離れたと思う？」

そう言われて。「それは……」

解答に悩んでしまった。そう言われても あたしには……。

「未来が見えたからだよね、きつと」

「……………」

あたしは ああそうかと……………頷いた。

千歳くんの察する通り……………未来が見えた時に寿也たちのお母さんは、決めたんだ。火事で死んでしまう自分の元に置くよりも、生き残る事が出来る安全な方へと。

……………それって、すごいね。寿也たちのお母さん……………。

脳裏に「くそばばあ」と叫ぶ寿也の姿が浮かんだけれど。

「でも」「え？」

千歳くんは うつむき加減で、下の舗装されて歩く度に自分の後ろへと流れて行く道を見ていた。何処か寂しさを持つ目をしていた。「未来って、誰が決めたんだろう」

……………。

あたしには、わかりそうじゃない。

「そりゃ……………」

「運命や神様が、なんて言うのはナシだよ。俺は信じてない」

と、先に思った事を言われてしまい。あたしは ううーんと唸る。

「難しい……………」

「母は未来が見える。だから昔の魔女狩りの魔女みたいに、誰にも理解されずに嫌われ滅ぼされたんだろうね。母も賢いから、その事はよくわかってたって事さ」

「……………」

「俺はね、覚えているんだよ」

「え？」

千歳くんが顔を上げて少し視線を空に上げた。まだ夕日には時間が早い。

「母と最後に別れた日の事」

第75話（母、走る）

母は

あじさい学園という養護施設前。まだ幼く、身の周りの事がよくわかっていない千歳の片手を繋いで、母は施設前に立ち止まった。そして、

「ココでお別れよ、千歳」

と、リンスの入った容器を小さな千歳の手に持たせる。

「お母さん……？」

千歳はキョトンとして、母と容器を見比べるように交互に見た。

雪が ちらついている。

上を見上げると。雪結晶が舞いながら千歳の顔に触れた。幾数も。母の顔は真剣だった。

「それは肌身離さずいつも持ち歩いているのよ。誰にも渡しちゃダメ。いい？ 千歳。よく聞いて」

しゃがんで千歳と視線を合わせている母は、片手で千歳の頭を撫でる。時々千歳の顔にピットリくっついた雪を取ってあげる。

「いつか……川の側で倒れている女の子を見つけたら、それを飲ませてあげてね」

千歳は わかっているのかいないのか、ただ母の一言一言に頷くだけだった。

「そして、千歳は その子と」

「？」

雪の結晶の一つが千歳の目に飛び込んだ。冷たいと、千歳は片目をつぶり最後の母の顔を記憶する。

真剣で……もの悲しげな、でも口元は ほころびで……温かそうな目を。

「いつか帰ろうね……ミルキー星に……」

そんな、千歳の母の記憶。
だがコレには続きがあった。

「じゃあね……」

母は去る。今、自分たちが歩いて来た道を戻る。雪がチラつく歩道。

冬ももう終わりだというのに、マフラーや手袋といった防寒着はまだ手放せそうには無かった。

「……ん？」

母、だいぶ歩いた先で振り返る。

後ろに千歳がくつついて来ている。置いてきたつもりが、そうでなかったらしい。

「ちよつと、千歳千歳。戻りなさい」

母、真面目に千歳の体をウターンさせて背中を押した。

「何で？」

千歳は頭だけをクルツと母へ向け そう問う。母は困った顔で「いいから」と背中をグイグイ押し続けた。

また母が先へと歩き出しても。振り返ると千歳は追いかけてきていた。

母、走る。

「お母さん！」

母、無視して ひたすら前を見て走った。

「待ってよお〜！」

何度も何度も角を曲がり、交差点を渡り、人と人の間をすり抜け、

時々振り返ってみると。

まだ千歳は諦めてはいなかった。

「しつこいんじゃないっ」

息をつきながら いきなりそう叫んだので、店の隅に居たホームレス男がギョツとして一歩下がった。

母、また走る。

100メートル16秒くらいで。

年の割には黒光る虫並みに早い。

いつそ飛んでしまいたいと思いつながら。

「お母さん！」

賑やかな雑踏の中で千歳の声は段々と小さくなっていった。

第76話(いらない子)

結局、千歳は母を見失い。そして今に至る。

「母はミルキー星に帰りたかった。でも自分はもう長くない。だから、俺らに託した。ミルキー星へ帰れ、と……」

あたしたちが？

ミルキー星に？

「母さんの故郷だ」

子犬を抱っこしている千歳くんの顔をあたしは横から見つめる。

何処を見ているんだろう、そんな事を思いながら。

「寿じゃなくて、俺を選んだ……何故か、って……考えた」

あたしたちは公園前にさしかかる。草野球ができそうなくらいの面積はある公園を取り囲むように木が植えられているが、葉はついてはいなかった。

木が植えられている横の歩道を歩きながら、千歳くんの話を黙って聞いていた。

「アルペンさんの話を聞いていて ひよっとして俺って……って……」

あたしは、千歳くんの様子に違和感を少し感じる。何処か、追い詰められているような。

千歳くん……？

「きっと俺は……」

次を言い出そうとした時だった。

「ウワアアアアアンツ！ きっとあたしは いらない子なんやあ ああ〜っ！〜！」

公園の中の方から声が聞こえた。「!?!」

あたしと千歳くんは、もちろん公園内へ注目する。

見ると、滑り台の てっぺんに立ち、泣き叫んでいる女の子が居た。脇目も振らず空の方に向かって思いつくままを叫んでいるように見える。

しかしその内容が……。

「ヒロシのドアホオオオ〜!」や「捨てんといてやああ〜!」など。

女の子はどう見てもまだ中学生なんですけれど。

セーラー服姿の女の子。何があったんだろうか……。

あたしと千歳くんは公園に入って近づいて下から聞いてあげた。

「お姉さん、どうしたの」

すると千歳くんの顔を見下ろして、また涙目で叫んだその女の子。

「男に捨てられたんやああ〜!」

……はあ、そうなんですか。

第77話（ヒロシ）

滑り台の上で泣き叫んでいた少女は、なけなしくるみ鳴無来実。ヒロシという男の追っかけをやってたんだそうだが、キツパリと別れ話を持ちかけられたとか何とか。

どうでもいいけれど……子供の遊び場で滑り台を占領されて、近所迷惑だ。何人かの子供が面白そうに、滑り台の周りに集まって来て見ている。

来実さんは やつと、滑り台から降りてきた。

しかし。

「このままで済ませへんで！ ヒロシいい！」

両の手を激しく握り締め目が燃えている。触ると火の粉が飛んで来そうで。

「ちよつとアンタら！」

「!?!」

あたしと千歳くんはギョツとして来実さんから一步退いた。

「ついて来い！ ヒロシを連れ戻すんや！」

カモン、と手で あたしたちを誘う。そして断りを許さない目の力。

威圧された あたしたちは「は、はあ」とアイマイな返事をするしか無かった。

かくして あたしたちは来実さんに従い、後について行った。先行く来実さんの後に続いて町を歩いて行く。景色は段々と住宅地や商店街などを抜けパチンコ店やホテル街の方へと、騒がしくなってきた。……

……何処へ向かっているんだろう……。

あたしは進むにつれ、段々と不安になってきた。隣に並んでいる千歳くんを見るが、普通の顔をしている。それは、頼もしいけれどさ。

ホテル街を通ると、バーやスナック。時々『麻雀』と書かれた看板も見えたりし出した。

子供なので遠慮したい。

「あの〜」

あたしが来実さんの背中に呼びかけようとする。

ちょうどゲーセンの入り口の自動ドアが開き、中から少年が一人で出てきた。

何と少年とは、寿也。

「あ」

「何してんの!？」

ついあたしが叫んでしまった。こんな所で出くわすからだ。「寿!」

千歳くんが歓喜の声を上げた。

「コレやる。何してんの何処行く」

そう言いながら、寿也は片手に持っていたぬいぐるみをあたしに渡した。

今 話題沸騰中の『にんにく坊や』の にん太郎のぬいぐるみだ。ちよつとあたしは喜ぶ。しかし そんな事よりも。

「それがさ……」

あたしが事情を説明しようとする、だいぶ先を歩いていた来実さんが振り返って呼んだ。

「子分ども! 早う来やがれ!」

いつから子分になったんだろうか。あたしたちは苦笑いするしか

無
か
っ
た。

第78話（とっさん）

「ふうん。それでついて行くわけ。ご苦労さん」

途中の自販機で栄養かもしれないドリンクを買った寿也は飲みながら、あたしたちを冷やややかに見た。

「だって何だか断る隙が無いんだもん」

「別に暇だしいいと思ってさあ」

と、あたしたちが次々に言い訳をした所で。寿也が何かに気がついたように千歳くんを見つめた。

3人、来実さんの2・3メートル後ろで横並びになって歩いていったけれど……端の寿也に見つめられ、その隣の千歳くんは綺麗な瞳をさらに輝かせて寿也を見返した。

「見つめられたら溶けちゃう。もっと見つめて」

うげ、とあたしは千歳くんの発言に反応。いい加減、寿也離れでもしてくれないだろうか。

「千歳、顔色悪い。どうした」

寿也が真面目に聞いた。

千歳くんの顔が少し引き締まる。あたしは「え？」と千歳くんの顔色を見るんだけど。

特に分からなかった。

「あ、寿。来実さんが建物に入ってたよ」

いきなり、千歳くんは前行く来実さんを指さした。

来実さんは、古い雑居ビルの中へと抵抗無く入って行く。

「あそこなわけ？」

「たぶん」

表の上の階の壁に、道に突き出すように看板がつけられ、そこに

は こう名前が書いてあった。

本間事務所

「……『ヤ』？」

聞いてきたのは寿也だ。「や、って何？」あたしが聞いても、寿也は素直に答えてくれない。

「組、という名がつくが幼稚園では無い騒がしい所」

寿也の謎かけに答えを見つけ出したのは、あたしたちが来実さんの後を追って事務所のドアを開けた時だ。ドアを来実さんが開けた瞬間、煙草のニオイが襲いかかってくる。

あたしたちは少し身を引く。

しかし、来実さんは平気そうに第一声を叫んだ。

「ヒロシを出しい！ 話があるんや！」

……。

中の様子を説明しよう。

あたしは来実さんの陰からコソツと中を覗き見る。

オフィス机が向かい合わせに並んでいて、本や書類が机の上に積みまわっていたり無作為に置かれていたりといったさまが見られた。

しかし。

中に居る人間は……何処にでも居そうなサラリーマンやOLでは……無い。

怖いとも面白いとも歪んでいるとでも言ってしまうそんな顔をし

た……チンピラーズ数人。そして一人、キャバ・クラ嬢子のような女の人が居た。あくまでも容姿の上での見解だ。

「ヒロシの何なの、アンタたち」

煙草を机の上の灰皿に押し付けながら、キャバ子は言った。

「来実い、もう来るなって言ったやんけえ」

キャバ子の横に居た男が声を上げた。

あたしは来実さんの顔をチラつと見ると、固い真剣な顔で来実さんは叫んだ。

「あたしとは遊びやったんかああ！ その女、誰やねん！」

キャバ子を指さしている。

もう一度しつこいけれど、中学生だよねえ。

「お前には関係ないやろうが。しつこいゆうんなら手段を……ん？」

白いスーツを着て丸い大きめの古いメガネをかけている その男。メガネをクイと持ち上げたついでに、来実さんの後ろに居たあたしたちを見たようだ。

そうしたら。

男は いきなり、身が固まって信じられないといった顔にみるみる変化していった。

「と……とっさん……！」

……とっさんって誰。

第79話（金のシャチホコ）

とっさんとは、誰の事なのか。それはすぐに分かった。

恐らくヒロシと思われる男は、明らかに寿也を見てビビっている。

「と、寿也。し、知り合いの方かしら？」

あたしの声が上がずる。だって怖い。あたしみたいな健全な子供が踏み込んではいけない地域に来てしまっているじゃん！

先生に知れたら気絶されてしまうかも。体中に爆竹を巻いて乗り込んで来る可能性だってある。

何で寿也も千歳くんも見るからに平気そうなんだー！？

「……？ 誰だっけ」

肝心の寿也は首を傾げている。おいおい。

「ななな何しにコチラへ来た、いやあははは、いらっしやっただっ！？」

チンピラ、手をこすり合わせる。何、その腰の低さは。

ヒロシという名のチンピラ、略されてヒロチンは愛想よくニコニコしながら寿也を出迎えた。

「茶あー出さんかいワレエ！」

ヒロチンは恐らく下っ端と思われるチンピラに怒鳴る。チンピラの格差社会がよく分からないけれど。

明らかに寿也を持ち上げているのが見え見えだ。

……寿也、何者。

「いつぞやは ありがとうございやしたっ。金のシャチホコ、助けて頂いて」

そう言ったヒロチンが手を上げて示した所には。

書類棚の上、天井の近くに……見た事のある金色のシャチホコが飾られてあった。

「ああ！ 背犬川の！」

あたしが先に反応した。寿也は後にポンと手を打って「思い出した」と言った。

思い出した。だいぶ前。

寿也がミルク・星人だと判明した時だ。寿也は どころの抗争に巻き込まれたとかかんとかで川のほとりで戦った（と思う）。寿也はその手にシャチホコを持っていなかっただけ。

「とっさんが取り返してくれたおかげで、ウチの組の者も俺の面子も潰されずに済みましたんでっ！ ほんま、おおきに、ささ、ゆっくり中でお茶でも！」

何と部屋の中に招き入れようとしている。

あたしは こんなヤニ臭い部屋は遠慮したいんだけど……。

寿也の方を横目で見ると、「いや、もう帰るし」と寿也が断ってくれていた。

「何やヒロシい、あたしとの話がまだや！」

来実さんは横から話に割って入る。ヒロチンは うるさそうに來実さんを はねのけた。

「やかましいわいつ。もうお前と話す事なんて無いんやっちゅうねん！ わからんガキやな、ほんに」

とても嫌そうに舌打ちした。

「と、寿也。何だか かわいそう。言っただけよ」

と、あたしが寿也の側に来て耳打ちする。「何で僕が」寿也が冷静に答える。

「だって……」

あたしが しょぼくれた顔を見ると、寿也は ため息をついた。

「聞いたらんかい ワ レエ」

寿也の低い声のおかげで部屋の中が冷凍庫並みに冷え固まった。

第80話（危険）

きゃあシビれるう、と興奮している千歳くんは、ともかくとして、あたしたちは帰る事にした。そもそも、あたしたちがココに居る意味は無い。ただの来実さんの付き添いなんだから。

ヒロチンは怒鳴る。

「第一、年の差がありすぎだっちゅうの！ もっとこのオネエサンみたいになつてから来いやあ。しかし捨てられただの遊びだの、人聞き悪いっちゅうねん！ ちょっとナンパして遊びに車で連れ回しただけじゃいっ」

いやそれは立派な未成年者 誘拐未遂事件では。真実も人聞き悪いんですけど。

あたしは仏のような悟りの顔をして「……行く、2人とも」と寿也と千歳くんの背中を押して促した。

「ま、話し合えば解決するという事で。めでたしめでたし」
寿也が言った後 雑居ビルを出たすぐ。

ガシャーン！

ガラスが割れた音。そして。

「きゃあ〜」

と、音が事務所からしている。

ただし、悲鳴はヒロチンの声だった。

無事を祈ろう。あたしたちは過去を振り返らない。

……と カッコつけてみた時に、来た道を辿って帰路を進んで行く。千歳くんが寿也に尋ねた。

「寿は、オーストラリアに行くの？ 真木さんと一緒に」

あたし、ドキっとして緊張する。今まで あまり触れなかった事だったからだ。

「行かない」

キツパリと寿也は言った。続けて、

「僕は子供だし、父さんと母さんが居るから、置いては行かれない」と……。

……あたしは立ち止まった。「……」

合わせて、2人とも立ち止まる。あたしの顔より、千歳くんは寿也の顔を見た。

少し笑って。……笑って？

「寿は幸せなんだね」

今度は、ニッコリと笑いかけた。

あたしは それに違和感というか……異質か不気味とも言える嫌な感じがした。

「千歳……？」

寿也が呟き眉をひそめた時だった。

あたしたちの横のガードレール越しの狭い道路を、一台のパトカーが通りかかった。何処かの事故現場に向かおうとしているのか騒がしく抜けていった。

危険な色が目に付く。これはいつか感じた気配と似ている。

そう……寿也とタイムスリップして蝶子さんの車に乗っていた時と同じ感覚だ。

危険。

あたしの中に広がる。

千歳くんは笑いながら発した。

「俺は母さんにとって いない 子だった。シャンプーを飲んで不用になった、寿の一部だ」

あははは……

楽しげに。……楽しげに。

「千歳！」

「千歳くん!？」

あたしたちが声を揃えて叫ぶ。だって。

千歳くんはピタリと笑うのを止め、崩れ倒れてしまったからだ。

第81話（ミルクィでお困りの方へ）

「千歳くん！」

あたしは何度も名前を呼んだ。呼び続けた。

千歳くんが ずっと抱きかかえていた子犬は、倒れた拍子に下に一緒に降りた後、びっくりしたのか何処かへ逃げるように走って行ってしまった。

あたしたちはゴメンだけれど、子犬に構っている場合じゃ無かった。

寿也が倒れた千歳くんの体を揺する。

「おい！ しつかりしろ！ 千歳！」

寿也も声を張り上げ呼んでいた。あたしたち2人して、全く冷静で無い。

「……………」

あまり反応が無かった。意識が朦朧もろろとしているのか。薄く目は開いているけれど……………。

体は冷たかった。気のせいか、肌が白く見える。

「どういう事なの」「わからない……………とにかく、ココに居ても」

寿也は立ち上がってキョロ、と辺りを見回した。「救急車は……………」

言いかけて、首を振る寿也。

「ダメだ、普通の病院だとまずい。ミルクィ星人だとバレたら」

「先生！ 先生なら……………！」

すぐにパツと浮かんだ先生の顔。あたしがそう言うと、寿也は頷いた。「頼む」

あたしは先生を携帯電話で呼び出した。

すぐに事態を飲んで先生は駆けつけてくれた。あたしが泣きながら先生に頼んだからだ。

軽自動車に乗って先生が現れる。

車から降りた先生は、千歳くんに近寄り、「とにかく乗せて。すぐに病院に行こう」と千歳くんを大事に運び出した。

「でも普通の病院じゃ」

と、あたし。車へと千歳くんを乗せようと抱えながら先生は、片手をシュビツとあげた。

「大丈夫。ツテがあるから。ミルクィでお困りの方へ」

どういふ事なんだろうか。

車を走らせ何処かへと進みながら、先生は説明する。

「真木も病気になった時には何度か相談と診断に行った事もあるんだよ。実は。覚えてないだろうけど」

運転しながら そんな事を言う。あたしは初耳だ。

後ろの座席で千歳くんは寿也に抱きかかえられ、その横で あたしは千歳くんの様子にハラハラしていた。

汗ばんでは いる。でも熱は無い。むしろ、熱が無い、……体が冷たいのだ。

症状の理由が わからない。

「大学仲間になさ、真の他にも我こそはミルクィなり也な奴が居るんだ。

そいつはそいつで独自に研究施設の物をこっそり使って、そこでミルクィの研究したりして。真も最初は奴らと一緒に居たんだが、海外にピュンスカ飛んで行っちゃった」

……はあ。そういえば以前ツテが どののと言っていた気がするけれど。それがコレなの？ 先生。

何にせよ、千歳くんを放っておけない！

あたしは先生から出ている“頼りになるオーラ”を、信じてみる
事にした。

第82話（体）

車は止まらず走り続ける。突然、寿也が言い出した。

「おかしい。千歳の体が」

「!？」

「何が……どうした？」

あたしと先生が寿也に視線を向ける。先生は運転しているのでバツクミラー越しだ。

「体が縮んでいる」

……。

……へ？ ……

あたし、凝視する。

確かに心なしが微妙なだけけれど。言われてみれば……千歳くんの体が。顔が。

幼くなったような……。

「どういう事だ」

「千歳くん……光ってない？」

あたしが言うと、寿也は。「……」無言で状態を見守り続けた。

ドクン。

場に居た者の心臓の音が重なった。

千歳くんの体に変化がみられる。

退化。

まだ小学生の千歳くんの体が、少しずつだけれど確実に幼さを増している。

确实だ。

間違い無く、千歳くんの体内で過去へと時間が遡さかのぼっている……！
そんな本人を間のあたりにして、寿也は強く千歳くんの体を抱きかかえた。温めようとしているかのよう。

「何で こんなに冷たいんだ千歳。息は ある。でも死人みたいだ。おかしい……！」

寿也が言った後、何と次は寿也の体の方が淡く光り出した。弱い、微弱なんだけれど強さを感じさせる……緑青い、光の『膜』で寿也と千歳くんを一緒に包む。

あたしの横で、そんな神秘が発生していた。あたし身を引く。「
おおお……」

思わず声を上げてしまった。でもフザけているわけじゃあ無いわ。

「どうなってるの寿也……とと」

言った口をあたしは自分で塞いだ。

寿也が集中している。

目は真剣に千歳くんを。2人は小さく輝きながら、張りつめた空気を作る。

「僕が どうか持ちこたえてみせる。だから早く。あと何分ですか先生」

先生は一瞬だけ間を置いて答えた。たぶん自分の後ろで何が起きているのかが わからず、色々と推測を巡らせていたんだろうな。

「あ、ああ。あと20分くらいだよ。クソ、混んで無ければいいけど、時間帯が」

今は夕方だ。混雑は避けられないかも。その事実が あたしたちを混乱させる。

「何とか頑張ってみる。だから……」

寿也は黙る。……あたしも、千歳くんの体を抱きかかえにいった。2人で、そして3人で一体となって光が包んでいる。あたしたちを。

(千歳くん……！)

意識は あるのか無いのか。

最悪の事態には ならないで……。

そんな あたしたちの祈りの中で千歳くんは……か細い音でポツリと言った。

「……俺、トリートメントを盗んで……飲んだ」

第83話（実験体）

俺、トリートメントを盗んで飲んだ

耳を疑う。

あたしたちは車内で叫んだ。

「な……」

「確かなのか！？ おい！ 冗談だと言え！」

「どういう事なんだ千歳くん！」

反応の仕方は色々だ。でも、皆で千歳くんを責め立てる事しか出来なかった。

トリート…… 『恒星トリートメント』！

アルペンさんが持ってきたやつだ。でもそれはアルペンさんが持ち帰ったはずでは。

ああ一体どういう事なの千歳くん。理由を教えて……。

でも千歳くんは黙ったままで動かない。そんな。

「千歳……」

抱きかかえたままの寿也は渋い顔を浮かべる。少し手に力が入っているのか、震えて。

（寿也……）

あたしの涙腺が緩む。泣いてる場合じゃないのに。

「千歳……！」

それはきつと寿也も同じ？

あたしは そう思った。

そうしたらだ。

(「寿……」)

ハッと、あたしと寿也は顔を上げる。あたしたち、目が合った。今の声は。

(「千歳くん！」)

(「おい、千歳か！」)

声に出してはいない声。そう。

ミルク―電波だ。

(「大丈夫なのか千歳？ 余計に負担がかかるんじゃない？」)

寿也の呼びかけに割と明るく答える千歳くん。

(「平気。いつも寿に話しかけて鍛えたから。たまには返事してよツレナイお方」)

よよ、と泣き真似まで伝わってきた元気な千歳くん。おーい？

(「それより質問に答える。謎を残すんじゃない。トリートメントが何だつて？ お前の変化を食い止めながらの電波での会話はキツイ。早く答える」)

寿也の言う通りだ。このままでの会話はキツイ。一つに集中できないからだ。

(「俺は……アルペンとかいう人が持ってたトリートメントを水とすり替えた。そして……飲んでみたけど効かなかった。だから……でも……効いてきたんだな。遅っ」)

遅っ、て。

効く効かないの問題なのかしら。

(「何てバカな事を……」)

寿也が呆れ果てている。無理も無いと思う。

（「だって俺は寿の不用な部分。どうせ いらぬならさ」）
何を言っているの千歳くん。前にも同じ事を言っていた。

（「トリートメントを服用してみてさ。実験体にもなってみたら
思ってる」）

どうして そう結びつくわけ。

あたしは まだ 信じられない。

「何を言ってるんだ！」

寿也が声に出して叱った。「え？ 何事？」

「運転していた先生がビクッ！ と肩を盛り上げる。ミルクキーでしか受信できないため、先生にとってはそうだ。あたしたちの会話は聞こえては いない。」

千歳くんは最後にこう言っ て声も電波も発するのを止めた。

（「……シャンプーで人が死ぬなんて事がわからなかったのだから、人が死んだ事が無かったからなんだろう？」）

第84話（身の破滅）

道路は混雑していた。ちょうど夕方だったからだ。あたしたちはジリジリと最初は辛抱していたが、やがてそれも限界に達した。

先生がシビレを切らして、携帯で電話をかけた。

「カクカク マルマル シカジカなんだ。すぐに救急車で来てくれないか」

恐らく向かう病院先に、なんだろうな。先生は場所と症状などを伝えると、真剣に相槌を打って電話を切った。

おかげで、何とか千歳くんは救急車で病院に到着する。

大学の総合病院だった。意外に、とても大きかった。宮殿並みに敷地があるんでないだろうか。名も知れた有名病院で、ココでの賢者は世界的にも名の通っている者ばかりだという。

救急車は裏手の専用門をぐり抜け、迅速かつ的確な指示の人のもと神経質に行動的だった。

「Aのマル、1456号室9番に運べ」

「はい」

「村上と古城も呼ぶんだ。俺の名を言え」

「わかりました」

誰なのかはわからないけれど、一番 指示を出して人を動かしている人物を見た。肩幅の広い、着ている白衣が すごく似合う男の人だった。

千歳くんが台車に移されて運ばれて行く時、「早く来い。消毒する」とあたしたちに向かって呼びかけた。

消毒？

「ミルキーなんだろう、俺もだ。志摩浪しまなみという。よろしく。輸血頼む

かもしれないから一緒に病室行きしろ。おい早香、こいつらを連れ
て行け。キレイにして来い」

少し離れた所で早香と言われた女の看護師さんは、あたしたちを
見て「はい」とすぐに こっちに来た。

「行きましょ、さ、早く！」

よく事情も飲み込んでいるのか、この人に限らず皆 素早かった。
あたしと寿也は安心できる。顔を見合わせる事無くあたしたちは
言われた通りに ついて行った。

千歳くんの退化が進んでいく……！

気がついたら時刻は夜7時をまわっていた。今日はリメイクアニ
メ『虎えもん』がある日だ。毎週観ているけど、今日は諦めね。

そんな事まで考えながら あたしは、隣で腕を組んで同じく腰か
けている寿也を見た。千歳くんはずっと、あたしたちのもっと前方
のベッドに寝かされている。幾十にも機械に繋がられたコード……
生命を維持させるための大切な線だ。おかげで、退化は進行を妨げ
られている。

特に、周囲の動きは見られない。と、言うのも今は。レントゲン
やら検査をしているらしかったからだ。

あたしたちは消毒され身を徹底的にキレイにされた後。服も消毒
済みに替えられて白いキャップを被り。マスクと薄い手袋と、そ
れから長ブーツを履いていた。

消毒臭が鼻につく。あまり好きじゃない。

あたしと寿也は固まって部屋の隅の背もたれの無いパイプ椅子に
座っていた。

ずっと、時間だけが流れている……緩やかな沈黙が苦しい。

「時々……」

「？」

寿也が囁くように声を漏らした。危うく聞き逃しそうになる。

「自分が考え過ぎて、追い込む事がある」

「……」

「豊かな想像力だけど、身の破滅だ」

寿也の言葉は あたしには少し難しい気がした。
でも。

「千歳も……頭がいい……」

寿也……？

「バカに頭のいい奴の気持ちなんて、わかるもんか。逆は わかるけど」

……。

「本当に辛いのは、りこうな奴の方だ。全てがわかるからだ。バカの気持ちも……」

……寿也……。

あたしの見つめる先に、固く握り締められた両手があった。
残念ながら、視界がぼやけてしまっただ見えにくいけれど。

第85話（あたしってバカ？）

「あたし、前にシャンプー飲んで死のうと思ったよ」
か細い声だった。静かな病室に少し響く程度の。

「あたしってバカ？ 寿也……」

……

…… 寿也は動かなかった。

あたしの方を、見もせずに。

「バカだな。どっちかで言うとな」

と言った。あたしは微妙な顔をするが、寿也は続けた。

「勘違いしないでもらいたいのは、死にたがるのは りこうでは無い。生きる術やスキルが無く想像力だけが先走った結果だ。真木、それと」

ココで寿也は あたしに視線を向ける。

「りこうな奴は過去はバカだった。だからバカの気持ちかわかる。バカはりこうになる途中にしか過ぎない。それを自分から人生を止めるんだ。バカとしか言いようが無い」

「……」

「わかるか？ 真木……お前は これから りこうになる。……なれよ、絶対に」

あたしは泣いていた。自覚も無く。

ぼやけた視界の中で、寿也の顔がとても優しく見えていた。

寿也の言葉が、あたしの胸の内に今まであつた氷の塊を、溶かしてくれたのかな。

何で涙が流れるんだろう。

それは……あたしがきつとずっと、求めてきた言葉だったからだ。

あたしは死なない。

寿也も、先生たちも、千歳くんも。皆。

地球上の、皆。みんな、すべて……。

生きて。

あたしがもらった言葉は、あたしの願いへと変わる。

あたしの口が開きかけた、その時だった。

突如、両開きのドアが開く。入って来たのは志摩浪さんだった。

「トリートメントを飲んだと言ったな。それが もたらした衝撃の事実が明らかになった」

いきなり飛び込んできたと思ったなら、そんな事を言い出した。あたしも寿也も立ち上がる。衝撃の事実？ それは一体……。

あたしたちの前まで来て、持っていた紙数枚をクリップで留めたものをパシパシと指で こづいた。その衝撃の事実とやらが そこに詰まっているというのだろうか。

やがて説明する。

「肺にあったガン細胞が急激に進化している。トリートメントは栄養をおくる液体だとアルペンにさっき聞いた。悪性にも栄養をおくってしまったという事だ」

……！

「そついで……」

何て……。

「嘘でしょ……！」

衝撃だった。

思い切り誰かに殴られたようだった。

第86話（分裂された細胞）

あたしは動揺を隠せなかった。

あたしのヒザは崩れる。ヘタリと冷たい非情な床に座り込んだ。

「そんな……」

寿也も目を見開いている。寿也だって静かに動揺しているんだ。

時間を止められてしまったかのように……流れる空間と時間。変な言い方。

「前に のどかさんが言ってた……アレの事……？」

肺にガン細胞があると言った。のどかさん、後で治療しに言っていたけれど。結局、帰りのドタバタで忘れてしまっていたんだ。そんな。

のどかさんのせいじゃない。あたしたちだって忘れていたんだ。そして……。

「皮肉なものだな。悪性は成長し転移してまた成長して、その分に押されて普通の細胞は縮小を見せている。調べていくうちに奇妙な体の構造だと思ったが、君たちの話の事情から察するに……元々、この子の体は産まれる前に服用されたシャンプーによって、分裂された細胞の寄せ集めのようなものだったという事か」

！！

「やめる！」

「やめて下さい！」

あたしたちが大声で張り叫んだ。志摩浪さんの残酷な……いや、残酷なのは憶測とはいえ恐らく正解に近い事実のせいだった。

大声を聞きつけてか、またドアがバーン！ と開かれた。

「真木！ 寿也くん！」

駆けつけたのは先生だ。「先生！」

先生は入って来たと同時に場の空気に戸惑った。

「今、渋滞を抜けて やつと到着したんだが……どうした？ 真木に寿也くん。真木は泣いてるし、寿也くんはオニみたいな顔になって」

事情を知らない先生のノンキな顔。あたしたちは おかげで冷静さを取り戻せた。

「……ともかくだ。このままでは、この子は死ぬ」

志摩浪さんは……紙の束を近くの台の上に放り投げた。バシンと……紙は台に しばかれて おとなしくなる。

「解決策が無い」

また、残酷な事実を。

もう たくさんだ。

「やめて……もう……」

あたしは泣いてばかりで。

「千歳くんを いじめないで……」

助からない。

「助けて……」

助けて……助けてたすけてたすけて……

神様……。

……

「諦めるな」

……？

あたしはヒドイ顔を上げた。ベチャベチャになったあたしの泣き顔の前に、寿也が怖い顔で立って千歳くんを見ていた。

寿也は言っと、ツカツカツカと千歳くんのベッドに近づく。

そして、寝ている千歳くんの胸の上に両手を重ねて置いた。「僕は諦めない」

寿也は深呼吸をして、気合いを入れる。睨むように自分の重ねた手を見つめた。

「かえって来い！ 千歳！」
寿也が叫んだ。

皆が寿也たちを見守る。

息が出来ない。

心臓が張り裂けそうで。

……

緑、光り出す。

寿也の手先を中心に、徐々に円を描くように広がっていく。
あたしが車の中で見て驚いた光景のまんまだった。
寿也の集中力が、エネルギーが、……願いが、祈りが。

あたしも。

一つになって、千歳くんに注がれる。

第87話（奇跡とは）

祈る事はバカみたいな事なんだろうか。あたしは聞きたい。
今の　あたしに出来る事って何だろうか。誰か教えられるもんなら教えて、あたしに。

所詮、いざって時には祈るしか出来ない。でも　それだけが　せめて、だ。

あたしは祈ろう。全身全霊を込めて。

『条件が合えば、同じ奇跡も起こる』
真さんの言葉。ならば条件を合わせよう。それが行動だ。

奇跡とは、結果だ。

「千歳くん……！」

あたしも、寿也の両手の上に重ねて両手を置いた。

その上に、先生の手も。

そして、志摩浪さんも、その場に居た他の人たちも。

千歳くんの周りは生還を祈り願う人でいっぱいだ。何て幸せなの、千歳くん。あなたの事を大事に思ってくれる人が。他人でも。こんなに居るのよ。

だから　かえって来て。奇跡を見せて。

緑色の淡い光で包まれる、あたしたち。

熱を肌で感じないけれど、温かいと思った。こんなに温かいと思
った事は無い。きつと無い。

なのに……。

「くっ……」

寿也が、少し苦しそうな声を出した。「寿也っ……」

寿也の体力も限界を超えていた。

無理も無い。千歳くんを救うために、車に居た時からずっとどれ
だけの長い時間、気を集中させ それを持続させるために また集
中させ……。

寿也も限界だ。限界を超えているんだ。

でも、止めるわけにはいかない。止めてしまったら千歳くんは、
もう……。

あたしが。

あたしが出来る事は本当に何も無いの？

あたしはミルキー星人で、女の子で……。

あ。

そうだ。

一つ、思い出した。

「あたし、王女だ」

たった それだけの事だけれど。

「あたしは王女……」

あたしは意識を集中する。神経を研ぎ覚ます。
静かに行動に出る。

あたしに出来る事。

……ミルキー電波、王女バージョンだ！！

『地球上のミルキーに告ぐ！』

……。

……あたしはノリとテンションに身を任せた。

第88話（王女より）

『あたしはミルクィ星から生き延びた、ミルクィ星の王女！』

王女、リリンと申す！』

かなりキャラクターを作りあげている気がする。でも構うもんか。こっちは人の命がかかっているんだ。恥ずかしがっている場合じゃない！

やれ！ やるんだ！ あたしにしか出来ない事なんだから！ やっちまえーっ！っ！

……。

……続ける。

『どうか聞いてほしい、地球上のミルクィの者たちよ！』

今、あたしの側に消えていきそうな命がある。頑張って持ちこたえている。

あたしは それを 助けたい。救いたい。

しかし ココに居る者だけの力だけでは 足りないのだ。

そこで！

あたしは、皆に協力を呼びかけたい。

どうか

今 この 消えそうな命のために

一つになって 祈りを捧げて 気合を込めて

エネルギーへと 変えて

あたしたちに

どうか あたしたちに ……

力を 分けて くださいっ！！！！ ……

あたしは目を閉じて意識を集中している。両手は、寿也の両手の上に。重ねて先生や他の皆の手が、そこにある。

何度目かも忘れたミルキー電波を発信しながら。

寿也の集中力は、あたし以上だ。あたしの通信は もちろん聞こえてはいると思うけれど反応は無い。見るからに余裕の無さは つかえた。

寿也、頑張つて。

あたしも頑張る。

何度でも呼びかけるんだ。

『お願いします。あたしは ……

何の力も技も無い、ミルキー星の王女。王女とは名ばかりの、普通のミルキー星人です。

どうか お願いします。この声の届いたミルキーの皆。

力を貸して。

祈りを下さい。

それがエネルギーとなります。なるのかどうか本当は謎だけど…。

あたしは 信じます！
』

届け、気持ち。

全世界のミルキー星人へ。

あたしは王女じゃなくてもいい。そんな事はどっだっていいの。
あたしは。

諦めたくないだけなの！

……

……

『……真木ちゃん？……』

『……リリン王女！……』

『……チョッチョビーエセツクレアイリーユークットスボンリーガ、か』

『すごいね。本当にコレが王女の声なのかい？』

『可愛い声ね。フフ』

しばらくして聞こえた声たち。あたしは中に聞き覚えのある声を聞いた。

真さん、のどかさん、アルペンさんだ！ それ以外は……ハテ？

『真さんたち！ あたしの声が聞こえたのっ！！？』

あたしは飛び上がりそうなほどの歓声を上げた。嬉しくて嬉しくてたまらない。

あたしの声が届いたんだ！

真さんたちはオーストラリアに居るんだろうか？

『聞こえたよ！ すごいな、発信、上手くなったね。国境を越えるなんて。そちらはどう？ 志摩浪から事情は聞いている。千歳くんはどんな様子だ』

と、真さんの頼もしい声が聞こえた。

『……』

あたしが無言で千歳くんの体を見る。顔を見る。

どんどん退化していった。赤ちゃんに近づいていつているのが確実だった。

また、鼻の奥がツンとして目から涙が出てきそうに。

『……千歳くんが消えちゃう……』

どうなってしまうのが全然わからない。わかりたくも無かった。

第89話（頑張り）

あたしの声は真さんたちに届いた。それは嬉しかった。でも。

千歳くんの変化は止まっていない。こんなに寿也が頑張っているのに。

少しずつだけれど。少しずつ……緑色の淡い色の中で、千歳くんは。

『……ダメだよ……』

やはり願うだけじゃ意味が無いというの？

『……千歳くんは何も悪くないのに……！』

悪いのは誰？ 何？

『……お願い たすけて……』

かみさま。

あたしの声を聞いて ……

……

……

『……リリン王女……』

？

知らない声でした。

さっきの人たちとも違う、若そうな女の人の声。

『本当に、私たちの星の王女なの……？』

疑うような、恐る恐るな声調だった。あたしはハツとして慌てて答えた。

『だ、誰っ！？ う、ううんそれはいいの。えとその、はいっ。あたし真正正銘、本物王女ですっ。長い名前があるみたいでっ、ええと』

何だっけ？

『チョツチヨビ……エキセントリックーぼん？ アレ？』

あたしの記憶力には限界がある。

『チョツチヨビーエセツクレアイリー＝ユーク＝トスボン＝リリーガ……だ』

横から助言が。

余念が無いはずの、寿也だった。

ありがと寿也。こんな時にまで。

『本物……なのね。たぶん。本当に…… Milky の誰かが、消えそうなのね？』

！

あたしはウンウン！ と強く何度も頷いた。姿は相手に見えてい
るわけでは無いんだけど。

『本当です！ 信じて！』

信じてもらうしか無かった。証明できる手立てが無いのが悔しい。
『そう……なら、協力するわ。とはいっても、念じればいいのかし
らっ？』

『……！ はいっ！！』

あたしに光が差したような気がした。

すると どうだろう。

次から次へと、違う方向から声が聞こえ出してきたのだ。

『うーん。まあ、念じるだけなら』

『痛くないよな、別に』

『大丈夫？ 一体何があったのか知らないけど、頑張って！』

『頑張れよミルクィの誰か』

『しっかり！ 応援してるですたい！』

『チトセっていうの？ チトセくん、頑張れ！』

『 Chitose must hold out!』

『王女もしっかり！ 弱気になっちゃいかんぜよ』

『ってゆーかあゝ、マジ頑張れゝ』

『那个孩子是美的男孩子？』

『聞こえた聞こえた。とにかく頑張んな』

『アポピレピレパレ』

『頑張れ！』

『頑張れ！』

『頑張れ！』

『頑張れ！』

『頑張れ！』

『頑張れ！』

『!』
『当店で各種、全品2%還元で ご奉仕させて頂いております』

『頑張れ！』

『頑張れ！』

『頑張れ！』

『頑張れ!』

負けるな!

……

負けない。

祈りを、ひとつに……。

第90話）「夢は終わりだ」

心をひとつに。

あたしたちの願いを、どうか叶えて……！

ペアアツ……！

（……？）

目を閉じていた あたしは、まぶたを開いた。強い光を感じたからだ。

ゆっくりと、開ける。

「……！」

眩しいかと思っていたら、眩しくない。

なんて……なんて淡い光なの。

（色が……！）

神秘を見た。

淡いが、強いと感じさせる白っぽい、陽の光を全身に浴びたようなみずみずしい葉緑の色。微かに黄色が混じり、そしてそれは段々と、赤にはならず白っぽくなっていった。

まるで生命という名の、泉の底から湧き出た水の泡いっぱいの中に居るようだった。シャボン玉イリュージョンとも言える。ココは何処だつくと、自分の居場所を見失ってしまいそうになる……！

(千歳……くん……寿也……)

光の泡に隠れて2人ともが見えない。何処？ 近くに居るはずでしょ何処に居るのと。

何の音も聞こえない。声も。耳が、使えなくなっているのかしら……？

(「真木……！」)

電波にのって、寿也の声の気配がした。

(「寿也……！」)

ココは何処。

白い空間。

何も無い。

振り向けば。

「……寿也！」

遠く彼方に、2人の人物が立って あたしを見ている。

寿也と、隣に居るのは……千歳くん。「千歳くん！」

あたしが そちらに手を伸ばす。こんなに離れてちゃ、届くわけが無いと知っただけ。

2人とも笑っていた。

千歳くんはニッコリと。寿也は口元だけが。

双子。

あなたたちは、双子だった。

「消えないよね！？ ……2人とも！」

あたしの声は届いてる？ 答えてよ！

答えて！ ……

「夢は終わりだ」

……

ドクン。

ハッ……！

……あたしの意識は返ってきた。心臓の音のおかげだ。

一瞬。

あたしは、夢を見ていたみたいだった。

「寿也……？」

我に返ったあたしは、状況を見る。

ココは確かに千歳くんが寝ている病室の。

……

「……」

置かれていたはずの、自分の両手を見た。しかし。

さっきまでは その下に、千歳くんの体があったのだ。あつたはずだ。

しかし しかし。

そんなバカな！

ベッドの上には、誰も寝てはいなかった。

「いや……」

あたしは小さく声に出した。

いつの間にか泡も光も無かったんだけど。
そんな事どうでもよかった。

居ない。

誰が……？

「ちとせくんっ……！」

嫌だ。

「ちとせくんーっ！」

第91話（クリスマス・ローズ）

千歳くんが消えた。

ベッドの上にも、横にも。部屋の隅から隅を捜しても。

千歳くんの姿は……

無かった……

「……っく。……う、うう……」

あたしの　しゃくりあげる声だけが、部屋の中で響いていた。もう今日だけで何回泣いただろうか。それでも涙は出てくる時には容赦なく出てくる。

勝手に出てくる。

「ごどぜ……くん……」

鼻が詰まった　みつともない声。そして　あたしは床にヒザを落とし、ベッドの上のシーツに　つかまるような格好で……ひんやりとした白い面積に顔を埋めた。

おかしい。

おかしいよ。

体温の気配すらベッドに残してくれないだなんて。

「ごどせ　くーんッッ……！」

周りの人間は　こんなボロボロのあたしをどんな風に見ていて何を思っていたのだろうか。

誰も、しばらくは　あたしを見ていただけで何もしなかった。それとも出来なかった？

電波の声も無く。

あたしは たった一人で悲しみの崖っぷちに立っていたんだ、きつと。

泣くしかななくて。

ベッドのすぐ真横の床で寿也が倒れて気を失っていた事なんて、全然目に入らなかった。

あたしも。

泣き疲れたのか気を張っていたのが崩れたのか。

バタリと倒れ……世界が暗闇になった。

翌日……。

朝日が窓から差し込む。

患者が数人居る、大部屋の病室。向かい合わせになったベッドが2つずつ3列に並び、カーテンでそれぞれベッドは仕切られている。

寿也は、真ん中あたりのベッドの場所に寝かされていた。

あたしがクリスマス・ローズの花束を持って入り口から入って行く。

「寿也」

「よう」

あたしの顔を見るなり、軽く返事を返してきた寿也。ベッドに近づくと、上半身を起こしている寿也は側にあった背もたれの無いパイプイスを引き寄せた。「ほら座れ」

「……………？ ありがとう……………」

あたしは一瞬、躊躇ちゅうちゆした。わけは後で話す。
「花なんか わざわざ買ってきたんだな。もうピンピンしてるってのにさ。いつ退院したって おかしくない」
そう言っただけで笑いかけて寿也は あたしから花束を受け取った。受け取った花束を見て、また微笑んだ。

……。

……あたしが無言なわけ。

「ん？ どした真木。座れよ」

再度、寿也がイスの上を叩いて促した。

「ああ、うん……」

あたしは座る。

寿也は横の棚の上に花束を置いた。

「そつだ。もうすぐクリスマスだっけ。おかげで思い出した。もしかしてソレ狙ってたわけ？ 思い出させるように」

「うん。まあ、花屋さんの店先で たくさん置いてあったから、つてのもあるかと。ねえ、それより寿也」

「ほいほい。何？」

ほ……

あたしは また躊躇、動きが止まる。

あたしの感じた違和感は、さつきから正常に反応していると思う。

「……退院する前に もう一回 精密検査しない？」

第92話（予知）

精密検査をして下さい

あたしのジョークは完璧だったはずだ。どう突っ込まれるんだろうか。

「する必要はない」

あっさり返された。それもそうか。

「寿也……だって、何か、ヘン……」

あたしは素直に心配した。寿也はあたしの顔を見て、またクス、と笑う。

寿也が普通に笑っている。

おかしい。

いや、何だかその言い方も おかしいんだろうか。
いつそ普通って何。

「僕がヘンだって？ 僕にとっては普通の態度だよ？ 真木」

手を広げて意味ありげに あたしの目を見た。見つめられて あたしは何とも言えない顔をする。困った あたしは「ねえ。どういう事なの」と聞かずには いられなかった。

「千歳の奴、バカじゃないけどバカだな。考えすぎやがって」

寿也が そんな事を言い出した。

消えてしまった千歳くんをバカ呼ばわりするだなんて。あたしは憤慨。でもグツと我慢する事ができた。寿也は気にする風もなく、坦々と言い出した。

「もつと単純に素直に受け止めればよかったんだ。余計な事をゴチャゴチャと考えすぎて。結局は滅ぶんだ、自分の首を絞めてね。もつと単純に……母は」

チラッと、窓の方を見た寿也。窓は開いてなかったけれど、開け

てほしいと思っただのかもしれない。

思うだけで、開けようとはしなかったのかもしれない……。

するとたまたま、窓際に居た患者さんが窓を一つ開けた。

本当に偶然だ。何で開けてくれたのだろうか？

「母には未来が“見えて”いた……」

未来が“見えた”だけ。

……だから寿也は窓を見たの？

窓際の患者さんは、黒い下敷きを持っていた。そしてその上にあった『何か』を、窓の外へパラパラと落とした。

何だろう？ ゴミだろうか？

あたしはジツと始終を見ていたんだけど。わからずにいたら、寿也があたしの疑問に答えるかのように言った。

「ただ単にケシカス捨てただけだろ」

「ケシカ……ああ、消しゴムのゴミかあ……」

見た所。その患者さんのベッドの上には小さめのスケッチブックが紙面を開かせて置いてあった。そしてその横には鉛筆と消しゴムだ。……

そんな特段変わったもんでもない光景から、あたしは寿也の方へと向き直した。

「ま、ゴミはゴミ箱に」

ボソリと寿也は呟いた。

「話を戻すけどさ」

すぐに仕切り直す。

「予知のできる母は、真木に『シャンプー』、千歳に『リンス』。そして僕には『真木を助ける』とのご命令だ。その結果、どうなった」

「って……ご覧の通りだけど……」

どう答えていいものかわからない。……難しいよ。

「そ。ご覧の通りだ。こうして、僕らは繋がった」

繋がった……？

あたしはポカンとして肩の力を抜いた。え？ 繋がった、って……？

「見事だね。母は自分の予知を信じて、未来に全てを賭けた。僕らは縁で繋がり、そして……」

「そして？」

ゴクリと息を呑んだ。何なに、何なの！？

寿也は最高級の笑顔を見せた。

ゾクリ。

あたしの寒気が走る。

「結果、僕らは一つになった。千歳は……」

僕の中に居る」

第92話（予知）（後書き）

【あとがき】

解説。窓うんぬんの所は、その前の『ゴチャゴチャ考える』例です。

作者、実際に どうやら読者さんを悩ませすぎてしまってるんじゃないと。

ゴチャゴチャゴチャゴチャ。

第93話（大砲攻撃）

あたしはガタ、とイスから身を引き立ち上がった。「い、い、い、いいいいっ!？」

意味不明。理解不可能。奇声発生。魑魅魍魎。

ちみもურიよう？

「真木ちゃん」

あたしが腰くだけていて顔を上に上げると。

いつの間に病室に入ってココまで来ていたのか、真さんの姿があった。手には、小さな菓子折りの箱を持って。もう片手に白い大きい紙袋をぶら提げていた。

「真さん……とと」

あたしは真さんよりも少し図体の大きな、後ろの人物に目がとまった。

アルペンさんだ。

ああ、それで ちみもური……オホン。

「おう。さっき到着したばかりだ。無事か、2人ともは2人。」

あたしは下口唇を噛み締める。ザクンと心に切り込みを入れられた。

「スマン ！！」

「!?!？」

アルペンさんが あたしたちに向かって そのツルピカな頭のてっぺんを見せ……た。

「ア、アルペンさん!？」

仰天して大きな声を出したのは あたしだ。いきなり頭を下げて謝られてしまつて、奇妙なものを見た2になつてしまつたではないか!

……と、あたしが怖々とアルペンさんを見守ると、アルペンさんは わけを説明した。

「私が、あんなものを持つてきたばかりに……」

あんなもの。

『恒星トリートメント』の事だ。それを飲んで千歳くんは。

「試作とはいえ完成を喜んで調子にのつたばかりに。もつと嚴重に扱うべきだった。持ち込むものではなかつたんだ。取り返しのつかない事に……すまなかつた!」

もう一度、テカる頭を見せてくれる。

もういいよ、もういいのよ。アルペンさん……。

あたしは無言だつたけれど、心の中では そう思っていた。

「いや、アルペン。俺だつて『持つて来いよ』みたいに焚き付けたんだから。そう自分ばかりを責めるな」

優しくアルペンさんの肩を2度ほど叩く真さん。

あたしもアルペンさんの誠意に感動して、少し頑張つて笑つた。

あんまり頭を見せると、黒マジックで落書きしちやいますよ、と。苦笑いになつてしまつたけれど。

「どつちが悪いでもないよ。悪いのは俺」

ベッドから、寿也が言つた。「俺?」

首を傾げた真さん。あたしと同様、何か引つかつたような顔をした。

あたしと真さん、それからアルペンさんと。寿也をジロリと見続

ける。

「飲んだ自分が悪いんだ。飲んだ……僕、俺……千歳が」

寿也は、少し憂いを帯びたように……微笑む。子供らしくなく……

…大人に見えた。

「どついつ事だ？」

「どついつ事なの、寿也」

問い詰めた。

すると寿也は、自分の両腕で自分の体を抱きしめた格好になった。

「!?!」

「俺と寿とは、やっと一つになれたんだよ。うふふ」

恐らく場に居た全員。

衝撃という名の大砲攻撃を受けた。

「ひぎゃあああああッッ!!」

……。

叫んだのは、たまたまそのタイミングで後から病室に入って来た先生だった。

看護師さんの手に持っていた重量のある花瓶が、先生とすれ違いざまに肩がぶつかって落とされて。先生の足先の上に見事にズドンだ。

「ああ良かった花瓶は割れてない。大丈夫ですか!？」

慌てた看護師さんは花瓶を拾った。

先生は……。

明日、寿也はひとまず退院するつもり。

第94話（真木の知らない話 その1）

真木の知らない話をしよう。

世間では、クリスマスが近づいてきていた。店が並ぶ街の通りを歩くと、何処からでも あの歌が聞こえてくる……そう。

ホワイト アンド ブラックスター ファーストシングル、
『ケキもいいけどハヤシもね』だ。

12月10日に全国一斉発売である。

初回特典、ハヤシライスの素が小袋で付いてくる。ご飯にかける
とハヤシライスの気分を味わえる。

さりげなく中国産だった。

シングルはヒットを飛ばす。オリコンチャート初登場1位という
驚異を生み出した。

ホワイト アンド ブラックスター。本職は『シロとクロ』とい
うお笑いコンビ芸人である。

「けっえきもいいけど、ハヤシさんは〜」
と、つい寿也でも口ずさんでしまうほどの熱狂支持的ソングとなっ
ていた。

寿也は、母親に頼まれた買い物の途中だった。青地で背中に大き
な蜘蛛がプリントされ『DON』と書かれた、アウターウェアを着
ていた。足元の裾がクシュとなったデニムパンツ、後頭部に今度は
シルバーで蜘蛛の絵が描かれた黒いキャップという……ストリート
スタイルだった。

そんな寿也とも千歳ともいえない新・寿也が、スーパーを出てく
ると。

地味なコートに身を包んでいた真が居て、寿也を呼んだ。

「やあ、リニユール寿也くん。見かけたんで、ちよつと待ち伏せた。話がある」

寿也は肩をすくめた。

「チエケらつきよ！」

スーパーの袋の中にはカレーの材料が入っていた。

「君たち2人はシャンプーのボトルに触った事があったかい？」

少し空が暗くなりかけたところで、真と寿也は公園の横の脇道を横並びに歩いていた。2人の吐く息の白さが、寒いという事を証明している。真が切り出した言葉に寿也はしばらく間を置いた。

「無いけど」

ぶつ、と噛んでいたブドウ味のガムを小さく膨らませていた。

真は何故だか寿也に微笑みかける。

「そうか……」

そうして真は目を細め、山の向こうに沈みかけた夕日を見つめた。

「君が真木ちゃんを救ったのか……」

パンと。

寿也が膨らませたガムは小さく割れた。

「バレたか」

それだけを寿也が答えた。

2人が理解しているそれとは、真木がシャンプーを飲んで瀕死に倒れていた時の事をさす。あの時に寿也はイチかバチかの賭けに出て真木を救った。その時の事は、寿也は誰にも言うつもりは無かった。

「ボトルを調べていてね。シャンプーには真木ちゃん、岩生、寿也

くんの、リンスには千歳くんの指紋だけが付いていた。と、いう事はだよ。君の……寿也くんの指紋がシャンプーに付いているのは、おかしいね。いつ付いたんだらう？」

雪がチラつく。

ますます吐く息は白くなっていた。

「君は今 嘘をついたね？ さてそれは何故か。……で、カマかけてみたわけだけど。やっぱり、真木ちゃん生還には君が関わっていたわけだ」

楽しげに真は言って寿也を見た。寿也に表情は これといって無い。

「嘘つきでも何でも、誰にどう思われようが僕は別に構わない。でもまあ、言っとく。タイムマシンで過去に行った時に僕は真木を……死にかけていた真木を助けたさ。それ以外にボトルには触っていない」

聞いた真はすぐに満足したように「ハハハハハ！ よくやった！」と大口を開けて笑い出した。

「君は立派に真木ちゃん王子、もしくはナイトになれたんだね。しかし誰もそれは知らない。ああ何て皮肉なんだ世は！」

空を仰ぎテンションの上がる真に、寿也はついて いかなかった。

第95話（真木の知らない話 その2）

真木の知らない話をしよう。
パート2。

千歳が消えた事で、あじさい学園では千歳の失踪に とても大騒ぎしていた。

真木と教師・岩生の住むアパートに、ある老人が赴く。年の頃は60くらい、黒いコートと帽子を身につけていた。帽子からはみ出て生える白髪がよく黒のおかげで目立つ。

杖を持ち、茶色いブランド物のバックを持って玄関のドア前へと立った。

呼ばれて飛び出て教師・岩生がドアを開けると、その老人は帽子をとり軽く会釈する。

「わたくし、あじさい学園 園長の松井と申しますが、こちらに…」

…
と、声を出しかけた時だった。

いきなり。

ビュビュビュ！

「うぐっ……！」

苦しい声を上げ、老人は前のドアに寄りかかり倒れていった。

何が起こったかという。「危なかったなあ、岩生」

真である。

老人の背後から、明るい笑顔で登場した。

「ななな、何をしたんだオイ……真」

ドアを開けたただけの岩生は、今 起こった出来事に目をパチクリさせ嫌な汗をかいていた。

もったいぶらずに言おう。

真はスタンガンのような物を老人の首筋に当てて気絶させた。

「ノンノン。そんな物騒な代物ではない！ ただのミルキービーム発生装置、『ミル・シヨック』！」

真が自慢げに言った。教師・岩生が「何だそれは」と言及した。

「寿也くんの発想に触発されてね。肩こり・腰痛それと悩みに効くんだ」

「悩み……？」

「気休めという言葉があるだろう。アレアレ。脳を刺激して、暗い所を取っ払うんだ！ 全国の皆さんの気の病も迷いもヤバイも、コレで刺激を与えられりゃ一発解消！ 夢の道具！」

見たか！ と真は高く、物を持った手を掲げた。

「ただし まだ試作段階」

……と、小さく補足する。

「そんな事より何やってんだ！ そんな物で人間を攻撃して！ あじさい学園から わざわざ来て下さったんだぞ！」

岩生、パニックになる。両手で頭を抱えた。

「だからヤバイと思ったんだってば！ 千歳くんはもう居ないだろ。きつとココに目をつけて来てしまったんだと咄嗟の判断だった」

真はそう言つと、うずくまるようにして倒れていた老人を起こそうとした。

老人はパツと目を開け起き上がり、四つんばいのまま真の顔を見る。

「あなたは……ハテ？ わたくし、何しにココへ……？」

「おっしやラッキー」

真、パチンと指を鳴らした。

「ラッキー……？」

まだボンヤリとしたままの老人を、真は最高の笑みと背景効果の薔薇で迎えた。

「さ、さ。送って参りますよ。ご老人。あなたの余生は、きっと薔薇色」

そんな事を言っつて、ただの背景効果のはずの薔薇を一輪とり老人に渡した。

すっかり真のペースにはめ込まれ、教師・岩生に見送られて2人はボロアパート『しよぼクレ荘』を後にした。

真は老人を、あじさい学園まで送っつて行き……。

あじさい学園の場所を突き止めた後。

アルペンと共に、あじさい学園中の人々の記憶を消しに再び訪問した。

消す？　こんな大人数を？

どうやってか？　『ミル・シヨック』で地道にか？　いや　ちよつと違つ。

『ミル・大シヨック』

強化版が存在していた。

第96話（パーティー）

あたしは、先生と。寿也の家のクリスマスパーティーに呼ばれた。寿也のお母さんは大喜びで、あたしたちを出迎えてくれる。リビングへと通された。あたしたちは長四角いテーブルについて、上着を脱いで寿也のお母さんに預けた。

あまり他人の家を訪問する事に、こう見えても慣れていないあたしと先生は少し恥ずかしそうにしていた。ボロアパートの狭くて汚い所に住んでいるものだから、こんなリッチでキレイに掃除が行き届いている部屋に座っていると、何だか落ち着かなく場違いな気がしてくる。

今日はクリスマス・イブ。部屋角隅に置かれた、腰の高さまでのクリスマス・ツリーが、ベルやサンタといったオーナメントで着飾られて場の賑やかさを演出していた。

壁際にヒツソリと価値高そうな、花の装飾を施された花瓶が。ピンク色の、床一面の大きさを敷かれたカーペットを下に。しかもホットカーペット。そして……。

「はあい〜。キャンドルの用意が できましたよお〜」

寿也のお母さんが、リビングへと繋がるキッチンから呼びかけた。キャンドル？

「今日はキャンドル占いだとさ」

ソファに並んで座っていた寿也が、肘掛けに肘をついた格好でつまらなそうに あくびした。

「いい！？ いつの間にそんな予定に」

そんな趣向は全く聞いていなかった。あたしなだけだ。いや、言ってくれたんだらうか？ 一体いつ。

「キャベツ占いよりマシだろ たぶん」

寿也のフォローは あまり効果は無い。

「キャンドル占い？ 何だかエキゾチックで神秘的だね。どんなだろう。面白そうじゃないか」

はっはっはと先生は笑った。

……知らないわよ あたしは。

倒れて眠っている先生を放っておいて、あたしは寿也に呼ばれて。寿也の部屋へと足を運んだ。

寿也のお母さんはキッチンで、夕食の用意をされていて下さる。あたしたちは手伝わなくていいと言われて、手もちぶさだったのだ。そうしたら寿也が「来て、部屋。いい事 教えてあげる」と。意味深な言葉を言い あたしをそんな目で見た。

何だかなあ。

寿也が変わってしまったから、まだ以前のギャップには慣れていないみたいだ。いや……違う。この感覚は……『出合って始めの頃』だ。まだ知り合って間もない頃の感覚に、似ていると思う。

あたしは戸惑い……寿也に魅かれて……どうしていいのか事の成り行きを見守るしか無く。

寿也のペースの成すがまんまだ。

そんな、おかえりとも新鮮とも言える奇妙な感覚の中に あたしは居た。

「ほら。入って」

部屋のドアを開けながら、中に入るようにとあたしを促した。

「……」

あたしは無言。

寿也が何かを企んでいるような気がしてならなかったからだ。少し入るのに抵抗があった。

入った途端に何かが降ってくるのか。飛び込んで来るとか。もしや爆発。

「またゴチャゴチャ考えてる」

ぎくり。

寿也は あたしの事なんて何もかも お見通しみたいに笑っていた。

よく笑う。

「本当に よく笑うようになったね。寿也」

「……どうもね。さ、どうぞプリンセス」

あたしは、ドアから中へと入っていった。

相変わらず何も無い部屋だった。机もベッドも無い、正面にはペランダへと続くガラス戸があるだけの、素っ気無い部屋。

しかし目に飛び込んできたのは床の中央にポンと置かれた縦長四角い……

『ジエング』と書かれた箱。

第97話（星）

「何か皆で遊べる物と思って。この前買ってきたばかりの新品」
部屋の中央の床の上にポツンと置かれただけのジエンガの箱。パ
ツケージには大きく元気よく『レッツ・ジエンガでゴー!』と。

……2人で何処まで盛り上げる事ができるんだろうか。
とりあえず寿也は進歩したらしい？

「照明を消すけど。いい？」

「え？」

寿也が、先に部屋に入ったあたしの後ろで言った。入り口の横に
ある照明のスイッチに手をかけている。どういう事だ？

まさか……。

あたしの脳裏に“狼に食べられる赤な ずきんちゃん”というイ
メージキャラが思い浮かんだ。

思ってしまったものは しょうがない！

どうしよう???

しかし。あたしのそんな様子をよそに、寿也は照明のスイッチを
押して部屋を真っ暗にしてしまった。

「きゃ……」

まだ心の準備ができてない状態だったので、身がすくんでしまっ
た。

しかも同時に目を閉じた。

うわあああ、あたし、どうなるのおお!?

一気に、熱いものが全身に ほとばしる。そんな風に身を固くし
ていると、寿也が言った。

「目を開けて」

あたしは恐る恐ると……目を開けた。

「うわ……」

あたしに衝撃が走る。

プラネタリウム。

部屋はプラネタリウムと化していた。

暗い中で一つ。もう一つ、そしてもう一つと……ううん、いっぱい。点に見える光が、空間を作る。おそらくは、暗い所で光る蛍光塗料が塗ってあるか、蓄光シールのような物でも点々と貼ってあるんだわ。

四方八方に散りばめられた星。

それぞれは個性を持っているの。光なの。エネルギーなの。だから強く感じるのよ。

それがいっぱい存在してるの。宇宙なの。あたしはここに居るよ……。

あたしもそれに入れて……

「きれい……星が部屋中に……」

ちつとも知らなかった。前に勝手に入った時も気がつかなかった。

「僕の秘密その1。でもこれは、まだ最近にした仕掛け」

あたしが振り返る。寿也も天井の方を見たりして、嬉しそうだった。

「その1？」

「その2は……」

少し、元気を無くしてしまった寿也。何故だかわからないけれど黙ってしまった。

どうしたんだろう。

あたしはテンションが上がって寿也に明るく微笑みかける。

「すっごいね！ だから部屋には何も置かないとか？ ただの気分とかじゃ無かったんだ。あたし変人なんだとしか思わなかったよ。言ってくれたらよかったのにさ。いつも何も言ってくれなかったんだから。でもでも！ 千歳くん要素のおかげで、寿也完全体になれたもんね。何かカッコイイ。正義のヒーローみたい！」

適当な事を言う。でも嘘では無い。
伝わりましたでしょうか？

あたしはバンザイまでして寿也に気持ちを伝えただけけれど。どうでしょうか？ ミルキーボンバーの寿也くん？

……しかし、寿也に これといって変化は無い。クスリとも笑ってくれなかった。
どうして……？

「寿也……？」

あたしの前で。あたしたちは突っ立ったまま。
星に囲まれて。寿也が こしらえた空間の中で。

無言の時間が過ぎていく。

第98話(3つめ)

「僕は ここで、ロケットを作るから。待ってて、真木」

「へっ?」

「それがその2で、僕の夢。夢だから、誰にも言いたくなかったんだけどさ。恥ずかしいし、言ったら消えるかも、って思ったりしたし」

暗くて表情はボンヤリとしか見えないけれど、暗い そのおかげで空気は澄んで声はよく行き届いた。寿也の言葉の一つ一つが、とても大事に今は思える。

見えなくても、寿也の存在を離さないように しっかりと受け止めなくちゃ。

「素敵! ロケットを寿也が作るの? あたしもそれに乗ってみたい!」

あたしは興奮続行中で寿也の前で両腕をブンブン上下に振り回す。すぐく、わざとらしいくらいに はしゃぐあたしを見て、寿也はやっと目に見えて笑い出した。そしてしまいには お腹まで抱えるほどに。

「あつはつはつは。気が早い。僕の想像の向こうへ行っちゃった。バカだけど真木、先読みできる お前はやっぱり将来りこうになる。楽しみだな。楽しみだ」

さりげなくバカと言った寿也。あたしは聞き逃さなかったわよ。でもそれも一掃してしまうほどに、今の あたしたちには笑う以外無かった。

「いつかこの部屋で、じっくり時間をかけてロケットを作るんだ。だから ここには何も置かない。僕の夢」

夢。

夢かあ……。

あたしも寿也の夢に参加できたらいいのに、とちよっと思っただ

けれどな。

「完成したら、真木を迎えに行くよ。ロケットに乗って」

「え？」

あたしが寿也の顔を改めて見ると。寿也も あたしの方を真っ直ぐに見つめて。

何か、意志のようなものが伝わってきた。

どういう事？

「それで一緒にミルクィ星に行ってみよう、真木。一緒に」

「……」

一瞬、びつくりして あたしの時が止まった。しかも、寿也の真っ直ぐな強い瞳に圧倒されっ放しだった。

あたしは強い力で魅きつけられて目を寿也から背ける事ができずにいたけれど、口元だけはニヤツと笑みをこぼした。

そして あたしがうん、と言おうとする前に。

「真木が好きだ」

と。

……言った。

「……」

……。

……あたしは危うく、ハアそうですか、と言う所だった。聞き流す、という失態を犯す所だった。

「とっ……」

あたしが ただ、何か声を発しようだけを思って出しかけると、下の階の廊下から元気よい寿世のお母さんの声がよく響いてきた。

「 ケーキ食べましょおお〜う〜 」

……あたしはケーキを食べきれぬ事ができるんだろうか。

第99話（お別れ）

あたしに悲劇がやってくる。

ヒデキでは無く、悲劇だ。ちっとも懐かしくなんかない。

寿也のお母さんが作って下さったクリスマス用の豪華な料理を平らげ、ケーキにまで手を伸ばし、部屋の照明を消して『ケーキもいけど きよしこもね』というシングルのカップリング曲を歌った後、ろうそくの火を消した。

一連の時は問題無く緩やかに過ぎて、切り分けられたケーキをおいしく頂いていた最中の事だった。

話を持ち出したのは寿也の お母さん。

「これからもウチの寿也をよろしくお願いしますね。ホントにもう（手が微妙にかかる子で）」

独特の雰囲気と口調で言ったのを、先生は予想外な返事で返した。「年が明けたら、真木だけを先にオーストラリアに やります。信頼のできるミルクィの、真の元へ」

顔は真剣だった。

「え……」

あたしはケーキの一欠けを口に放り込む前で静止した。

驚いたのは あたしだけでは無い。寿也のお母さんも驚いた顔で「ええ！」と声を上げた。

「何度も考えたし、真たちとも相談して決めた事なんだ、真木。先生は、受け持った担任のクラスを卒業まで見送ってから行くよ。それまでは少し向こうで辛抱していてほしい。そしてわかってほしい。真木、お前は王女なんだ。普通のミルクィじゃない。周りは真木がどう思っていようと、お前を王女として見る」

何度かは思い出す事はある、あたしに まつわる邪魔な事実。

あたしは王女だった。

「緊急とはいえ、王女の存在は地球上のミルキーたちに知れ渡つたと真に聞いた。真木を狙つて、どんな奴が やつて来るのかわからない。悪い連中かもしれない。だが、残念な事に、先生たち人間じや真木を護る力には限界があるんだ」

あたしは王女。

「オーストラリアのMWS研究所の警備システムは嚴重で素晴らしいと聞く。嚴重とはいつても、鳥力ゴじゃないんだぞ。皇居並みの敷地面積と設備だ。中に居ても外に居るのと同じように過ごせる所だ。真木は、そこで暮らせる。どうか、わかつてほしい」

あたしは。

「ま、しゃーないよ。僕ら子供だし」

言ったのは寿也だ。

寿也？

「まああ……なら、仕方ないわ……。真木ちゃんには、かわいそうだけれど……。私たちが真木ちゃんを助けられなかった時の事を考えると、怖いもの、とても」

寿也のお母さんもため息混じりに答えて。

そんな……。

「許してほしい、真木。お前のためなんだ」

先生。

皆。

皆が、あたしの顔色を見ている。あたしの返答を待っている。あたしの……。

あたしが頷いてイエスと言うのを、待っている……。

「やだ！」

あたしは睨んだ。

握ったままのフォークと、お皿の上に まだ食べかけで半分以上を残しているケーキを。サンタの形をした飾りの砂糖菓子は あたしがもらった。ケーキの生クリームの上にチョココンと置かれている。最後に食べようと思っていた。

甘い甘い、砂糖で出来たお菓子。

あたしの考えも甘いんだろうか。わがまま以外の何ものでもないのだろうか？

「あたし、行かないからね！ 外国なんて！ 何で皆で決めちゃうのよ……」

あたしの両目からはボタボタと受け皿が必要なくらいに涙が出てきていた。

「真……」

隣に座っていた先生が、あたしの肩に触れようとする。

あたしは手を払いのけた。そして素早く立ち上がった。

「皆、大嫌いッ！」

あたしは走り出した。リビングのドアから玄関へ向かって廊下をつき抜け、靴を履いて。

「真木！」

「連れ戻して来ます！」

小さくなっていく声を耳に入れながら。

外の暗闇の中へ。

氷のような冷たさの空気があたしを出迎え、励ましの代わりに雪を空からプレゼントしてくれた。

第100話（ロケットに乗って）

あたしが一番腹の立ったのは寿也だ。何で あんな事をシレッと言っの。

『ま、しゃーないよ。僕ら子供だし』

……だつて！

あたしを好きだと言ったのは 何処のどいつだ！ 許さない！

あたしはガムシヤラに走った。雪の粉も静かに数を増やしていく。

あたしが自然と向かう先は、背犬川だ。背犬川のほとりだ。

いつもココだ。ココしか行き着く場所が無いみたいに。

「ひくっ……」

あたしは止まらない涙を拭いた。心臓の鼓動音が、まるで余計に涙を製造でもしているような。ドクドクと流れてる涙。

「何処にも行きたくないよお……」

と、声を漏らした。

「……」

歪んだ視界の中で、川は平気で流れている。時々、ゴミをも流す

川。川原に石が。枯れた葉の長い雑草が。

夜の黒が。雪の粉が。家の明かりが。吐いた白い息が。

……存在しても あたしに何もしてくれない。

「よお姉ちゃん。何一人で泣いてんのぉ」

あたしが振り返ると、若い背の高い男が近づいて来ていた。ワイシャツを着てネクタイを緩めていた、どう見ても酔っ払いにしか見えない男。ズボンから だらしなくシャツは出しているし、片手で書類カバンと上着を持っている。クリスマスでも仕事ですかなんて

聞いている余裕は無い。

何、この人。「オジサン、ヨシヨシしてあげよーかあ〜？」
そんな事を言いながら、あたしの手を掴んできた。

「ちよ、ちよっと!」

もちろん、あたしは必死になって抵抗した。「いいからあ〜」

「悪ふざけは他所ヨソですてくれる」

違う所で声がした。よく知っている声……寿也だ。寿也が、あた
したちの背後まで走って来て、あたしに追いついた。

「なあにボク〜。王子さまあ〜?」

酔っ払いは、寿也に絡む。

「うっさいなノンダクレ」寿也も威嚇する。

「何だとコラ」

酔っ払いが寿也の肩に掴みかかった。寿也がバシ、と邪険に手を
振り払ったのが癩かゆに障さわったらしく、男は寿也を殴った。

バタツ。

寿也が殴られて地に転んだ。「寿也っ……!」

あたしが慌てて寿也の方へ寄ろうとすると、そんな、あたしの脇
をすり抜けて。寿也は男に……。

「消えるハゲ!」

と、下から、すくい上げるようにパンチをお見舞いした。
アゴ下から入ったその一発の衝撃は。

ボグアツツ!

キーン。

キラッ。

……男は、空の お星様になった。

「アイテテ……」

珍しく、寿也が痛がっていた。「寿也！ ……ごめん！」あたしは即座に謝る。

「大丈夫。ちよつと焦っただけ」

殴られた ほつぺたをこすっていた。「……」

あたしが黙ると、「どうした？」と寿也が聞いてきた。

「あたしたち、子供なんだね……どうしても……」

またひとしずく。

そして つう、と一筋の涙が あたしの頬を伝う。

「そうだな」

雪が、あたしたちを隠す。全然降り止まない雪は、足元を白に染めていく。

「わかってても あたしは……嫌だった……こんなに、好きなのに。寿也の事……」

下を向いた顔を上げる力も無い。もう涙も枯れ果てる。涙が枯れたらもう……。

あたしは、オーストラリアへ。

「コレ……」

「……？」

「クリスマスだから。用意しといたんだけど」

上着のポケットから出されたのは、ラッピングされた小さな縦長

の箱。それをあたしに手渡される。

「開けてみて」

寿也に促され、あたしは箱の包みを開けた。

「あ……」

シルバーチェーンのペンダント。トップには、三角形を描いたよ
うな物が。中はくり抜き、真珠が可愛らしく一つ。「可愛い……」
と、あたしは息を漏らした。

「コレ、あたしに？」

寿也が微笑んで軽く頷く。

「まるで楽器のトライアングルみたいなソレ……頂点の一つ一つが、
僕たち3人を表している」

寿也がそう言っつて、ペンダントの先の三角形を……手に取り、言
った通り頂点の一つ一つを指でなぞっつていった。

「ココが真木、ココが僕……それから、……千歳だ」

少し悲しげで、切なげで……あたしは頷きながら「うん……」と
少しだけだけれど、笑う。

「大人になったら迎えに行くよ、真木を……だから。辛抱して、待
つてほしい。コレに誓うから」

本当？

このペンダントがその証？

嘘じゃない……よね？

あたしは目でそう聞いた。歯を食いしばりながら。

もう枯れて出ない涙の代わりに、頬や目元に落ちて当たった雪が
溶けて水になって小さく流れる。

寿也はそれを指でチョイと拭っつてくれた。そして。

「約束する。……真木」

寿也の顔が近づいたかと思っつたら、あたしのオデコにそつと。キ
スしてくれた。

雪で、全然景色が見えなくなつてくる。

でも、目の前の寿也の存在は強く感じるの。

例え、遠く離れ離れになっても。

あたしたちはミルキー電波を飛ばせるわ。だから、それをキャッチしてね、寿也。

必ず。必ずよ、寿也。約束を守って。嘘はつかないでね。

約束だよ……。

年が明けて。

3学期が来る前に、あたしは旅立つ事になった。

「さ。行こうか。プリンセス・リリン」

飛行機の搭乗入り口で。真さんと、アルペンさんと。そしてあたしは、これから飛行機に乗ってオーストラリアへと向かう所。お見送りの先生が、あたしたちが去るのをずっと見ていて、いつまでも別れを叫んでいた。

「元気でなあ〜！　すぐ、そっちに行くからなあ！　真木いいい！！！」

号泣している。……恥ずかしいよお。

「寿也くん来なかったね。だいぶハツチャけてたから、結構今後が楽し……いや、心配だなあ」

あたしの横に立つ真さんがハハハ、と笑う。あたしも笑いながら言った。

「寿也なら、大丈夫。あたし信じてる」

飛行機に乗る前、見上げた青空の中で。あたしの脳みそは想像する。

いつか寿也の乗ったロケットが、あの空の向こうから飛んでやって来るんだと。

あたしを、迎えにね。

約束守ってよ、嘘つき寿也。

……

……

……これは、星と宇宙と、ミルキーウェイ星人の、物語。
寿也とあたし、真木の、小さな恋の物語。

2人はまだ子供だったけれど、
寿也は約束してくれた。

大人になったらロケットに乗って迎えに行くと。
海外に居る、あたしの所に来てくれると。

ロケットに乗って

ロケットに乗って

嘘つき寿也はきつと、夢を叶えてくれる。

あたしは そう……信じている。

《END》

第100話（ロケットに乗って）（後書き）

【あとがき】

「ご読了ありがとうございました。」

3を……と言いたい所でもありますが、全然未定です。しかしと
りあえず。

終わったよ〜。

2008年4月24日 あゆみかん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4440d/>

白い銀河に謎の宇宙2 - 惑星シャンブー効用編 -

2010年10月31日01時29分発行